王皇后

死生路異る、此より乖かん。

我が熒獨を奈何せん、心中哀しむ。

と。涙下つて嗚咽し、坐するもの皆歔欷せぬはなかつた。少帝は徐ろに唐姫に向つて、

「卿は王者の妃である。我れ死するも必ず他人の妻となるな。乞ふ自愛せよ、我れは之れより長く逝かん」と。終に藥を仰いで死んだ。時に年十八。唐姫は僅に十五六歳であつたが、父會稽の太守琄に連れられて家に歸り、更め嫁することを勸められたが、固く拒んで聽かず。後、李催が兵を擧げて關東を抄略するに及び、唐姫を掠め去り、その美貌を見て己が妻とせんとしたが、唐姫は素姓も名も秘して言はず。死を以て其の言に從はなかつた。

前漢平帝の王皇后は、大司馬王莽の女であつた。平帝卽位の四年に、莽は、霍光がその女を帝に納れて皇后とした前例により、盛大な儀式を備へて己が女を納れた。帝も后も其時僅に十二歳であつた。莽が九錫を加へ、平帝に椒酒を上つて毒殺したのは后が十四歳の時。その後莽は簒立して帝と稱し、后を更めて嫁せしめんとしたが聽かず。遂に病と稱して引籠つた。後ち莽が漢兵の爲めに誅せられ、未央宮が炎上した時、王皇后は、何の面目あつて又漢家に見えんやと、自ら火中に投じて死んだ。

【五〇】美人掠奪と后妃の無節操

攻略の目的に美人

敵に身を委ぬ

晋の羊皇后

美人掠奪は、國の東西を問はず、往時に於ける社會事象の一つであつた。個人的掠奪は今も往々行はれて居るが、國と國との攻伐に於て、土地侵略の目的の外、美人掠奪の目的が附隨してゐたことは否めぬ事實である。

秦の始皇が六國を滅して六國の宮嬪を悉く收め、晋の武帝が魏・吳を滅して其の姫妾を渾べて拉致した如き、人數に於て最も大きいものである。宋の太祖が後蜀の花蘂夫人を移し、清の高祖が準噶爾回部の香妃を獲て歸つた如き、敢て珍らしいものでない。

國亡び君死し、兩夫に見えざるの貞節を持し、壯烈の最後を遂げた妃嬪も、前章に揭げたやうに多少の例が無いではないが、多くは蠢爾として敵國にその生を偷み、不俱戴天の仇に身を委ね、寵幸に甘んじて子まで生むものもあつた。

晋の惠帝の繼室羊皇后は、賈后の崩後、孫秀等によつて擁立されたものであるが、劉曜が襲うて洛陽を陷した時、羊皇后も捕はれて平陽に送られ、曜が僭して趙王となるに及び羊后を皇后とした。一日曜は后に對ひ、司馬家の兒（惠帝を指す）と我れとを比べるとど

うかと問ふた、后は答へて

「陛下は開國の聖主であるが、彼れは亡國の暗夫である。貴きこと帝王の位にありながら妻子を庇ふことも出來なかつた。妾の捕はれた時は、固より生を望まなかつたが、圖らずも陛下の寵を受けて今日あるを得た。妾は高貴の門に生れ、常に世間の男子の腑甲斐なさを嘆いてゐたが、今陛下に巾櫛を奉じて、始めて世に眞の丈夫の居ることを知り、心賴もしくなつた。」と、大に褒め上げて歡心を迎へた。曜は益々愛幸して、終に二子を生ませ、その死後献文皇后と謚した。

隨宣華夫人

金墉城下水雲昏く、虜騎長く嘶いて國門を出づ。
司馬家の兒何ぞ問ふに足らん。翟茀を賜ひ來つて新恩を拜す。」（宮詞）

隋の文帝の專房の愛を受け、文帝崩後、更に煬帝の愛を受け、その死するや煬帝は傷神賦を作つて之を悼んだ程、二代の後宮に重きを爲した宣華夫人は、隋に滅された陳の宣帝の女であつた。

陳の沈皇后

又陳後主の沈皇后も陳の亡後長安に入り、常に煬帝の駕に從ひ、煬帝崩後、尼と爲つて天靜寺に入つた。

東晉帝系

國の命脈縷の如し

東

晉

元帝（睿）[1]
- 明帝（紹）[2]
  - 成帝（愆）[3]
    - 哀帝（丕）[6]
    - 廢帝（奕）[7]
  - 康帝（岳）[4]
    - 穆帝（聘）[5]
- 簡文帝（昱）[8]
  - 孝武帝（曜）[9]
    - 安帝（德業）[10]
    - 恭帝（德文）[11]

【五一】 立后と共に齒生え髮伸ぶ

立后と共に齒生え髮伸ぶ

東晉は元帝から恭帝まで十一世百四年の命脈を保つた。その間後宮制度は西晉と格別變

歷代后妃

るところはなかつた。司馬温公が東晉を評した言に

「晉室既に衰へ、中原雲擾し、戎狄腥羶の氣、華岱に薰ず。宮闕蕪沒し、陵廟墮焚す。元帝宗室の疎屬を以て江表に居る。子孫相承け、絕えざること綫の如し。獨り明帝英武、不幸國を享くること永からず。自餘は孱弱孤危、命を虎狼の口に寄す。幾んぞ呑食に遇はんとするもの數、卒に能く其の位號を保ち、宗廟血食するもの百有餘年。群賢既に沒す、敗亡する亦宜ならずや。」

といつたのは頗る要を得て居る。元帝は六男二女。荀妃が明帝を、鄭夫人が簡文帝を生んだ。明帝は二男三女。穆瘦皇后が成帝・康帝を生んだ。成帝は二男。周太妃が哀帝を生んだ。簡文帝は七男一女。李夫人が孝武帝を生んだ。孝武帝は二男一女。陳淑妃が安帝・恭帝を生んだ。

元帝の鄭夫人は、人妻となり一男を生んで寡居してゐたのを、元帝が瑯琊王の時迎へて夫人とし、大に寵したものである。

簡文帝の李夫人は微賤から出て宮中の機織室に入つてゐたが、簡文に子なく、人相見が發見して終に後宮に入れられ、孝武帝と、會稽文孝王、鄱陽長公主を生み、夫人に上り、

醉中の一言で弑殺

一夜に齒生ゆ

頭髮八尺伸ぶ

色黑から美人に

太后と貴ばれた。

孝武帝は弟の會稽王道千に政を委ね、酒を飲んで流連するのみであつたが、妖星が現はれた時、杯を擧げて「妖星汝に一杯の酒を勸む、世豈に萬年の天子あらんや」と笑つた。定安皇后も酒を嗜んで屢狂妬を演じた。後宮美人中で最も寵幸を受けた張貴人は、帝が酒に醉つて、汝年已に三十、亦當に廢すべしと揶揄したのを眞と思ひ、侍婢に假面を被らせて帝の室に忍ばせ、終に弑してしまつた。

× × × ×

成帝の恭杜皇后は、名門の生れで、禮を備へて迎へられ、帝は太極殿に出御し、群臣の賀を受けた。后は幼い時から美人であつたが齒が生えず、長じて婚を求めるものも皆中止した。帝室と婚約が調ひ、納采の日になると、一夜に全部の齒が盡く生え揃うた。

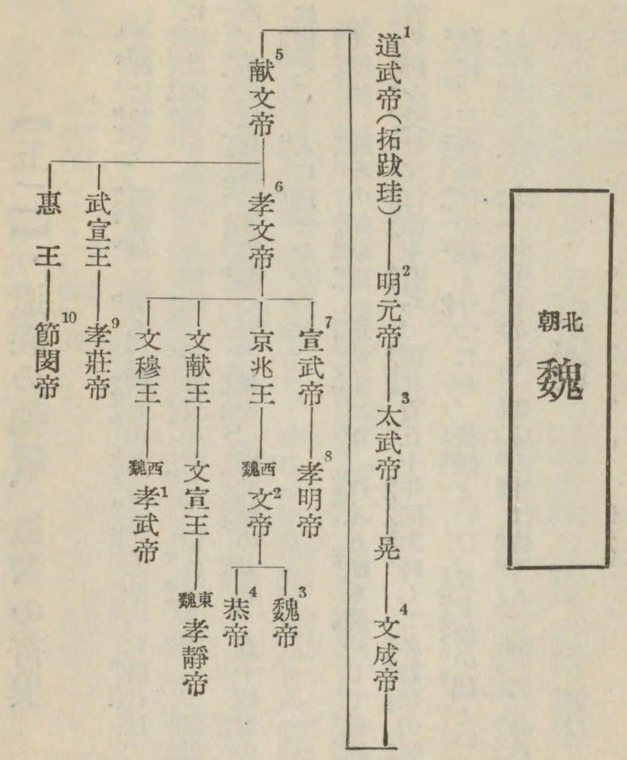
明代にも憲宗が妃を選んだ時、江南の姚善の少女が選に入つた。この時頭髮が尺に滿たなかつたが、吳江を下る二十里ばかりの所で、一夜に髮が伸びて八尺に及んだ。故にその地を八尺と名附けた。宮に入つて寵六宮を傾け、壽王を生んで端懿安妃に冊封された。

遼の聖宗欽哀皇后は初め黝面狠視であつたが、母が或夜の夢に、金柱を攀ぢて天に登ら

立后と共に齒生え髮伸ぶ

んとするに、諸子は皆辷り落ち、后のみ獨りよく登つたので、覺めて後異として居た。間もなく宮に入つて承天太后の榻を拂ふ時、金鷄を見附けて呑んだ。ところが俄に皮膚が白く光澤を發し、美人に早變りしたので太后は驚き、屹度立派な子を生むであらうと言つた。果して興宗を生んだ。

齊に一女あり、東西兩家より之を求む。東は富にして醜。西は貧にして美。その父女に語つて曰く、東を欲すれば左袒し、西を欲すれば右袒せよ。その女兩袒して曰く、願はしく東家に食して西家に息はんと。袒は肌をぬぐこと。



【五二】道義の弛廢、風習の奇異

道義地に墮つ

支那に於て、道義地に墮ち、戰亂の最も甚しかつた時代は、上に春秋戰國があり、下に南北兩朝がある。その間、子は父を弑し、臣は君を幽し、錙銖の利害によつて一族相食み、榮枯は轉瞬の間に起つた。就中、南北朝の如き、五十四君の中で、終をよくしたものは僅に二十人に過ぎなかつた。

北朝は、鮮卑の拓跋珪（道武帝）が、江北五胡を統一して魏國を樹て、南朝は、宋が東晋の禪を受けて江南を有ち、南北百五十年間對峙して各數朝の興亡起伏を閲した。

魏は、三國時代の魏と分つため、後魏といひ、又北朝の魏といふ意味で北魏とも呼んだ。

中宮品次と女職

太祖道武帝の時、中宮を立て、皇后の外は皆夫人と稱し、品秩は等差を設けた。次の明元帝の時は變りなく、三代太武帝に至り、博く良家の女を選び、左右昭儀と貴人を增し、文成帝・獻文帝の時は妃嬪の數漸く多く、孝文帝は、

左右昭儀を大司馬に、三夫人を三公に、三嬪を三卿に、六嬪を六卿に、世婦を中大夫に、女御を元士に比し。

なほ、左の女職を置いた。

典內司、僕作司、大監、女侍中、女尚書、美人、女史、女賢人、女書史、書女、小書女、中才人、供人、中使、女生、才人、恭使、宮人、青衣、女酒、女饗、女食、奚官、女奴。

此等の人員は二千人以上に達した。

皇后死を賜ふ例

魏は鮮卑族であるから、宮中の作法や掟の、從來と異るものが多かつた。皇太子を生んだ后妃に死を賜ふ例、金人を鑄らせて成らねば皇后に冊立せぬ例等は著しいものである。道武の宣穆皇后劉氏は明元帝を生んだが、金人を鑄つて成らなかつたので、そのまゝ劉夫人として置き、明元が皇太子に立つたので夫人に死を賜うた如きが其の一例である。

死者の遺物燒棄

又國に大喪があれば、三日の後その死者の衣服器物の類一切を燒却し、百官及び中宮の紀嬪が、皆號泣して之に臨む例があつた。文成帝の文明皇后は、帝の崩後その遺物を燒く時、悲叫の餘り、自ら其の火中に投じて殉死を企てたが、左右のものが救ひ出して漸く蘇生した。

【五三】 金人を鑄つて吉凶を占ふ

鑄金の卜筮

成否數例

後魏の故事中、前述の如く皇后を立てる時、必ず先づ手づから金を鑄つて人の像を造らせ、完成すれば吉として冊立し、若し完成せねば凶として冊立せぬ風習があつた。これは北俗で、拓跋以來の慣例らしい。皇后のみでなく、國を樹て帝位に登る時は、この鑄金の卜をしたものである。

道成帝が妃慕容氏を皇后に立てる時は、金人を鑄らして成り、直ちに后位に上せた。後ち薨じたので寵妃劉氏を二代目の皇后に擬し、これも金人を鑄らせて占つたが、成らぬので冊立を見合せ、薨後宣穆皇后と謚した。次に明元帝も、妃姚氏に金人を鑄らして成らず、待遇は后と同樣にし、その後に及んで冊立せんとしたが、謙讓して聽かぬので中止した。薨後皇后の璽綬を贈り、謚號を加へて昭哀皇后といつた。次に太武帝の后赫連は金人成り、文成帝の后馮氏（文明皇后）は十二三歳で東宮妃となり、十四歳で貴人に上り、後金人が成つて后に冊立された。

帝王も亦鑄る

胡俗

生母死を賜ふ理由

祈りの言葉

金人を鑄るのは后妃のみでなかつた。爾朱榮が明帝の崩後、自ら立たんとして、孝文及び咸陽王禧など五王の子孫と共に金人を鑄つたが、たゞ莊帝（后は榮の女）のみ完成したので、莊帝を迎へ立つた。齊の高洋が位を僭せんとした時、群臣は皆これを不可としたが己の像を鑄り、一瀉して成つたので、遂に意を決して僭號した。

金人は多く銅像である。型を造つて銅を流し、龜裂のない立派なものが出來上るのを以て天意としたものである。之は胡人から來た風習である。

【五四】 生母は死し乳母は榮ゆ

后妃が皇子を生んで、これが皇太子に立つと、生母は死を賜ふといふことは、頗る野蠻の風習のやうであるが、漢の武帝が鉤弋夫人に死を賜うて、既にその前例を開いて居る。鉤弋夫人の場合は、王が若年で、母が壯年であつては、その母が專横淫恣に流れて國を紊すといふ意であつた。後魏の此の風習もそんな意味から起つたものであらう。

當時妃嬪が子を孕むと、同列のものが皆口を揃へて、「願はくは諸王公主を生み、太子を

生むこと勿れ」と祈つたものである。諸王や公主を生めば身は安全であるが、太子を生むと死なねばならなかつたから。

乳母を保太后に

太子の生母が死ぬると、それを養育する爲めに必ず乳母を附ける、乳母は全く生母と同じやうな慈しみを太子に感じさすわけで、その太子が帝位に上ると、乳母と乳母の夫とを尊んで必ず取立てる。これは自然の行程である。

この時代には、乳母を保太后と稱し、皇太后に準じて敬意を拂つた。保は保育卽ち「守」といふ意である。

漢唐元にも同例

之より先き、後漢の順帝は乳母宋氏を山陽君に封じ、安帝は乳母王氏を野王君に封じた例がある、なほ唐代にも、哀帝は乳母楊氏を封じて昭儀となし、同じく王氏を郡夫人とした。

元代には乳母を夫人に封ずると共に、その夫をも封じた。世祖は皇子燕王の乳母趙氏を封じて幽國夫人とし、その夫鞏德祿を德育公に封じた。後ち成宗、武宗、仁宗、英宗、文宗も皆その乳母と乳母の夫を各郡國に封じ、中には謚まで贈つたものもある。

北朝　北齊

高歡（神武）
- 文襄王（澄）
- 1 文宣帝（洋）——2 廢帝（殷）
- 3 孝昭帝
- 4 武成帝——5 後主（緯）——6 幼主（恒）

【五五】宮闈の穢行古今に比なし

東魏の宗室舊臣數百人を殺して北齊を建てた文宣帝は、一族故舊親疎の別なく、手當り宮闈の穢行古今に比なし

次第に婦女子を亂した暴君である。後宮に夫人嬪御の稱はあつたが、まだ階級に定制を設けなかつた。文宣は五男四女。

妃嬪に一々位號を

孝昭は新令を出し、周の百二十人制を採り、又漢制に准じ、昭儀左右二人（丞相に比す）、弘德、正德、崇德を三夫人（三公に比す）とし、以下左の如く一々名稱を附した。

光猷、昭訓、隆徽を上嬪とす（三卿に比す）。

宣徽、凝暉、宣明、順華、凝華、光訓を下嬪とす（六卿に比す）。

正華、令則、修訓、曜儀、明淑、芳華、敬婉、和德、弘猷、茂光、明信、靜訓、曜德、廣訓、暉範、敬訓、芳猷、婉華、明範、艷儀、暉則、宏徽、貞範を二十世婦となす、（從三品に比す）。

穆光、茂德、貞懿、曜光、貞凝、光範、令儀、內範、穆閨、婉德、明婉、艷婉、妙範、暉章、敬茂、靜肅、章穆、華愼、儀妙、儀明、懿崇、明麗、則婉、儀彭、修閑、修靜、弘愼、艷光、徽容、徽淑、秀儀、芳婉、貞愼、明艷、穆修、範肅、茂儀、英淑、弘艷、正信、凝婉、英範、懷順、修媛、良則、瑤章、訓成、潤儀、寧訓、淑懿、柔則、穆儀、修禮、昭愼、貞媛、肅閨、敬順、柔華、昭順、敬寧、明訓、弘儀、崇敬、修敬、承閑、昭容、麗儀、閑華、思柔、媛光、懷德、良媛、淑猗、茂範、良信、豔華、徽娥、肅儀、妙則を八十一御女とす（正四品に比す）。

以上は餘り行はれなかつたらしい。孝昭帝は七男數女。武成帝は女色に耽り、員數を備へ、後主は二后を立て、又昭儀以下その數を倍し、左右娥英や丞相に比し、左右昭儀を二大夫に、淑妃を相國に比した。嬖寵多く國を亂し、周主邕の爲めに滅ぼされた。五世三十年。

貞操・人倫を解せず

北齊は女色の前に人倫を顧みなかつたが、后妃も亦貞操の何たるやを知らなかつた。文宣は父神武（高歡）の崩後、父の妃蠕々公主に烝して一女を產ませ、又兄文襄の敬皇后を犯した。武成は兄文宣の季皇后に逼つて淫したが、齊亡んで後后は北周に入つた。又兄孝昭の元皇后を閹人に辱しめさせた。武成の胡皇后は齊の亡後北周に入り穢行の限りを盡くした。後主の斛律皇后は廢せられて元仁に再嫁し、胡皇后は廢せられ周に入つて人に嫁し穆皇后は齊の亡後、終るところを知らず。憑淑妃は亡後周に入り代王達の妃となつた。

北朝 北周

宇文泰
- 1 孝閔帝（覺）
- 2 明帝
- 3 武帝
  - 4 宣帝
    - 5 靜帝

【五六】 同時に左右大小の五皇后

北周は西魏の大冢宰宇文泰が、西魏の國祚を覆して國を周と號し、その子孝閔帝は周の

天王と稱し、相繼ぐこと五世二十五年にして隋の文帝に滅された。文帝は揚堅と稱し、北周四代宣帝の揚皇后の父であつたが、外戚を以て大丞相となり、宣帝の子靜帝の時、位を簒つて隋國を立てた。悖つて入るものは悖つて出るとはこの事である。

宇文泰は衽席を修むるに儉約を以てし、武帝も亦情を節し、私溺を警めたが、宣帝に至つて慾を逞うし、采擇飽かず、日夜聲樂遊宴に沈湎し、魚龍百戲を殿前に陳ねて政治は顧みなかつた。殊に一度に五人の皇后を立て、位を靜帝に讓つて自ら天元皇帝と稱し、皇后にそれ〴〵位號を附した。

宣帝の五后

楊皇后名は麗華。隋文帝の長女。宣帝の太子たる時妃となり、帝の卽位と共に立つて皇后となつた。天元大皇后と號す。

五后の稱號

朱皇后名は滿月。その父刑に觸れ、奴として太子宮に沒入され、幸を受けて靜帝を生む。天元帝后と號し、後ち天大皇后と改む。

陳皇后。選に入つて德妃に拜せられ、立つて天中大皇后と號す。

元皇后名は樂尙。選ばれて宮に入り、初め貴妃に拜し、後ち皇后に上り、天右大皇后と號した。

同時に左右大小の五皇后

劉聰も四后

尉遲皇后名は繁熾。杞公といふものゝ妻であつたが、宗婦として朝に入つた時、宣帝はその美色を愛し、強ひて姦し、杞公を誅して后を宮に入れ、天左大皇后と號した。以上一時に五后を立て、繡帳五個を造つて各その一つに居らしめ、又五輅（大車）を造つて五后を載せ、帝自らは左右の侍臣と共に徒歩して之に隨つた。

一時に二后以上を立つたものは、晉書によると、南匈奴の後である劉聰が僭して漢帝と稱した時、靳準の女を上皇后とし、劉貴妃を左皇后とし、劉貴妃を右皇后とし、樊妃を中皇后とし、外に皇后の璽綬を佩びたものが七人あつたと記して居る。劉聰は後ちに又宦者王沈の女を左皇后とし、宣懷の女を中皇后とした。

「狎態堪レ歸レ晝　嬌顏可レ療レ饑」
「紅羅床畔解　粉汗枕邊滋」

南朝 宋

- 1 武帝（劉裕）
  - 2 少帝（義符）
  - 3 文帝（義隆）
    - 4 孝武帝 ― 5 廢帝（子業）
    - 6 明　帝
      - 7 後廢帝（蒼梧王昱）
      - 8 順　帝

【五七】 百官に擬した後宮の内職

晉の禪を受けた宋（南朝）の高祖武帝劉裕は、晉に將相たること二十餘年、亂臣桓玄な

誅し、南燕・後秦を滅し、卒に九錫を加へて宋王となつたものである。廢帝滎陽王義符、文帝義隆、孝武帝駿、廢帝子業（少帝）、明帝彧、後廢帝昱、順帝準の八世五十九年で亡んだ。三廢帝の狂暴、孝武の驕淫、明帝の猜忌は全く人倫を無視したもので、尋いで立つた齊と共に、古今に絶する暴君揃ひであつた。

宋の後宮制度は晉を襲用し、たゞ二才人を省いたのみであるが、孝武帝に至つて、

貴妃（相國に比す）、貴嬪（丞相に比す）、貴人（三司に比す）を三夫人とし、修華・修儀・修容を省いて昭儀・昭容・昭華を置いた。

明帝の泰始元年、再び多少の變更を見た。

貴妃・貴嬪・貴姫を三夫人とし、淑媛・淑儀・淑容・昭華・昭儀・昭容・修華・修儀・修容を九嬪とし、婕妤・容華・充華・承徽・列榮を五職とし、美人・中才人・才人を三職（散位）とした。

なほ後宮に、百官に擬した內職を設けた。その官名百三十、人員二三百人の多きに達した。

後宮通尹、紫極戶主（以上官品第一）、後宮列叙、紫極中監尹、炎興中監尹、宣龍戶主、紫極房帥、炎興房帥（官品第二）、後宮司儀、後宮司政、參議女林、中臺侍御尹、采藝房主、中藏女典、典坊、樂正、內保、學林祭酒、昭陽房主（官品第三）、後宮都掌治職、同殿中治職、同穀帛治職、中傳、後宮校事女史、紫極中監女史、炎興中監女史、紫極房參事、贊樂女史、奏樂女史、中訓女史、女祝史（官品第四）、後宮通關參事、校學女史、總章帥、中厨帥。（以下一々擧ぐるの煩に堪へぬ）

【五八】倫理を解せぬ色魔蕩兒

人主に似ず　文帝の羊車

武帝の臧皇后は早く殂し、張夫人が少帝を生み、胡婕妤が文帝を生んだ。總べて七男八女。少帝は十七歲で卽位、太子時代から晉の恭帝の女・司馬名は茂英を妃とし、卽位と共に皇后に上せたが、人主の爲すところに似ず、露店を開いて自ら鬻ぎ、船を曳いて唱呼しその中に起居するを好んだ。在位三年で廢死し、固より子は無かつた。

文帝は晉の武帝のやうに、宮中で羊車を乘り廻し、六宮の美人狩を樂しんだ。潘淑妃は宮に入つて以來、一度も愛幸を受くるの機會なく、悶々の末一計を案じ、盛裝粉黛して帷

を褰げ、左右の侍婢に命じて鹽水をタップリ戸口に洒いで待つた。羊車が其所まで來る鹽水を舐めて進まぬ。帝は淑妃が晋氏の故事を知つて居るを悅び

「羊でさへ汝の爲めに徘徊して去らぬ、況んや有情の人間に於てをや」と、その夜始めて幸し、爾來寵六宮を傾けた。潘淑妃は始興王濬を、路淑媛は孝武帝を、沈婕妤は明帝を生む。總じて十九男七女。

孝武の亂倫

孝武帝は、宮闈に倫理なく、愛姫を母路太后の房內に置き、醜聲あり。武帝の子南郡王義和の諸女を姦し、終に義和を殺して其の女を皆宮中に入れ、祕密を泄すものは極刑に處した。穆皇后は前廢帝子業を生む。總じて二十八男八女。

子業の暴虐

前廢帝は、文帝の女新蔡公主（何邁の妻）を密に奪つて後宮に入れた。時に何邁は犬馬の馳逐を好み、野に出てゐて不在中であつた。發覺を恐れた帝は、一婢を殺して其屍を公主の病死と僞つて埋葬したが、後ち何邁がうす〳〵嗅ぎ知つたので討ち殺した。新蔡公主は叔母に當るものである。

明帝と陳貴妃

明帝は常に內宴を張り、宮女又姑姪を裸にして見物した亂倫家である。絕えず民間に尉司を派して姿色ある少女を探訪させた。之より先き孝武帝が健康（都）の縣界を巡幸した時、其處に在る賤しい荒屋を見、御道の側に在るは見苦しいから、他へ移轉させよと命を下した。尉官が錢若干を持つてその荒屋を訪ふと、十二三歲の少女が獨り留守番をして居る。見ると麟兒鳳雛ともいふべき容色を襤褸に裹んで、垢に塗れて手仕事をして居る。孝武帝に其の由を告げ、直ちに召して宮中に入れ、路太后の房內に二三年間居らした。これが陳貴妃である。明帝が孝武から貰つて後廢帝昱を生ませた。その實明帝の胤ではなかつた。

陳昭華の妬

明帝の陳昭華が順帝を生んだ。昭華は皇后に上つて後、他の妃嬪が男の子を生めば、その母を片端から殺した。自分と自分の子の擁護の爲めであつた。明帝は總べて十二男四女。後廢帝は早く廢死し、和帝の謝皇后は、國滅んで後汝陽王妃となつた。

南朝　齊

蕭何（漢…）
- 道生
  - 5 明帝
    - 6 廢帝（東昏侯寶卷）
    - 7 和帝
- 1 高帝（蕭道成）
  - 2 武帝
    - 長懋
      - 3 廢帝（鬱林王昭業）
      - 4 廢帝（海陵恭王昭文）

齊帝系

七世の暴君

【五九】 揃ひに揃つた昏惡の暴君

南朝の齊は、宋の相國蕭道成が、宋室を族滅して國を建て、七世僅に二十三年間の基業を成したもので、昏淫狂亂の暴君のみ續き、宮庭の亂倫無道は殆んどその極に達した。

後宮位階

後宮の制度は高帝道成の時、

貴嬪、夫人、貴人を三夫人とし、修華、修儀、修容、淑妃、淑媛、淑儀、婕妤、容華、充華を九嬪とし、散職に美人、中才人、才人等を置いた。

東宮三內職

二代武帝の時は貴妃を置き、淑妃を上せ、共に金章紫綬を授けた。

なほ太子宮に左の三內職を置いた。妃の外である。

良娣（關內侯に比す）。才人（駙馬都尉に比す）。

良娣、保林（五等侯に比す）。保林は漢代既に東宮妃の位號としたもので、宋でも之を襲用した。後ち唐代に至つては、太子妃の次ぎに良娣、孺子を置いた。

子女

高帝は十九男二女。昭皇后が武帝を生んだ。武帝は二十三男二女。廢帝鬱林王と海陵王は共に武帝の孫である。明帝は高帝の甥、十男二女あり。敬皇后が廢帝東昏侯と和帝とを生んだ。

廢帝鬱林王及び東昏侯等の狂暴は言語に絕するものである。詳細は暴君と驕后の章に掲

げるから此には略す。

美人八咏

雲鬢、照鏡自憐雲影澹、漫勞翡翠飾金翹。
星眼、星眸斜轉動微波、一盼纔通意已多。
蛾眉、蛾自輕盈月自彎、効愁劫在淺深間。
桃腮、半酣含咲向粧臺、面靨桃花帶粉開。
柳腰、一搦弓腰細且柔、柳枝尤自讓風流。
酥胸、浴罷蘭湯恰受風、開襟小立後庭中。
雪股、瑗玉交加一樣長、深々愛護不裹裳。
笋指、翠袖輕籠玉指纖、劫疑苦護笋牙尖。

南朝 梁

武帝(蕭衍)[1]
- 統(後梁宣帝)
- 簡文帝[2]
- 孝元帝[3]
- 敬帝[4]
- 孝明帝
- 琮

【六〇】 父子共に文學詩賦の冠冕

梁は武帝(蕭衍)が齊を滅して四世五十六年間の皇基を建つたものである。武帝は奢侈を警め、文學を奬勵し、佛敎を普及し、當代稀れに見る撥亂反正の英傑であつた。後宮位階の如きも

貴妃、貴嬪、貴姬を三夫人とし、淑媛、淑儀、淑容、昭華、昭儀、昭容、修華、修儀、

父子共に文學詩賦の冠冕

修容を九嬪とし、婕妤、容華、充華、承徽、列榮を五職とし、美人、才人、良人を三職（散位）とした。

武帝は郄皇后に男子なく、丁貴嬪が昭明太子統、簡文帝、廬陵威王續を生み、阮修容が元帝を生み、總じて八男七女であつた。父子共に文學を好み、武帝は三日書を讀まざれば口の臭きを覺ゆといひ、簡文帝・元帝と共に文章詩賦の冠冕と稱せられ、昭明太子は文選を著し、梁の文學詞彩絢爛、六朝第一を以て推された。これ程の文豪武帝も、美人を多く蓄へた爲め、郄皇后の酷妬に惱まされたものである。

簡文帝は男二十女三。元帝は袁貴人に愍懷太子方矩を、夏貴妃に敬帝を生ませ、外數子を擧げ、敬帝は十三歲で卽位、間もなく丞相陳霸先に國を憚り、尋いで弑せられた。

詩賦の冠冕

敬帝

郄后の妬虐

【六一】 蟒蛇と化した奇妬の皇后

梁の武帝は前述の如く一代の英傑であり、稀に見る詩人であつたが、皇后郄氏の奇妬酷虐には鮮からず惱まされた。後宮の美人で、帝が一度でも愛幸したものは、皇后が帝に知らさぬやう片端から殺害した。故に宮嬪は郄后を懼るゝこと蛇蝎の如く、帝から優しい言葉をかけられても返事一つすることさへ憚つた。

美人苗妃と武帝

中に苗妃といふ二八の美人が居つた。君王の一夜の情には、妾が百年の壽命を擲つても惜しからずと契つた。武帝は詩人であるだけ、亦情の豪であつたから、色を好まぬではなかつた。しかし自ら耽溺を警め、每朝鷄鳴に起き、五更に朝に臨み、賢臣と國政を燮理して、威武の發揚に努めた。

苗妃慘殺に遭ふ

一日淮山に出征するに際し、首途の酒宴を張り、宮女も悉く集つて武運の長久を祈つたが、愛する苗妃のみ姿を見せぬ。帝は氣にかゝるから、紫霞宮に、妃の燕室を訪うた。妃は俄の病で臥してゐたが、帝の眷顧を謝し、幾末までの愛を祈つて、涙に哽せびつゝ、手を握つて一時の別れを惜んだ。

誰れ知るまいと思つたが、嫉妬の權化のやうな同輩どもが、この事を后に告げ口し、惡しざまに誣ひた。さなきだに機もあらばと思つてゐた后は、嗔恚の炎の燃ゆるにまかせ、己が誕生祝ひの席上で、苗妃を赤裸とし、手足を柱に縛し、泣き叫ぶを容赦もせず、宮女に一箭づゝ射させ。なぶり殺しにしてしまつた。

凱旋した武帝は、出迎へた宮女の中に、又しても苗妃の姿が見えぬので、怪しく思つて居ると、后が悲しげに苗妃の病死したことを告げた。他の宮女は、后の祟を怖れて、誰れ一人事實を帝に密告するものもなく、帝は病死とのみ思つて、宮女どもに菩提を弔はした。

丁貴妃虐待

郄后は宮女の妬殺を擅にしたが、昭明太子を生んだ丁貴妃のみは、帝の擁護によつて殺し得なかつた。しかし虐待して、日に米五斛を舂かしたが、貴嬪は神助があるやうに、易々と毎日五斛を搗き果した。

死して蟒蛇となる

后は四十五歳で病死した。帝は屍を撫して哭し、厚く殯殮し、又多くの佛寺を建立して懇に弔つた。后が地獄に墮ち、蟒蛇と化した夢を見た宮女が居つて、その後帝も屢夢に見、又淨居殿の梁に蟠る蟒蛇を目のあたりに見たので、ます〳〵佛道を信じて喜捨し、后の成佛解脱を念じた。『南史』の郄皇后傳中に、

「后酷妬、死するに及んで終に化して龍と爲り、宮に入つて夢に帝に通じ、或を形を現はして帝の體將に安んぜざらんとす。龍輙ち水を激し。露井上に騰湧す。常に銀轆轤、金瓶を置き、百味を灌ぎ以て之を祀る。故に帝終身復た后を娶らず。」

と。化して龍になるとは怪しいが、要するに大のヒスであつたらしい。

陳帝系

南朝　陳

陳寔…
- 1 武帝（陳霸先）
- 道譚
  - 2 文帝
    - 3 廢帝（臨海王伯宗）
  - 4 宣帝
    - 5 後主（叔寶）

【六二】月宮の嫦娥と玉樹後庭花

陳の興亡

陳は梁の丞相陳霸先が禪を受けて國を建てたもので、高祖武皇帝といふ。五代後主が景陽殿の井戸に投じ、隋の爲めに滅ぼされるまで僅に二十二年。江東に天下の五分の一を保つてゐた。

多子多產

武帝は朴素を旨とし、後宮の員數も前代に比して多く缺いでゐたが、文帝は梁の制によつて內職を備へた。宣帝は內寵多く、抑皇后が後主叔寶を生んだ外、驚くなかれ合計四十

二男十數女を設けた。後主は張貴妃に太子深を生ませ、總べて二十二男、皆隋軍の殺すところとなつた。

後主は六朝文化の殿を承つて華やかな享樂に身を滅したが、その游宴の新曲「玉樹後庭花」は、當時の都建康（今の南京）に今も猶ほ謠はれて居る。

玉樹後庭花

後主は臨春、結綺、望仙の三閣を起し、皆沈檀の木を以て造り、飾るに珠簾寶帳を以てし、なほ光昭殿中に水晶の圓門を構へて月宮殿に擬し、愛する張貴妃に素袿白裳を着せ、凌雲髻を梳つて白玉の簪を挿させ、桂樹の下に麝杵臼を置き、一白兎を飼ひ、之を目して張嫦娥と呼び、月の世界の仙女も斯くやと思はしめた。

杜牧追懷の詩

晩唐の風流詩人杜牧が此地に遊び、秦淮畫舫の盛と、絃歌美姫の繁華とを見、六朝衰亡の昔を偲び、

「烟は寒水を籠め月は砂を籠む、
商女は知らず亡國の恨、
夜秦淮に泊して、酒家に近し、
江を隔てゝ猶ほ唱ふ後庭花」

と謳つたのは、後庭花の曲によつて當時を回顧したのである。此の曲を知らぬものは南京を語るの資格なしといはるゝ程のものである。（張貴妃は麗人と情豪の章に再見）

隋

文帝（楊堅）[1]——太子（勇）
　　└[2]煬帝（廣）——元德太子（昭）——[3]恭帝（侑）
　　　　　　　　　　　└[4]恭帝（侗）

【六三】妬后の掣肘と皇帝の抑損

南北兩朝を併せて大統を承けた隋の文帝は、前朝の弊を革め失を矯めて私寵を愼み、獨孤皇后の外はたゞ嬪三員に四德を掌らせ、世婦九員に賓客祭祀を掌らせ、女御三十八員に女功絲枲の事を掌らすに過ぎなかつたが、獨孤皇后の崩後は貴人三員、嬪九員、世婦二十七員、女御八十一員の定數を滿ち、更に舊儀によつて六尚を設け、各尚に司・典の役各三人宛を置いて互に宮掖の諸務を掌らした。六尚は

六尚

尚書　傳奏、稟賜、圖籍、法式、糾察、器玩を掌る。司令三人、典琮三人。
尚儀　禮儀、教學、音律、妃嬪の朝見等を掌る。司樂三人、典贊三人。
尚服　服章、寶藏、簪珥、巾櫛、膏沐等を掌る。司飾三人、典櫛三人。
尚食　方藥、卜筮、罇彝、器皿、膳を進め先づ嘗むこと等を掌る。司醫三人、典器三人。
尚寢　帷帳、牀褥、鋪設、洒掃、扇傘、灯燭等を掌る。司筵三人、典執三人。
尚工　造營、衣服裁縫、財帛の出人等を掌る。司製三人、典會三人。

妬后は多く糟糠の妻

文帝が初め私寵を愼んだのは、決して本心からのことではなかつた。丁度梁の武帝が郄后の妬を恐れたやうに、文帝も獨孤皇后の嫉妬を恐れて、已むを得ず抑損してゐたに過ぎなかつた。

此等の悒氣深い、我意を通した妬后は、大抵皆糟糠の妻である。創業に對して多少でも內助の功があり、艱難を共にした妻は、成功の後ち屹度悒氣深くなる。これは一つに男の罪かも知れぬが、東西古今ともに其の揆を同じうする。

妬后が餘り燒き過ぎると、帝は隱して摘み食をするやうになる。それが薄々わかつて來ると妬后は愈よ燒く、終にヒスになつてしまふ。郄后の場合もさうであつた。獨孤皇后の場合も同じである。

妬后の慘酷

文帝は或日のこと、皇后が臨月で引籠つて居る隙を窺ひ、仁壽殿に於て一麗人を愛幸した。それを嗅ぎ知つた皇后は嗔恚の炎を燃やし、帝が朝政を聽いて居る時、仁壽殿に乘り込んで其の麗人を撲ち殺した。郄后が武帝の愛姬の苗妃を慘殺したのと同一轍である。

【六四】離宮の美姬と六局の女官

幾千の美姬紛々擾々

父文帝を病褥に縊り、遺詔を矯めて帝位に登つた煬帝は、古今に絕する多情放恣の怪物で、六宮の外に迷樓を造り、又長安と江都（楊州）との間に幾百となく離宮を建て、美人を物色して之に詰め込み、毎日讌遊や行幸を事とした。爲めに妃嬪の位階秩序も紊れ、徒らに端容麗色を以て陪從せしめるに過ぎず、寵幸を邀へる幾千の美姬は、媚態嬌姿、互に相嫉み相競うて紛々擾々たる有樣であつた。

妃嬪の等級と女官

妃嬪の等級は典籍を參酌して、百二十人とし之を七級に分ち、外に承衣、刀人といふ女官が帝の頤使に任じ、その數のみでも數百人に上つた。

貴妃、淑妃、德妃（以上三夫人、品位第一）。
順儀、順容、順華、修儀、修容、修華、充儀、充容、充華（以上九嬪、品位第二）
婕妤十二員（品位第三）、美人、才人十五員（品位第四）以上世婦。
寶林二十四員（品位第五）、女御二十四員（品位第六）、采女三十七員（品位第七）以上女御。

六局

總じて百二十人、皆帝の宴寢に叙し、又承衣、刀人等が帝の左右に侍つた。此等の者には亦多くの侍婢が附いてゐたから隋分多數に上つた。

六尚は六局と改め、一局に四司、各司の下に典掌を置き、それ〳〵分掌を定めた。

尚宮局　司言、司簿、司正、司闈。
尚儀局　司籍、司樂、司賓、司贊。
尚服局　司璽、司衣、司飾、司伏。
尚食局　司膳、司醞、司樂、司廩。
尚寢局　司設、司輿、司苑、司燈。
尚工局　司製、司寶、司綵、司織。

以上が六局、二十四司である。司の員數二人。唯だ司樂と司膳とには各四人を置き、典と掌とは通じて二十八人を置いた。

各朝妃妾の數について『容齋洪氏隨筆』にいふ、

「漢より以來、帝王妃妾の多き、唯漢の靈帝、吳の歸命侯、晉の武帝、宋の蒼梧王、齊の東昏、陳の後主。晉武は萬人に至る。唐室は明皇（玄宗）を盛と爲す。白樂天の長恨歌に云ふ、後宮佳麗三千人と。杜子美の劍器行に云ふ、先帝侍女八千人と、蓋し其の多きを言ふなり。新唐史叙する所、謂ふ、開元天寶中（玄宗の年號）、宮嬪大率四萬人に至ると、嘻それ甚し。隋の大業（煬帝の年號）に離宮天下に徧く、所在皆宮女を置く、故に唐の裴寂晉陽の宮監となつて高祖に私侍し、高祖の義師經過する處、悉く之を寵む、其の多き想ふべし。」

【六五】　君寵至らず悶々死を決す

前にも述べたやうに、美人の多かつたことは、煬帝に至つて空前であり且つ絶後である

が、美人の數が多ければ多い程、怨曠の女も亦多かつたことが想像される。好し蛾眉を拋ひ、紅粉を施し、綺羅を曳くとも、それは花瓣ばかりで蕊の無い花のやうに、何時になつても實を結ぶことは無いのである。情を知り文字を解する女の堪へ得るところでない。

候夫人の縊死

煬帝の後宮に、候夫人といふ美人が居つた。才あり學あり、爲めに無躾の狐媚に倣ふまでの元氣も出ず。獨り悒々として近幸の到底得難きを悲しみ、花咲くことも無き身を果敢なんだ揚句、自ら感ずるの詩三首、意を遣るの詩一首、自ら傷むの詩一首を錦囊に入れ、之を臂に懸けて棟下に縊れた。

死顏桃花の如し

煬帝は其の詩を得、至情の文字、竟に率讀する能はず。反覆感傷の末、趨り往つてその尸を視た。紅顏色美しきこと桃花の如く、死んで居るものとは思へなかつた。好色の大王は、珠玉を褫はれたと同じ哀惜の感に打たれ、禮を備へて厚く殯殮し、急に中使を召し、

錦囊中の詩

「何が故に獨り此の人を棄て、朕に見せなかつたか」と尤め、獄に下して自盡を賜うた。候夫人の遺した錦囊中の詩は、樂府に令して曲調を附し、宮人どもに謠はし、以てその靈を慰めた。詩に曰く、

自感詩

「庭に玉輦の迹を絕ち、
隱々として簫鼓を聞く、
「泣かんと欲するも淚を成さず、
庭花方に爛漫、
「春陰正に際無し、
閒花の草に及ばず、

遣意詩。

「秘洞仙卉を扃し、
毛君眞に戮す可し、

自傷詩。

「初めて入つて明日を承け、
長門七八載、
春寒骨に入つて淸く、
躡履庭下を步み、
芳草澌く窠と成る、
君恩何の處か多き。」
悲しみ來つて翻つて歌を强ゆ、
計無く春を奈何せん。」
獨り步む意如何、
翻つて雨露を承くること多し。」

自ら傷む詩

離房玉人を鎖す、
肯て昭君を寫さず。」
深々として未央に報ず、
復た君王を見る無し、
獨臥空房に愁ふ、
幽懷空しく感傷す、
君寵至らず悶々死を決す

平日愛惜する所、
色美なる反つて棄らる、
君王實に疎遠、
家豈骨肉無からんや、
此身羽翼無く、
生命誠に重んずる所、
帛を朱棟の上に懸け、
頸を引き又自ら惜む、
毅然として死地に就く、
哀韻測々く、涙なくては讀めぬものである。多情の煬帝が、中使に死を賜うたことは、漢の元帝が、昭君を失つて畫工毛延壽に死を賜うたと同じく、痴情笑ふべしである。

なほ清代にも世祖の時、宮人張氏が自ら美貌を恃んで肯て進まず、終に寵を受くるの機會を捉へずして早く卒した。凡そ宮女を殯するに當つては、必ず其の身邊を調べる法則であつたが、懐中から一個の羅巾を發見した。それに閨怨の詩を題してゐたので、世祖は哀惜し、宮監數人を杖殺した。その詩は

「悶えて雕欄に倚り強ひて笑歌す、
將に舊恨を紅葉に題せんと欲す、
雨過ぎて玉階天色淨く、
從來識らず君王の面、
嬌姿力なく宮羅に怯る、
只恐る新愁翠蛾に上るを、
風吹いて金鎖夜涼多し、
棄て置かるゝ無情奈何すべき。」

枝々交レ影鎖二長門一。　嫩色曾霑二雨露ノ恩一。
鳳輦不レ來欲二春盡一。　空留二鶯語一到二黄昏一。

（段成式）

君寵至らず悶々死を決す

唐帝系

創業と守成

初めは四妃制

【六六】 六尙五局と內侍省の宦官

隋に代つて四海を保ち、二十世凡そ三百年の皇基を拓いた唐は、高祖の創業に繼いで、文武の英才太宗が、よく力を守成に注ぎ、所謂貞觀の治を現出して國威を宣揚し、三代以還、未だ嘗て見ざるの泰平を馴致したに起因する。第三代高宗に至つては、仁にして武ならず、漸く宴安に耽溺し、爾後代々衽席の女禍と宦官の跋扈とに國勢を衰亡に導いた。

唐の後宮制度は隋を參酌取捨し、皇后の外は、三夫人に賢妃一員を增し、それ以下は九嬪、二十七世婦、八十一御妻を備へた。

四夫人＝貴妃、淑妃、德妃、賢妃（以上正一品）

九嬪＝昭儀、昭容、昭媛、修儀、修容、修媛、充儀、充容、充媛（以上正二品）

二十七世婦＝婕妤九人（正三品）、美人九人（正四品）、才人九人（正五品）

八十一御妻＝寶林二十七人（正六品）、女御二十七人（正七品）、綵女二十七人（正八品）

此の外なほ多くの宮人が居つた。開元の時、后の下に四妃あるは周代三夫人の制に悖る

六尙五局と內侍省の宦官

となし。

惠妃・麗妃・華妃の三妃と、六儀、四美人、七才人を置き、前號を參酌して大抵周官を踵ぎ、相損益した。

六尙の女官

六尙は隋の制に依り、六尙の女手で鞅掌し難い職務を執る爲めに、更に男の勤める五局を置いた。

掖庭局　宮人の簿籍を掌る。

宮闈局　宮內の門禁を掌る。掌扇・給使等の屬僚あり。

奚官局　宮人の疾病・死喪を掌る。

內僕局　宮中の供張・燈燭を掌る。

內官局　中藏・給納を掌る。

內侍省と宦官

各局とも令、丞が居り、皆宦官が任命された。なほ此の五局の外に、我が國の宮內省の如き役所があつた。之は各時代ともあつたが名稱と員數とを異にしてゐた。唐には內侍省と稱し、內侍（長官）四人、內常侍六人、內謁者監六人、內給事八人、謁者十二人、典引十八人、寺伯二人、寺人六人が居つた。何れも宦官である。初めは權力を假さず、閤門にあつて守禦し、黃衣廩食するに過ぎなかつたが、中宗の時宦官三千餘人、外に員外官千餘人となり。玄宗の時宦官高力士功によつて右衞門將軍より左右監門將軍となり、內侍省の最長官となつた。

宮女四萬宦官數千

開元天寶中、長安の大內、大明、興慶の三宮、皇子十宅院、皇孫百孫院、東都の大內、上陽の兩宮、概ね宮女四萬人。宦官黃衣以上三千人。朱紫の衣を着るもの千餘人。憲宗は宦官に弑せられ、其後閹尹の禍はますゝ激くなつた。

× × × ×

文筆ある女官

尙宮の女官には文學經史に通じたものも少くなかつた。唐の德宗に召された宋若莘姉妹五人の如きは、宮中に於て秘書を司り、學士に任ぜられた。

若莘は興州淸陽の儒宋廷芳の長女で、妹若昭・若倫・若憲・若荀と五人姉妹であつた。皆聰慧で文辭に長じ、莘・昭が尤も顯はれた。貞元中、德宗が之を聞き、朝に召して文章經史を試み、悉く宮中に留めたが、宮中ではその風操を高しとし、侍妾の列に加へず、學士を以て呼んだ。若莘卒し、若昭嗣いで尙宮に拜せられ、憲宋・穆宗・敬宗の三朝に歷仕し、皆之を先生と呼び、后妃諸王が師の禮を以て接した。寶曆年中に卒し、若憲が之に代

つて秘書を司つたが、後罪を以て死を賜うた。

【六七】 唐朝三百年女禍と終始す

帝室と女禍

支那の帝室は各朝とも大抵「女禍」と終始して居る。殊に唐の如く二十世三百年間の泰平を致した國でも、女禍によつて殆んど國祚の絶えんとしたことが屢あつた。史家は唐を評して「女色を以て起り、女色を以て衰ふ」といつて居る。

高祖擧兵の動機

高祖李淵が擧兵した動機が面白い。高祖は隋の煬帝が江都に行幸した時、晉陽の留守を承つてゐたが、離宮の宮女と通じて醜聞が傳つた。弟の太宗李世民が兵を擧げることを慫慂した時、到底事成らずとして聽かなかつたが、晉陽の宮監裴寂が、

太宗

「もし宮女と私通したことが發覺でもせうものなら、李氏一族は立所に族滅される。どうで發覺せずには居らぬ」と嚇したので、高祖も決心して擧兵することに賛成した。

高祖は二十二男十九女あつた。以て內寵の多く、情の豪であつたことが知れる。

太宗は同母弟巢剌王元吉を殺して其の妻を奪つて己が妃とした。創業の英主にして尙ほ斯くの如しであるから、女禍相尋いで起つたのも無理からぬ。

武后

高宗の皇后則天武后は、太宗の妃であつたものを高宗が二度の勤めをさせたのである。父子が一女を相愛した譯で、既に不純である。故に醉骨の慘事を惹き起したのみでなく、唐の子孫を殆んど殲くした。

中宗と韋后

中宗は武后の爲めに房陵に遷されてゐる時、韋后と共に備さに艱苦を嘗め、勅使到ると聞く毎に、恐惶して自殺せんとしたが、后は之を諫めて、「禍福常なし」と止めてゐた。

太平發達

中宗は后の手を把つて喜び、「異日幸に天日を見るの日來らば、たゞ卿の欲するところに任さん」とまで誓つたものである。位に卽くに及び、韋后は漸く專恣となり、遂に武三思と通じ、上官婉兒（昭容）も亦武三思と通じ、事の洩るゝを恐れ、毒を餅に混じて帝を弑した。後ち帝の弟臨淄王が兵を擧げて韋后と上官を誅して位に卽いた。之が睿宗である。

玄宗

睿宗の叔母太平公主（高宗の女）は政に與り、宰相の進退はその一言に係り、權は人主を傾け、宰相七人、五たび其の門から出た。玄宗が嗣ぎ立つに及び、公主に死を賜ひ、三世宮闈の亂は漸く鎭定した。

玄宗は己が太子壽王の妻を奪つた。之れが楊貴妃である。楊貴妃は玄祿山と通じ、終に

漁陽の鼙鼓兩京を沼没し、爲めに唐室の衰運を招いた。

玄宗は初め精を勵まして治を圖り、開元の泰平を致したが、時に民間に訛言が行はれ、宮女を選び、掖庭に入れるといふ噂が生じたので、帝は有司に命じて牛車が崇明門に具へさせ、後宮の用のない女を載せて共の家に還へらせた。之より先き中宗の時、宮女を放つて出で游ばしたが、皆淫奔して宮に還らなかつた。

憲宗

憲宗は寵する妃嬪が多く、后を立てるとその妬悍に苦しめられると考へ、群臣が勸めても后を置かなかつた。穆宗を生んだ懿安皇后は、穆宗が立つて後尊んで皇太后としたのである。

武宗

武宗の王賢妃は年十三の時宮に入り、穆宗が潁王（武宗）に賜うて才人としたものであるが、武宗の崩じた時自盡した。宣宗が立つに及んで賢妃を贈つた。

唐末の衰頽

懿宗に至つては驕淫にして民心既に離れ、郭淑妃の如きは黄巢の亂に終るところを知らず、僖宗・昭宗相繼ぐも天祿已に去つて漂泊幽辱、終に朱全忠の爲めに何皇后と共に弑虐に遭ひ、國亡んで五季の爭亂となり、北夷の進入となり、漢族の極盛は又夢ることが出來なくなつた。

【六八】 不老の丹藥人壽を傷ふ

諸帝悉く中毒

唐代の諸帝は、何れも秦皇漢武の亞流ならぬはなく、長生と亨樂の慾望を充つる爲めに方士を信じて錬藥を呑み、却つて天壽を損じて嗤ひを後世に遺した。

太宗は方士那羅邇婆々といふものを召して長壽の藥を錬らせ、高宗は胡僧盧伽阿逸多といふものゝ進めた若返り藥を呑み、高宗は仙人柳泌僧大通に天臺山の藥を採つて金丹を造らせ、穆宗も亦僧惟賢及び道士趙歸眞の說によつて金石の丹を呑み、敬宗は道士劉從政に命じて不老の藥を湖南・江南・天臺に搜させ、武宗は趙歸等八十一人を召して丹藥を調劑させ、宣宗は大醫李元伯が秘劑と稱する長年の藥を服し、皆病を發して終りを善くせなかつた。

玄宗と助情花

則天武后は御醫沈南璆の房中術を習ひ、寵臣張昌宗兄弟は、幾多の丹藥を后に勸めて本能の發揮に奏効した。

玄宗は後宮に四萬人の佳麗を有し、楊貴妃の愛に耽溺したが、これも安祿山が進めた助

情花といふ催春劑を服して奏効した。一粒よく一夜の興を助けて筋力倦まず。玄宗は漢の春邺膠も及ばじといつて悦んだ。

春邺膠は助情花と同じく一種の香錠である。漢の成帝が之を呑んで性の滿足を得てゐたが、一夜昭儀合德が分量を誤つた爲め、中毒を起して俄に崩じたものである。

隋の煬帝も大業八年に方士が進めた大丹を呑み、蕩思熾に起つて制するも止まず。日夕貪淫を事とし、夏に及んで煩燥、日に氷を飲むこと數十斤、妃嬪競うて玉盤に氷塊を盛つて帝の行幸を待つた。

明の世宗も亦道士王金等の進めた丹藥に依て壽命を縮め、穆宗に至つて漸く之を排した。

元と清は北方蠻夷から起つたものであるから、少し信仰を異にし、西蕃の喇嘛僧を近づけ、大喜樂禪などと稱する一種の房中享樂の方法を授かり、いかゞはしい丹藥を飲んで、長生を希うたものである。

漢の成帝

隋の煬帝

明代

元と清

【六九】　宮掖沒入の官婢と出世

刑死者の女を官婢に

官婢から出世

唐代の例

天子の御寢に侍る妃嬪女御や、後宮の庶務を扱ふ六尚の女官の外に、なほ雜役に任じる官婢が居つた。一體支那では、古くから、有罪のもの、又處刑された者の遺族を官に沒して奴婢とし、又それを賣買したものであるが、相當の家柄の女は宮廷に入れて官婢とした。漢代に、太倉の令淳于公が罪に問はれた時、その小女緹縈が上書して、「願はくは沒入して官婢となし、以て父の刑を贖へ」と哀訴したのは有名な話である。

この沒入される官婢の中には、權門良家のものもあり、眉目美しい妻女もある。そこで、美しいものは上ほせて妃嬪に備へ、才幹あるものは女官に補し、又臣下の妻として下賜されるやうになつた。

臣下に賜うた例は、北齊の郭瓊が罪死した時、その子婦を官に沒し、陳元康に賜うて妻とした。又魏の太常劉芳の女、中書郎崔肇師の女等は、その夫家が皆事に坐して罪せられたので、齊の文宣帝は、この二人を魏收に賜うて兩妻とした。

唐時代には、族誅する場合、その壯丁は誅し、妻妾子婦及び幼者は皆掖廷に沒入して奴婢とした。そして美貌のものは、玉の輿に乘るの幸福を得たものも多い。例へば、齊王元吉（太宗の弟）が誅せられた時、其の妃は沒入されて大宗の妃となり、盧江王瑗が誅せら

れた時、その姫は入つて太宗に侍り、上官儀とその子庭芝が誅せられた時、庭芝の妻鄭氏、及び儀の女婉兒は中宗に愛せられて昭容となり、吳元濟の妻沈氏、李師道の妻魏氏など、皆沒入された。

皇后に上つた例

皇后に上せられた例は、肅宗の章敬皇后、憲宗の孝明皇后等である。肅宗が太子であつた時、玄宗は高力士に命じて、良家の美女を選んで之に配せんとした。力士は、寧ろ掖廷に沒入して居る官婢中の身分あるものから選擇してはどうであらうかと奏上し、玄宗の贊成を得て物色し、僕陽の人吳令桂が罪死し、その女の沒入されて居るものを勸めた。玄宗は之を肅宗に賜ひ、肅宗は非常に愛幸して、その腹から代宗を生ませた。后は年十八歳で薨じたが、代宗卽位の後、追尊して后となし、建陵に葬つた。

皇太后となつた例

孝明皇后は、初め丹陽の人李錡の妾であつたが、錡が反して誅せられた時沒入され、美貌を以て憲宗に見出され、寵を專らにした結果、宣宗を生んだ。宣宗が光王となつた時、王太妃と稱せられ、宣宗卽位と共に尊んで皇太后とされた。

五代

- 後梁
  - 太祖(朱全忠)1 ―― 末帝2
- 後唐
  - 李克用 ― 莊宗(存勗)1
  - 明宗(養子)2 ― 閔帝3
  - 廢帝4
- 後晉
  - 石敬儒 ― 出帝(重貴)2
  - 高祖(石敬塘)1
- 後漢
  - 高祖(劉知遠)1 ―― 隱帝(承祐)2
- 後周
  - 太祖(郭威)1 ―― 世宗2 ―― 恭帝3

【七〇】相繼ぎ酒色に滅んだ五代

五代十國の起伏

唐が滅んで宋が起るまでの五十餘年間に、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五代が起伏し、主として江北に鬪爭したが、一方江南には前蜀、後蜀、楚、吳、南唐、吳越、閩、南漢、北漢、荊南の十國が離合出沒し、或は帝と稱し、或は王と稱し、更に北方には契丹が侵入し、道義は地に墮ち、文物は替廢した。

（後梁）女色身を滅す

後梁の太祖朱全忠は、もと唐末の叛逆者黃巢の一部將であつたが、唐の昭宗を弑して汴京に纂立したものである。喜怒常なく殺戮を事としたが、元貞皇后張氏の奇妬には畏れてゐた。皇后の死後、陳昭儀、李昭容が共に色を以て進み、荒淫度なく、實子友珪に弑せられた。末帝瑱には張德妃、郭貴妃等の寵姬があつた。後唐に滅ぼされた時、多くその後宮に移された。此の時石雍妃のみは貞節を全うし、莊宗を罵つて殺された。後梁は二代十七年。

（後唐）後宮三千の美女

後唐は唐末の驍將李克用が黃巢の賊を滅じて晉王に封ぜられ、その子莊宗が衆に推され帝と稱し、後梁に代つたものである。后妃の數最も多く、民間の美女三千人を采擇して後宮に充てた。位號は皇后の外に

淑妃、德妃、昭儀、昭容、昭媛、出使、御正、侍眞、懿方、咸一、瑤芳、懿德、宣一。

等數十階あり、一々擧ぐるの煩に堪へない。明宗は三后一妃、閔帝、廢帝とも酒色を貪り、四代十四年で滅亡。廢帝は太后・皇后・皇子等と共に傳國の寶を携へ、玄武樓に登り、自ら火を放つて焚死した。

（後晉）末路の悲哀

後晉の高祖石敬塘は後唐の明宗に仕へたものであるが、叛旗を擧げて契丹の援兵を得、廢帝を滅して國を奪つた。その皇后李氏は明宗の皇女（初めの名は永寧公主）であつた。出帝の時契丹の爲めに擒となり、一族百餘人胡地に赴き一農夫となり、哀れな末路を遂げた。後晉は二代十一年。

（後漢）三美姬貢入

後漢の高祖劉知遠は、石敬塘の部將。契丹が後晉を滅した時自立して大梁に入り、國を漢と號した。皇后李氏は、知遠が一軍卒であつた時、夜晉陽の一農家を脅し、掠め取つた女である。これが隱帝を生んだ。知遠は郭威を魏州の鎭守として契丹を防がせた時、南唐が大雪、小雪、韓素梅といふ三美妓を貢獻した。知遠は大雪を愛し、侍郎蘇蓬吉は小雪に

通じ、趙匡胤は韓素梅と意氣投合した。知遠在位一年で死し、隱帝立つて三年、亂兵に弑せられて國は亡んだ。

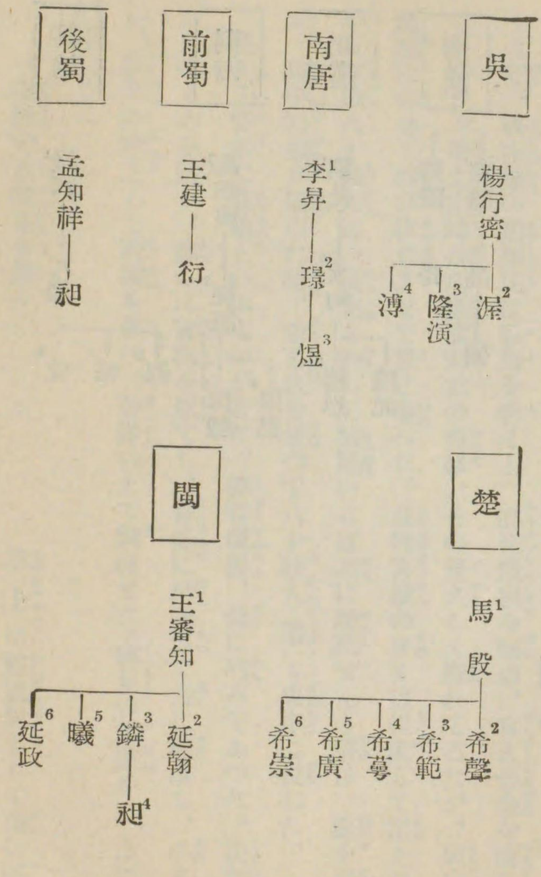
（後周）二美人貢入

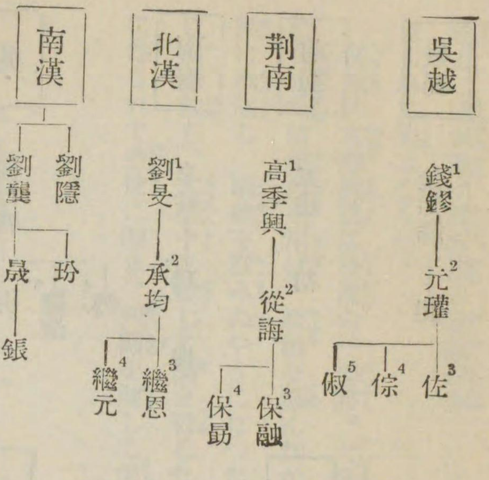
後周の太祖郭威は後漢の一部將。大梁に帝と稱し、一后三妃、儉を旨とした。尋いで立つた世宗は聲色を斥け、政治を勵んだが、南唐から貢した秦弱蘭、杜文姬といふ二美人の愛に耽溺し、國政を顧みぬやうになつたので、趙匡胤は鄭恩と牒し合せ、二姫の居る樓閣に火を放ち、火焔中に投じて燒き殺した。世宗死して七歲の恭帝が立つたが、趙匡胤は衆に推されて帝位に卽き、列國を滅して宋の大業を成立した。後周は三代十一年。

陌頭楊柳枝　已被春風吹
君懷那得知　妾心正斷絕
（郭元挺）

ちまた〳〵の青柳さへも、アレ春風が吹くわいナ、私の心のやるせなさ、思ふお方に知らせたや（岡多沖）

十國帝系





【七一】酒あり醉はざる是れ痴人

（吳）大圍の大燭

吳は唐の昭宗の天復二年に、太祖楊行密が爵を賜うて吳王となり、國を楊州に建てたものである。烈祖渥、高祖隆演、睿帝溥の三主に傳へ、溥は南唐に位を讓つた。四世四十六年。渥は十圍の燭を燃して夜球を擊つの戲をなし、一燭の費は數萬錢に達した。國が亡んだ時、永康公主は美貌の故に捕はれ、南唐の延和宮に幽せられた。人が公主を呼べば嗚咽し、常に誓つて「願はくば生々世々有情のものと爲るなからん」といつてゐた。

（南唐）霓裳羽衣の曲復活

南唐は烈祖李昪が吳の禪を受けて帝と稱し、璟と煜二主に傳へ、宋に滅ぼされた。三世三十九年。後主煜の后周氏は歌舞を善くし、高髻纖裳を翔め、宮人皆金を面に鏤めて北苑妝といつた。唐玄宗時代の霓裳羽衣の曲は、その後久しく廢れてゐたが、周后が殘譜を得て琵琶に合せ、再び復活させて世に傳へた。此時宮嬪の多くは得度して尼となり、淨德院に居るもの八十餘人は、後主と約して城陷いらば共に燒死せんと誓ひ、薪を庭に積んでゐたが、城中に烟が揚つた時、忽ち火を放つて八十餘人悉く火中に投じた。

宵娘金蓮の上に舞ふ

後主の愛姫に宵娘といふものがゐた。姿容纖麗、舞に巧みであつた。後主は金蓮の高さ六尺のものを造り、飾るに寶物を以てし、宵娘に帛を以て足に纏はし、小さくして上に屈し、新月の形として素襪を著け、金蓮の上で舞はせた。纏足の起原をこゝにおく說がある。宮詞に、

「淩波の素襪獨り翩々、
掌上の輕盈宛として仙の若し、
酒あり醉はざる是れ痴人

學び得たり纖々新月の様、
春趺裏み就つて金蓮に舞ふ。」

なほ唐鎬の詩に「蓮中花更に好し、雲中月常に新なり」といふ句がある。

（後蜀）醉粧の歌舞

前蜀は王建が是と同時に蜀王となり、僭して帝と稱したものである。後主衍に至り、後唐に滅された。その間二世三十五年。王建は宣華苑に重光・太清・延昌・會眞の三殿。清和・迎仙の二宮。降眞・蓬萊・丹霞・怡神の四亭、及び飛鸞閣、瑞獸門等を建て、歌舞游宴を事とし、巡幸の際は金甲を着、珠帽を冠り、干戈を執り、宮女二十人に錦繡を着せて從はせ、行く〳〵自製の曲を謠はせた。後主衍は宮女に雲霞を畫いた道服を著けさせ、蓮花冠を被らせ、胭脂を瞼に施して醉妝と稱し、或は浣花溪に幸して水嬉を爲し、或は宣華苑で壽酒の讌を張り、宮人に簫を吹かせて自製の水宮詞を謠はせた。

「煇々赤々五雲浮ぶ、
月華水の如く宮殿を浸す、
宣華池上月華新なり、
酒有り醉はざれば是れ癡人。」

（後蜀）美人十四品

後蜀は孟知祥が後唐の長興四年に蜀王となり、僭して帝と稱し、子の後主昶に傳へ、宋に降るまで二世四十一年。初め宮妃の位號を十四品に分ち、十三以上の女子を選んだ。

「昭儀、昭容、昭華、保芳、保春、保衣、安宸、安蹕、安情、修容、修媛、修娟、」

（南漢）一柱三千錠

素馨花

後ち慧妃、貴妃、德妃をその上に設け、秩を公卿大夫に比した。（花蕊夫人參照）

「十三嫋々含羞を解す、
新に雲鬟を賜ふて乍ち上頭す、
冊を進めて名を呼べど伴つて應ぜず、
昭儀第一風流を擅にす。」（五代花月）

【七二】宮闕を壯にし酒色を貪る

南漢は劉隱が梁の乾化二年に南海王となり、弟龑が僭して帝と稱し、玢、晟、鋹に傳へ、鋹が宋に降つて滅んだ。その間五世六十七年。龑は玉堂珠殿を建て、節に金碧翠羽を以てし、自ら誇つて曰く「縱へ堯舜禹湯には及ばぬとも、亦風流天子たるを失はぬ、」と。晟は昌華・天明・甘泉・玩華・秀華・玉清・太微の七宮を建てた。鋹も亦豪奢を好み、萬政殿を建て、一つの柱を飾るに白金三千錠を用ひ、銀を以て床に貼りつめた。

桃花の咲き誇る頃、又荔枝の熟する頃には、芳春園に紅雲の宴を催した。還幸した後で釵珠などの落ちて居るを拾ふものが多かつた。當時宮人が好んで白花を釵とし、素馨花と稱したから、宮人の墳上には素馨を植ゑ、一望白皚々、名附けて素馨斜といつた。

波斯の女媚猪

鋹は波斯から一人の美姫を得た。年は十六、豐頰妖艶、之れに昵んで具さに醜態を盡くした『清異錄』にいふ、

「劉鋹波斯の女を得。年破瓜、豐睛にして慧艶。善く○し、其の妙を曲盡す。號を媚猪と賜ふ。方士を延いて健陽の法を求む。久しうして乃ち得、多々益々○す。好んで人の○を觀、惡少年に配するに宮人を以てし、皆妖俊美健の者、後園に就き衣を褫ひ露して○せしむ。鋹・媚猪を扶けて巡行覽玩し、號して大懶雙と曰ふ。又新を擇び異を採り、媚猪と對す。鳥獸之を見て熟すれば亦○を作す。」

（楚）尼僧を以て美女物色

女人廬瓊仙と黄瓊芝の二人は女侍中となり朝服冠帶して政事に參與し、百司を管理した。

楚は武穆王馬殷が梁の開平元年に楚王となり、その子聲・範・蕚・廣・崇の五兄弟が相繼いで、南唐に滅された。

範（昭王）は最も聲色を縱にし、長夜の飲を好み、媵妾の多き、前後五六百人を下らなかつた。士庶の家では娘を徵發されることを恐れ、特に外出を禁じ、年齡姿容を他人に知らしめなかつた。範は常に尼僧に意を含めて士庶の家へ出入させ、美女あると見れば、直ちに復命させ、强ひて後宮に納れた。絶えず徵發して猶ほ足れりとせず、曰く「吾れ聞く軒轅（黄帝）は五百女を御して以て天に昇ると、吾れ其れ庶幾からん乎」と。

十六樓九龍殿

天策府を長沙城の西北に興し、天策・光政等の十六樓、天策・勤政等の五堂を建て、棟宇欄檻を金玉で飾り、丹砂數十萬斤を以て壁を塗つた。又九龍殿を造り、沈香を刻んで八龍各長十餘丈のものを作り、柱を抱いて相向はせ、香を龍の腹中に焚き、香烟鬱然として口より吐くの仕掛けを構へ、範は其の中に居つて自から一龍を氣取つた。

（吳越）警枕睡を寤す

【七三】　水晶の屏中に玉體横陳

吳越は武肅王錢鏐が楚と同時に吳越王となり、子文穆王元瓘に傳へ、元瓘は子宏佐、宏倧、宏俶と相傳へ、宏俶は宋に降つて五王九十八年で滅んだ。

武肅王は儉素を旨とし、宮中に握髮殿を建て、周公の吐哺握髮に倣はんとした。併し亂臣賊子の跋扈を懼れ、常に侍女及公主等に命じて、一朝異變の起る時は警鈴を以て急報させ。又寢に就く時は、警枕として圓木に鈴を附けた枕をし、熟睡すれば轉げて目が寤めるやうにした。

又或年の除夜に諸子を招き、簫鼓の樂を張つて樂しんだが、遽に中止し、世の人が長夜の飲と謗つてはと、自ら奢侈を警めた。子孫も亦質實であつたが、柔弱怯懦で宋の鼻息を窺ひ、遂に領土を宋に納れて降伏した。

閩は太祖王審知が吳越より少し後れて閩王となつた。子の延翰が嗣ぎ、弑せられて弟の惠宗鏻が立ち、之も弑せられて子の康宗昶が立ち、之も又弑せられて鏻の弟景宗曦が立ち又弑せられて弟天德延政が立ち、南唐に滅ぼされた。七主五十三年。

惠宗は陳皇后（名は金鳳）の爲めに長春宮を築き、長夜の飲を張り、每宴金龍の燭數百を然し、宮女數十輩に杯盤を擎げさせた。杯盤は皆金玉・瑪瑙・琥珀・玻璃の類を以て造つたものである。

又彩舫を西湖を泛べ、多くの宮女を載せ、楫を鼓して先を爭はせ、惠宗は金鳳と龍舟に御し、金鳳の作つた樂游の曲を宮女に同聲で歌はせた。歌に曰く

「西湖南湖彩舟を鬪はし、
　波渺々水悠々、
　青蒲紫蓼中州に滿つ。
　長く君王萬歲の游を奉ぜん。」

惠宗は長枕大牀を作り金鳳又諸宮人と裸臥し、水晶の屏風を繞らし、外から屏風を隔て

（閩）

惠宗の驕奢

水晶屏中の祕戲

て覘はせた。『宮詞』にいふ、

「大牀長枕　暖くして春を生じ、
　更に水晶屏下に向つて望めば、
　殲雨尤雲笑顰を雜ふ、
　分明なり玉體橫陳するを看る。」

「長春宴罷んで月始めて移る、
　意は行雲を逐ひ情は雨を逐ふ、
　秘戲中宮窺ふを敕許す、
　水晶屏外立つこと多時。」

晩年錦工に命じて、縷金五彩の九龍帳を長春宮中に造つたが、風疾に罹つて歡を帳中に暢べることが出來なかつた。この時金鳳は歸守明といふ若い燕と私し、日夜帳內で帝の目を盜んだ。國人歌うていふ。

「誰れか九龍の帳と謂ふ、
　金鳳の妹に春燕といふ美人が居つた。惠帝は之を納れる爲めに東華宮を造り、珊瑚を梲とし、瑠璃を欞とし、檀楠を梁とし、眞珠を簾とした。春燕甫めて十五歲、顧盼人を動かし、媚態掬すべく、專房の寵を擅にした。後ち惠帝が病むに及び、子の康宗は父の枕邊で哀願し、春燕を讓り受けた。
　惟だ一歸郎を貯ふ。」

康宗立つて春燕を皇后に冊し、行けば輿を同じうし、坐すれば席を共にし、大酺殿に群

美人の讓渡

臣を會し、元夕觀燈の宴を張り、韓渥等に大酺の樂を賦せしめた。

又春燕の爲めに紫微宮を建て、百戲を陳ねて樂しみ、別に三清殿を禁中に造り、黄金數千斤を以て天尊老君を鑄り、晝夜樂を張り香を焚き、祈禱して長壽却老の神丹を求め、その場で蝶褻して忌まなかつた。

景帝も亦耽溺家で、劇飲夜を徹し、尚皇后も酒を嗜み、泥醉して多く宮女を殺した。

景帝は后が殺さうと思ふところは則ち殺し、宥さうと思ふところは則ち宥し、后のいふことならば皆聽いた。

荆南は武信王高季興が後唐と同時に南平王となり、子文獻王從誨に傳へ、薨じて子貞懿王保融立ち、弟保勗に至り宋に滅された。四主二十九年。

武信王は江陵城の西南隅に池を穿ち、亭を建て、渚宮と名づけた。妓女數十人と此の亭で宴游したものである。

北漢は世祖劉明が晉陽に帝と稱し、子睿宗承鈞に傳へ、薨じて養子少主繼恩立ち、弑せられて弟英武帝繼元が立ち、間もなく宋に降つた。四主二十九年。

神丹、惑溺

(荆南)諸宮で宴游

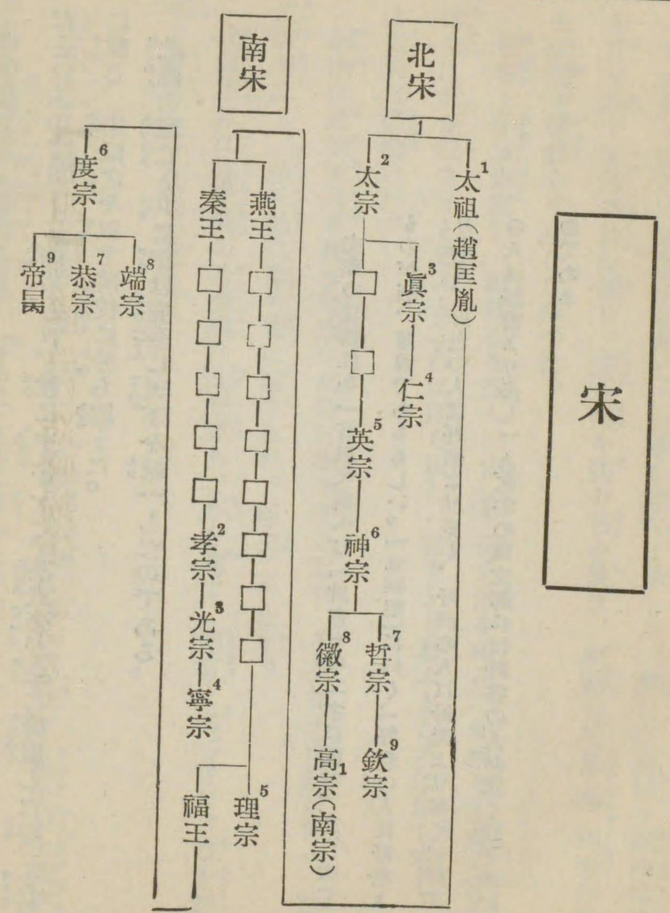
(北漢)宮妓を宋に献ず

睿帝は郭姬と傅姬を愛し、郭姬を后に立てんと欲したが、醫僧が寡婦と通じて生んだ子だといふので臣下に諫められ、遂に中止した。英武帝が宋に降服した時、宮妓百餘人を宋に献じ、宋は之を以て將校に分ち賜うた。

北漢の滅亡と共に宋は完全に天下を統一したのである。

支那の民族性を一言以て蔽へば「財色」の二字に歸す。之に次ぐものが酒、賭博であるらしい。『五雜俎』に曰く、「好利の人は好色より多く、好色の人は好酒より多く、好酒の人は好奕より多く、好奕の人は好書より多し」と文字の國支那には好書の人が驚くほど少いのである。

宋帝系



大后皇后皆賢德

妃嬪制度

【七四】 後宮に怨嗟紛爭の聲なし

宋は、五代周の節度使趙匡胤（太祖）が、大兵を率ゐて契丹の侵略を禦ぐに當り、將士に推戴されて帝位に卽き、周の禪を受けたものである。卽位の初め民情を察する爲め、頻りに微行したが、母昭憲杜太后は、常に天子たるの難きを警め、死に臨んで「國に長君あるは社稷の福なり」とて、位を弟に傳へさせ、次を以て子に及ぼすことを遺言した。太祖の孝惠賀皇后・繼室孝明王皇后・孝章宋皇后の如き、皆恭勤懈らず、內助の功多く、爾後歷代の后妃も、一二例を除く外は、何れも恭順にして母儀の德あり、後宮に怨嗟紛爭の聲なきこと、前朝に類を見ぬところである。

妃嬪の制度は、漢魏以降を參酌して儉素に從ひ、第三代眞宗の時、淑容・順容・儀婉・婉容を增して昭儀の上に置き、又貴儀を設けて淑儀の上に置き、左の如く定制とした。

貴妃、淑妃、宸妃、賢妃、德妃、
淑容、順容、儀婉、婉容、貴儀、淑儀、昭儀、順儀、婉儀。

後宮に怨嗟紛爭の聲なし

女官

淑媛、順媛、充媛、婕妤、美人、才人、御侍。

女官は五代の制によつて司簿を置き、宮中の簿書並に出納の事を掌らせ、又司賓を置き、並に縣君に封じた。又樂使を置いて宮中聲伎の事を掌らせ、並に群帔を賜うた。太宗の時尚宮太監を置いて司簿と共に國夫人郡夫人に封じ、又寶省・尚食・司寶・司儀・司給を置いて、或は郡君又縣君に封じ、後ち多少の變遷あり。眞宗の時司宮令を置き、尚宮の上に位せしめた。

【七五】代々の皇后皆明德儉素

賢后

太祖は四男六女あつたが、位を母后の遺言によつて弟太宗に讓り、太宗は九男七女。明德李皇后が眞宗を生み、眞宗の章穆郭皇后は儉約下を率る、賢后の譽があつた。眞宗は六男二女。李宸妃が仁宗を生んだ。

曹后の賢德

仁宗の曹皇后は慈聖光獻の四字を謚され前例を破つた。性儉慈、自ら稼穡し、蠶を飼うた。一夕衞卒數人が殿中に亂入し、宮嬪を廊下で斬つた。その悲鳴騷擾の聲が帝の耳に入つたので、帝は遽に起たんとしたが、后は閤を閉して出さず、身を以て帝を衞り、宦者を召してそれ〴〵計を授けた。先づ賊の火を縱つを慮り、水桶を持つて後を踵けさせ、炬を以て簾に放火するものあれば立所に消し止めさせた。又よく働く宦者の髮の一部を、后自ら剪つて、明日の行賞の驗とした。そこで宦者は死力を盡くして奮鬪し、賊を悉く擒にすることが出來た。賊の亂入に關係ある宮女が、帝の氣に入りの妃によつて哀を請うたが后は、國法を曲ぐる時は宮掖の肅清は何によつて期せんやと、固く執つて聽かず、帝も已むなくその宮女を誅殺した。

在宮六十年

仁宗の馮賢妃は良家の女を以て、九歲の時宮に入り、長じて仁宗に侍つたものであるが禁掖に在ること幾んぞ六十餘年、五朝に始終し、七十七で薨じた。こんな例は稀れである。

女中の堯舜

仁宗は三子皆夭し、太宗の曾孫英宗が位を繼いだ。英宗の宣仁聖烈高皇后は、女中の堯舜といはれた程の賢后であつた。英宗崩じ、高后の長子神宗立つ、神宗十四男十女。欽成朱皇后が哲宗を生み、欽慈陳皇后が徽宗を生み、顯仁韋皇后が高宗を生んだ。徽宗は二十一男三十四女。顯恭王皇后が欽宗を生み、顯仁韋皇后が高宗を生んだ。

宋の南渡

欽宗の卽位後間もなく、金軍が南下して汴京を陷入れ、上皇徽宗・欽宗・后妃・諸王等三

千餘人を捕へて北に還つた。此に於て高宗が位を繼いで江南に移つたが、これを宋の南渡といひ、それ以前を北宋、以後を南宋とよぶに至つた。

皇后の儉素

高宗の憲聖慈烈吳皇后も亦賢后の譽があつた。高宗に子なく、太祖七世の子孝宗が皇太子となり大統を繼ぎ。孝宗の謝皇后亦儉素、自ら衣を洗濯した。成穆郭皇后が光宗を生む。光宗の慈懿李皇后が寧宗を生む。寧宗は九子皆早世し、太宗十世の孫理宗が位を嗣ぐ。

宋の末路の悲劇

猶子度宗、その三子恭宗・端宗・帝昺が相繼いだが、帝昺は元軍に追はれて逃げ延びる途中八歳で位に卽いたものである。南海の孤島厓山の一戰に大敗し、忠臣陸秀夫が先づ自分の妻子を舟から海中に追ひ入れ、次で帝を負ふて入水した。後宮諸臣が從つて死ぬるもの多く、七日經つて海上に浮んだ屍は十萬餘人であつた。宋の最後は我が國の平氏によく似て居る。

楊太后は帝の入水を聞いて慟哭し「今日まで各地を流浪しつゝ生き永らへて居たのは、偏に趙氏の一塊肉を守り立てん爲めであつた、今は望も斷たれた」と、海に跳り入つて水底の藻屑と化した。

遼

太祖(耶律阿保機)1 ─┬─ 東丹王 ─ 3世宗 ─ 5景宗 ─ 6聖宗
　　└─ 2太宗 ─ 4穆宗

7興宗 ─ 8道宗 ─ 濬(昭懷太子) ─ 9天祚帝

【七六】 后妃自ら三軍を指麾す

宋の眞宗が、歲幣として金銀絹帛を贈つて和親を結んでゐた遼は、もと契丹と稱する滿洲族で、唐末に耶律陀保機が帝と稱し、太祖・太宗・穆宗・世宗・景宗を經て聖宗に至り、その領土、西は天山より東は日本海に及び、內外蒙古を包み、六十餘國が之に朝し、朝鮮半島も之に隷屬して、頗る勢力を揮つてゐた。興宗・道宗を經て漸く振はず、天祚帝に至つ

后妃自ら三軍を指麾す

て金の爲めに滅ぼされた。九世二百十年。

遼は皇后を突厥の稱號によつて可敦といひ、國語では胡俚寒と稱し、尊んで耨幹麻と呼んだ。蓋し后土に配して之を母とするの稱である。そして皇后を出す族は乙室拔里氏に限り、同氏は漢の相國蕭何に比して遂に蕭氏と稱し、帝耶律氏は又漢の高祖を慕うて劉氏と稱した。

皇后に蕭氏

太祖の淳欽皇后は果斷雄略。娘時代に青牛の車に乘つて太祖に途に出遇ひ、始めて見初められたものである。土俗地祇を青牛嫗といつたので、帝卽位の時臣下が尊稱を上つて地皇后といひ、後應天大明地皇后と尊んだ。后自ら兵を勒して敵を破りその名は諸夷に震うた。渤海を平らけた如き、后の謀が與つて力があつた。太祖崩後、制を稱し、大葬の時に及んで自ら身を以て殉ぜんとしたが、親戚百官に力諫されて思ひ止まり、右腕を斷つて柩の中に納れた。太宗卽位の後、廣德至仁昭烈崇簡應天太后と尊號を加へ、太宗以下一々その指揮を受けた。

皇后敵を破る

遼は鞍馬を以て家となし、騎射田獵を業とした關係上、歷代の皇后多くは勇武、軍事に參與し、中には自ら兵を率ゐて戰つたものも多い。太宗の靖安皇后蕭氏は、軍旅田獵と雖も必ず從ひ、世宗の懷節皇后蕭氏も雄略があつた。妃甄氏はもと後唐の宮人で姿色あり、太宗が南征して獲たものであるが、風神閑雅、內治法あり、帷幄に參畫した。景宗の睿知皇后蕭氏は、自ら戎車に御して三軍を指麾し、賞罰信明、將士その用を爲すを樂んだ。遼はこの時代が最も强盛であつた。

軍旅田獵に從ふ

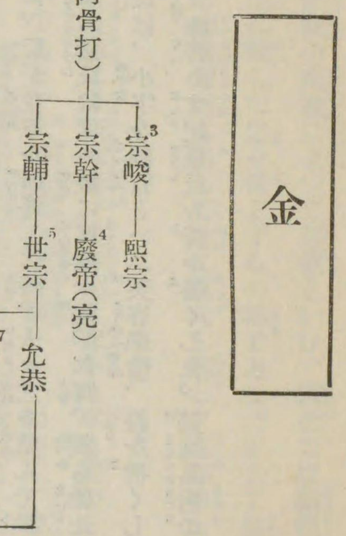
聖宗の仁德皇后蕭氏は、十二歲で選ばれて掖庭に入り、後ち冊して齊天皇后と呼ばれた。密に有司に命じて淸風・天祥・八方の三殿を造り、旣に成つてます〳〵寵せられ、乘るところの車に龍首鴟尾を附け、飾るに黃金を以てし、又九龍の輅を造り、又白金を以て浮圖を鑄造した。后が花下を逍遙した時、人々之を望んで神仙かと疑つたといふ。

興宗の仁懿皇后蕭氏は、一族に反逆が起つた時、親ら衞士を督して、伐ち破つた。道宗の懿德皇后蕭氏は、小字を觀音といふ美容絕倫、詩を善くし琵琶に巧み、十香詞を以て有名であつた。天祚帝の文妃蕭氏も詩を善くした。懿德皇后のことは麗人と情豪の章に詳記す。

美容神仙の如し

懿德皇后

金帝系



金の勃興

【七七】 后妃に位階なく衆妾雜居

初め遼に屬してゐた黑龍江畔の女眞（渤海の別族、唐時代の靺鞨）は、酋長阿骨打に至つて獨立し、遼を破つて渤海・遼陽・遼西地方を併せ、國を大金と號した。阿骨打が卽ち金の太祖太聖武皇帝である。弟太宗が繼ぎ、大擧遼を滅して天祚帝を生擒にし、次で宋に逼り汴京を陷れて徽宗・欽宗以下三千人を虜とした。

初め皇后なし

金は城郭官室が無く、茫漠たる大原に芨舍（草葺）して住み、水草を逐うて移住する民であつた。遼を滅し宋を破るに及んで會寧（吉林）に大屋を營んで都した。太祖太宗の時はまだ皇后なく、諸妃も亦位號なく、衆妾雜居の有樣であつた。

位階漸く繁多

第三代、熙宗に至つて、貴妃、賢妃、德妃の目を定め、次で海陵王亮は嬖幸の妃頗る多く、位號も繁雜となつた。

元妃、妹妃、惠妃、貴妃、賢妃、宸妃、麗妃、淑妃、德妃、昭妃、溫妃、柔妃、（なほ昭儀以下數十階）

次の世宗は大に簡少し、章宗に至りて內官を具備した。諸妃を三夫人として正一品に比し、昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・修媛・充儀・充容・充媛を九嬪として正二品に比し、婕妤九人正三品。美人九人正四品。才人九人正五品。これを二十七世婦とし、寶林二十七人正六品。御女二十七人正七品。采女二十七人正八品とし、之れを八十一御妻とした。又別に尙

后妃に位階なく衆妾雜居

宮、尙儀、尙服、尙食、尙寢、尙功の六尙を設けた。

太祖四妻

太祖は四妻。唐括氏（聖穆皇后と謚す）は熙宗の父景宣を生み、裴滿氏（光懿皇后）は廢帝海陵の父宗幹を生み、僕散氏（宣獻皇后）は世宗の父睿宗を生み、紇石烈氏（欽憲皇后）は太皇太后宮と尊ばれ、保祐の功があつた。

一時平和

徽宗を弑して位を簒つた海陵王は淫虐古今に絕するものであつた。世宗は宋の請ひを容れて和睦し、南北征伐の事なきこと三十餘年に及び、共に平和を樂しんだ。その後、蒙古が新に北方に興るに及び、大勢に一變を來した。

金は建國から九代百二十年、元の太宗の爲めに滅ぼされた。

【七八】幕に蔽はれて宮嬪に講義

道德文學を講義

金は前述の如く、女眞民族で、通古斯種に屬し、時代によつて肅愼といひ挹婁といひ、勿吉といひ靺鞨といひ、北方黑水附近の一蠻族であるから、道德や文學があらう筈なく、たゞ蠻勇武骨一遍で國を建てたものである。故に後宮の妃嬪に學問や道德を講義さす宮敎といふ敎官を設置した。漢の文化を吸收せんとしたのである。

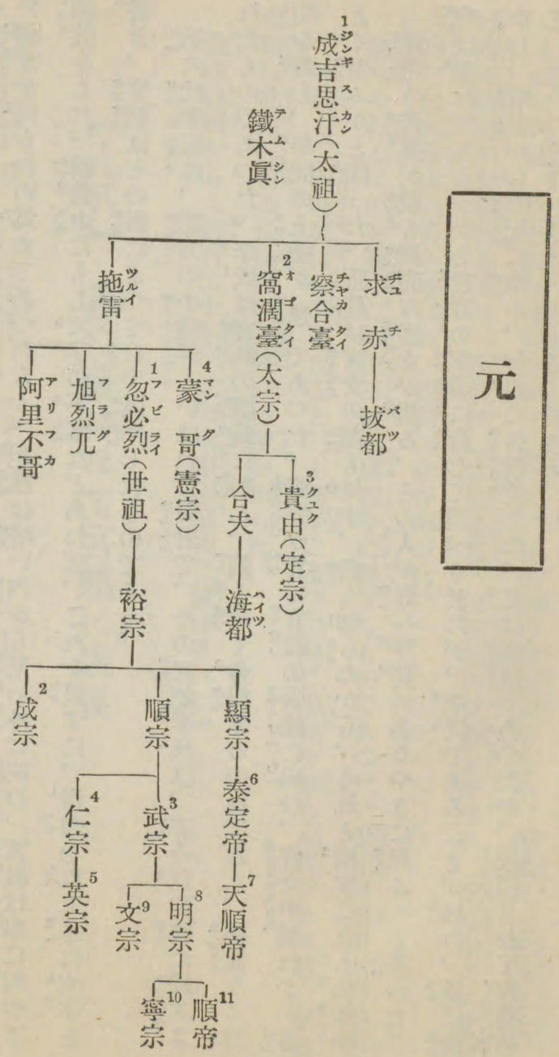
青紗の幕で遮蔽

敎室には青色の紗幕を張つて內外の障屛となし、妃嬪は幕の內に居並び、宮敎は幕の外に立ち、妃嬪の顏を宮敎に見せぬやうにした。これは宮敎が漢人の老儒であるから、宮闈の祕密を知られぬ爲めであつたらう。妃嬪は暗い內から明い外に向ひ、宮敎は幕に對つて講義をした。講義中にもし文字の不審などあれば、これを質すに、指頭を以て幕に文字を書き、宮敎はその影によつて口で說明したものである。

李妃の聰慧

第六代章宗は、北方の小堯舜といはれた賢君で、その元妃李氏は、罪を以て宮に沒入されたものであつた。李氏は宮敎の講義に對し、頗る早く會得するのみでなく、遠慮なく質問を發し、學問の上達が速であつた。章宗が嘗て宮敎の張建に向ひ、宮女中誰れが一番よく習ふかと問うた。張建は宮女の顏も見ず、名も知らぬから、それと指すことも出來ず「質問の音聲が最も淸亮な宮女が居る、その人が敎へ甲斐のあるやうに思ふ」と答へた。帝は誰れであらうかと宦官の梁道に命じて調べさせたが、李氏であることが知れ、遂に愛幸し、昭容から淑妃に進め、父祖に皆贈位した。兄は盜賊であつたが、拔擢されて權勢朝廷を傾け、群小が爭うてその門に伺候した。

元帝系



情豪成吉思汗

【七九】敵國の征服と婦女の掠奪

朔漠蒙古から起つて東西兩洋を席卷し、空前絶後の大帝國を建てた元の太祖成吉思汗（鐵木眞）は、不世出の英傑であると共に又折花攀柳の情豪であつた。嘗て人に謂つて曰く、

「人間は如何に偉くとも、日光が遠近を照らして猶ほ光の及ばぬところがあるやうに、人力も亦及ばぬところがある。例へば家庭内の如き、之は女の佐けに俟たねばならぬ。故に家婦を見て其の夫の賢愚は知れる。男は家政を婦に委せ、外に出て狩獵に力め騎射を習ひ一旦事あるの日は一人數騎を從へて奔馳し、驚颷掣電の如く、向ふ所前なく、且つ敵國の糧に依らねばならぬ云々」と、成吉思汗が懸軍萬里、征戎四年にして中央亞細亞を截定したのは、賢婦が家庭に居り、內顧の憂が無かつたからである。

成吉思汗は天成の征服者であつた。一日臣下に向ひ、人生何ものが最も樂しいかと問うた。一人は駿馬に跨つて田獵するが樂しいと答へ、一人は名鷹を以て飛禽を搏擊するが樂しいと答へた。汗は笑つて

「さうでない、人生の樂しみは仇敵を殲滅すること木の根を拔くが如く、敵國の妻女を納れて以て後宮に充つるが最も壯快である」と言つた。成吉思汗程の英傑も、矢張婦女掠奪を攻伐の目的の一部としてゐたのである。

征服と婦女掠奪

妃妾は多く敵國の妻女

唐古特を攻め、進んで黄河の左岸なる寧夏を圍んだ時、唐古特王は、その女を差出して和を請うた。汗は喜んで之を納れた。又撒馬爾干を征伏して歸る時、命じてムハメットの若き母と其の妻妾等を路傍に列立させ、之を後軍に屬して蒙古へ拉し還つた。

その他各種民族一千戸毎に、艶麗な少女又は貴女才女各一人を選び、年首に於て酋長又萬夫長をして汗に差出さしめた。氣に入つた女は後宮に止め、又諸子の妻妾とした。

阿眞の剛勇

回鶻を擊ち、西夏を征し、西遼を滅し、花剌子模を陷れた都度、その美女を生擒して還り、皆後宮に備へた。愛した妃妾は總べて五百人に達した。後ち波斯を征した時、王を殺してその后を擒としたが、后は汗の寵を受け、汗の崩じた時殉死した。

成吉思汗に阿眞といふ娘があつた。花剌散を征した時、先鋒にあつた阿眞の夫が敵刃に殪れた。阿眞は大に怒り、自ら一萬の精兵を率ゐて敵城を屠り、命じて目に觸るゝ敵國人は老幼となく皆斬り殺させた。

【八〇】二人乃至二十三人の皇后

太祖は二十三皇后

皇后の四階級

バイカル湖の東、黑龍江の上流なる斡難河、克魯連河の水源不而罕山麓を根據とした元は、固より遊牧の蠻民であつたから、後宮制度も自づから他と異つてゐた。皇后も一人でなく、二三十人まであつて員數は一定して居らぬ。成思吉汗には皇后格のものが二十三人あつて、それを四階級に分つた。首位に居るものを正宮皇后と稱し、必ず冊寶あり、次皇后、三皇后以下にはそれがなかつた。氏名は漢字を充てゝあるが讀みが難しい。二十三人の階級と氏名は左の通りであつた。

大鄂爾多、七位＝布爾持格勒津（大皇后）、和拉袞、果勒濟雅坦、托果斯、特默倫、額琳沁巴勒、巴延呼圖克。

第二鄂爾多、四位＝呼蘭、哈勒巴津、伊實琳沁、托歡徹爾。

第三鄂爾多、七位＝伊蘇、和拉哈剌、阿齊蘭、圖勒古爾、徹爾、阿實克默色、鄂勒哲呼圖克。

第四鄂爾多、五位＝伊蘇肯、琿塔噶、哈達、鄂勒哲和斯、雅爾。

以上、鄂爾多とは斡耳朶とも書き、遼の遺制で、大行帳の在るところをいふ。卽ち天子の居所には宮衞を置き、崩ずれば后妃の宮帳に徙し、以て陵寢に奉じた。これを斡耳朶と

いつたのである。

金の宣宗が元に和を請うた時、衛紹王公主を太祖に送つた。これを公主皇后と稱し第四位に置いた。第二世太宗以下の皇后左の如し。

太宗窩濶臺＝巴喇噶沁皇后（正宮皇后）、昂輝二皇后、克勒奇庫塔納二皇后、塔納奇六皇后。

定宗貴由＝惟烏拉海額實。

憲宗蒙哥＝呼爾察、以下四人。

世祖忽必烈＝圖古哩克大皇后を大鄂爾多となし、以下第四鄂爾多まで合計八人、又蘇哈達實皇后あり。

成宗鐵木耳＝布爾罕、外一人。

武宗海山＝珍格、以下二人。

仁宗愛育黎拔力八達＝阿南達實哩、外一人。

英宗碩德八剌＝蘇喀巴拉、以下二人。

泰定帝也孫鐵木兒＝巴拜哈斯、以下九人。

明宗和世琺＝温都綽歡、以下六人。

文宗圖帖睦爾＝惟布達實哩。

寧宗懿璘質班＝惟塔哩雅圖默色。

順帝妥懽帖睦爾＝喇特納實哩（正克皇后）、以下二人。

以上は皇后級のものゝみで、それ以下の嬪御の多かつたことは固よりである。

太宗窩濶臺は成吉思汗の第三子である、太汗の位に上るや、名臣耶律楚材が之を援け、蠻風を改めて萬事漢の文化を輸入し、都を喀剌喀林（外蒙古西庫倫）に奠め、遊牧の天幕生活を變じて堂々と都制を施いた。

太宗は父の氣象と理想とを承け繼ぎ、金を滅し高麗を服し、歐羅巴に侵入して露西亞、墺地利、伊太利に及び、欽察汗國を建設した。

【八一】　美女徵發と高麗の貢女

太宗も父に劣らぬ情豪で、千軍萬馬の間を馳騁しつゝ酒を嗜み、色を漁つた。托歡が、美女徵發と高麗の貢女

前朝の例によつて天下に秀女を選ぶことを勸めた時、耶律楚材はそれに反對し、「曩に二十八人の美女を選んで後宮に納れ、今又天下に命令することは、徒らに庶民を擾すの恐れがある」と諫めた。晩年に及んで益酒色を樂しみ、幾度か秀女を選んだ。

皇后執政

太宗崩後、皇后脫列哥那が政を執ること五年、外征から歸つた己が子貴由を大汗の位に上せた。之が定宗である。在位三年で崩じ、太宗の弟拖雷の子蒙哥が嗣いだ。之が憲宗である。弟忽必烈は吐蕃、雲南、交趾を降し、末弟旭烈兀は小亞細亞一帶を定めて伊兒汗國を建てた。

世祖の攻略

忽必烈（世祖）が卽位し、都を燕京（北京）に遷して大都と稱し、終に宋を滅し、勢に乘じて海東に位する我が神州を伐たんとして失敗し、念を東に絕つて鉾を南に向け、緬甸・暹羅・瓜哇・俱藍（印度南端）等十國を朝貢させ、更に南洋に及び、蒙古帝國の版圖は絕大となつた。

選女と有司の狼藉

斯く世祖は好戰王として威を振ひ、元室の統治と共に四汗國をも統率し、屢々天下に秀女を選んだ。秀女を選ぶの際有司どもが勅命と稱して狼藉を働き、良家の處女を犯し、掠奪を行ひ、民患を爲したので、邪律鑄の上奏を容れ、大郡は歲に三人、小郡は二人を採つて其の可なるものを擇び、選に入つたものゝ父母には厚く賜ひ、選に落ちたものは直ちに鄉に歸へすことゝした。後ち又御史中丞崔彧の言を以て、客路に處女を選んで旅舍のお伽に進めることをも廢した。

高麗の女を貢進

世宗を極盛期として成宗以降漸く衰運に向ひ、武宗などは屢々天下に秀女を選び、更に高麗に命じて美女を貢獻させた。一體高麗に美女を求めたのは國初からの事で、高麗が元に順服した時美女を奉つたのが例となつたものである。年若い處女が故國を離れて遠く元室に犧牲となることは、堪へ難い悲哀であつたらう。故に高麗では

「女を生んで擧げず」。「女長じて嫁するを得ず」。

といふ弊害を生じてゐた。しかし順帝の次后奇氏完の如きは、高麗の女で寵愛を受けて后位に上つたものである。又文宗の丞相燕鐵木兒は、宮中に居た高麗の女不顏帖儞を帝から賜はつて妻とした。

高麗の騷擾

高麗へ處女貢獻の命令が下ると、民間では非常に騷擾したものである。『芝峯類說』に

「正德辛巳に元の武帝我が國に勅令し、女子を選進せしむ。士太夫の家女は貧富となく倉卒として婚嫁し、殆んど盡くせり。たま〳〵帝崩ずるに及んで止む。蓋し古今事同

じ。」

とある。明の時代にも高麗へ美女を求めた、成祖の妃權氏は高麗の女で、賢妃にまで上つた。

世祖の后の賢德

【八二】三帝を生んだ屠者の娘

元の后妃中、四德（婦容・婦言・婦德・婦功）の兼ね備はつたものは、世祖忽必烈の皇后必弘吉剌氏（昭睿順聖皇后）に過ぐるものはない。元朝のみでなく、各朝を通じて賢后と稱せられるもの丶中、尤も右翼に位すべきものであらう。后は宮女を率ゐて親ら女工を執り、古い弓絃を解いて練り、紬を織つて衣を縫うたり、廢物の羊皮を縫ひ合せて敷物に作つたり、更に棄て去る物は無かつた。宋を討つて江南を平らげた時、祝宴を開いて君臣皆歡を盡くしたが、后のみは樂しまなかつた。帝が、「今後甲兵を用ひず、天下泰平となるに何故獨り樂しまぬか」と問へば、「妾聞く、古より千歲の國なしと、吾が子孫も亦宋の子孫の今日の如き日が來ぬとも限らぬ」と、憮然として答へた。

同上

裕宗の后の慧敏

又分捕つて來た宋の寶物を後庭に並べて、后に氣に入つたものを取らせたが、后は手を出さず「之は宋室が貯藏して子孫の爲めに遺し、その子孫が守る能はず、終に敵の手に歸した品である。それを思へば一物も取るに忍びぬ」と言つて何物をも取らなかつた。嬪子裕宗は后の生むところである。

裕宗の后なる徽仁裕聖皇后は屠者の娘で、名を洎藍也怯赤といつた。顯宗（泰宣帝の父）、順宗（武宗・仁宗の父）、成宗の三帝を生んだ。世祖が嘗て田獵に出で、途で渴を覺えて一帳房（テントの家）に入つた時、留守居の少女がたゞ一人、駱駝の毛を緝むいでゐたが、馬湩があれば少々貰ひたいと請へば、「あることは有るが、丁度父母や兄が居らぬから」と斷つた。辭して家を出ようとすれば、引き止めて、

「私は處女である。獨り居るところへ、勝手に來て勝手に去ることは宜しくない。人の疑ひを招く恐れがある。父母が歸つて來るまでお待ち下さい」と言ふ。成程道理である。世祖も少女の一言に背くことも出來ず。庭先に彳んで待つて居ると、間もなくその父母が歸つて來た。懇懃に來意を陣べると、それは容易いことであると、早速馬湩を出して飲ます。名乘らずに辭したが、世祖は從臣に對つて「あんな賢明な女子は人の婦として立派なもの

だ」と嘆賞した。

貧家から迎立

その後諸臣と共に太子（裕宗）の妃を擇んだ時、諸臣の薦めるところは悉く氣に入らなかつた。時に一老臣が、曩に一帳房の中で見た少女のことを語り、まだ嫁して居らぬことを話したので、世祖は大に喜び、使臣を以て交渉し、迎へて太子妃とした。貧賤の家に生れたに似ず、頗る謹直で美容。世祖は賢德媳と稱して可愛がつた。昭睿順聖皇后に侍り常に左右を離れず、皇后が溷厠に行くと、用ふるところの紙は、自分の顏を擦つて柔らかく且つ温くして奉つた。その他婦德が多かつた。

【八三】喇嘛の妖術と亡國の因

喇嘛教と道教

元は西藏の佛教ともいふべき喇嘛教を國教として各種の宗教の上に置いた。喇嘛教は西曆八世紀頃印度から來たパドマサムトワ師が印度の密教と西藏の民間宗教たる自然崇拜教とを結合して創めたもので、加持祈禱を主として冥護を禱る宗教である。世祖が信仰して普及したが、漢人間には依然道教が盛に行はれた。

仙藥大丹

順宗と演樸兒の法

喇嘛教も道教も時流に投じて、如何はしい邪說を說き、方士は仙術を修めて不老不死の大丹を造り、僧侶は蕃俗を輸入して祕密法を修め、頻りに淫風を煽動した。

或方士が大丹を世祖に勸めた時、時の碩學廉希憲が上奏し「秦の始皇や漢の武帝は此の種の方士に惑はされたが一向長生を得なかつた、堯や舜は大丹を呑まぬでも天壽を全うして長生した」と、例證を擧げて諫めた。

元の末世に及ぶと喇嘛僧は專横となり、墮落して一層害毒を流した。順宗は喇嘛僧伽璘眞を信じ、祕密大喜樂禪といふ一種の閨房補益の術を習ひ、遊宴に耽つて宮女十六人を以て天魔の舞を組織し、又宮女十一人を以て樂人を組織し、宮中の讃佛毎に演舞奏樂させ、或は廣く美女子を集めて宮中で淫戲し、僧侶や帝の諸弟諸臣も加はり、君臣交々淫を宣べた。之を演樸兒の法と呼び、醜態穢行の限りを盡くし、帝は自ら仙人を氣取つて王宸館瓊花第一洞霞小仙と號した。

斯くの如き元の驕奢は偶々漢人の反抗を挑發し、群雄一時に競ひ起るに至り、終に明の爲めに滅ぼされた。成吉思汗から十五世百五十年。

× × × ×

清朝と喇嘛

清時代にも喇嘛教は歴代信仰を受け、康熙帝の如きは、活き佛といはれた喇嘛の宗長を西藏から召し、享樂を目的とする補益の術など授かつた。皇室の好むところは民間にも傳はり、北京市内は喇嘛僧の跋扈を見るに至り、風俗の頽廢を招いた。

美人の春閨三十態の詩に入るべきもの。

曉起　梳頭　醜面　傅粉　畫眉　對鏡　薰香　試衣
下階　折花　背立　攏鬢　裁衣　縫衣　綉鞋　停針
彈棋　午睡　懶起　喚婢　捲簾　吟詩　倚闌　出浴
夜香　坐月　調琴　卸粧　拂牀　入帳

美人を見るに適はしい十處

樓上　燈下　墻頭　舟中　馬上　簾內　池上　花間
月下　林下

明

太祖（朱元璋）（洪武帝）
- 懿文太子（標）
- 2 惠帝（建文帝）
- 3 成祖（永樂帝）
- 4 仁宗
- 5 宣宗
- 7 代宗（景帝）
- 6 8 英宗（復位）
- 9 憲宗
- 興獻王
- 10 孝宗
- 11 武宗
- 12 世宗（嘉靖帝）
- 13 穆宗
- 14 神宗（萬曆帝）
- 15 光宗
- 16 熹宗
- 17 毅宗（崇禎帝）
- 18 福王（安宗）
- □
- 19 桂王（帝由榔）

【八四】宮闈の嚴肅と內外の離隔

明の太祖（朱元璋）は貧賤から蹶起し、終に元を破つて金陵（南京）に卽位し、心を內

宮闈の嚴肅と內外の離隔

治に用ひたが、子孫の爲めを慮つて多く功臣を殺戮し、同族諸王を要地に封じた。『二十二史劄記』に評して曰く

「明祖、諸功臣の力を藉つて以て天下を取り、天下既に定まるに及んで、卽ち盡く天下を取るの人を殺す。その殘忍實に千古未だ有らざる所、蓋し英雄猜疑にして殺を好む、本それ天性か。漢高の功臣を戮す、亦韓・彭・欒・布に止まり、其の反を利して之を誅す。漢光武・唐太宗の天下を定むるや、時方に年少。身の老ゆるを計れば則ち諸功臣已に皆衰歿。明祖は年已に六十餘、懿文太子又柔仁、懿文死し孫更に孱弱、遂に身後の慮を爲さざるを得ず。以て一網打盡す云々。」と

後宮の振肅

かく猜疑心强く、功臣の剪除を事としたが、後宮は儉素を旨とし、制度を整へ、妃嬪の數を減じ、放縱を警めたので、肅然として前代淫靡の風を一拂した。殊に皇后馬氏は賢明仁慈で、德を以て後宮を率ゐ、稀に見る有德の賢后であつた。

女誡の編修

太祖は前代の女禍に鑒みて綱紀を振肅し、卽位の初め、儒臣に命じて女誡を編修させた。此時翰林學士朱升を諭して曰く

「天下を治むる者は身を修むるを本となし、家を正すを先となす。后妃は天下に母儀たりと雖も、然れ共政事に預らしむべからず。嬪嬙の屬に至つては、巾櫛に奉侍し、恩寵或は過ぎて禮を踰え、上下序を失ふ。歷代の宮闈、政の內より出づるものは禍亂を爲さざるもの鮮し。夫れ內嬖の人を惑すこと鴆毒よりも甚し、惟だ明主よく未然に察す。卿等それ女誡を纂述し、古賢妃の事に及び、後世子孫をして持守する所を知らしめよ。」

女職の制

と、その心掛けを知るべし。その後禮臣に命じて宮官女職の制を議したが、禮臣どもは、「周は後宮に內官を設けて內治を贊け、漢は內官十四等凡そ數百人を設け、唐は六局二十四司凡そ百九十人と女使五十餘人を設け、皆良家の女を選んで之に充てた」と、古來の例を言上に及ぶと、太祖は古今を折衷せよと命じ、六局一司凡そ七十五人と女使十八人とを制定し、唐制よりも百五十人ばかりを減少した。六局とは隋唐と同じく、尙宮、尙儀、尙服、尙食、尙寢、尙功をいひ、一司は宮正といつた。宮正は戒令責罰を掌り、各局には又四司を置き、尙官司は六局を總べた。

妃嬪の位階

太祖は又、妃嬪の位號に、充華・美人・昭容・修媛などの名稱あるは、名と實と違ひ、色を主とし德に悖るものだといひ、悉く前代の位號を罷め、たゞ閨房雍肅の旨を以て、賢、

淑、莊、敬、惠、順、康、寧の八字を用ひることにした。但し後に貴妃を增した。

貴妃、賢妃、淑妃、莊妃、敬妃、惠妃、順妃、康妃、寧妃。

内外の墻壁

宮中には、皇妃を戒める詞を紅牌に刻んで懸け、妃嬪の衣食費、金銀幣帛の供給など、一切尚宮局の稟議を俟ち、内使監によつて奏請させ、若し之を怠つた時は死罪に論じた。又宮内の私事私書を外に漏洩した者ある時は、同じく死罪に處することゝし、妃嬪以下疾病に罹るも、醫者は宮内に入ることを許さず、たゞ證明書を以て藥を取るに過ぎず、内外の墻壁を嚴にした。故に明代を通じて、後宮の風紀は頗る嚴正、妃嬪の美德も外廷では罕に聞くの有樣であつた。

位階增加

併し代を逐うて漸く淫靡、宮嬪の數も增加し、位階も增加され、貴妃の上に皇貴妃といふ后に亞ぐ位號も設けられた。增加したものは、

皇貴妃、麗妃、慧妃、昭妃、宸妃、裕妃、懿妃、成妃、充妃、淑女、才人。

等で二十餘階となつた。

【八五】后妃の殉死と長い謚號

殉死の風習

明代には、皇帝又諸王が死んだ時、その妃嬪が殉死する風習があつた。太祖が崩じた時の如きは、多數の妃嬪がその死に從つた。殉死者の遺族は優遇し、天女戸と稱する封戸を世襲させた。惠帝・成祖・仁宗・宣宗の時まで行はれ、英宗に至つて始めて禁止された。

位階追陞

宣宗に殉じた妃嬪十人には、英宗の卽位と同時に位號を追陞した。卽ち

何氏を貴妃とし端靜と謚す。趙氏を賢妃とし純靜と謚す。吳氏を惠妃、謚貞順。焦氏を淑妃、謚莊靜。曹氏を敬妃、謚莊順。徐氏を順妃、謚貞惠。袁氏を麗妃、謚恭定。諸氏を淑妃、謚貞靜。李氏を充妃、謚恭順。何氏を成妃、謚肅僖。

以上、その冊文に曰く

漸く嚴禁

「玆に身を委ねて義を蹈み、龍馭に隨ひ以て上賓す。宜しく徽稱を薦め、以て節行を彰はすべし。」と。

景帝は成王の時に薨じたが、この時なほ殉死の制を用ひた。周王有燉は死に臨み、妃や

夫人の殉死を止め、年少く父母あるものは其の家へ遣り歸へすことを遺言した。併し妃の鞏氏、夫人の施氏・歐氏・陳氏・張氏・韓氏・李氏が皆殉じた。後ち妃に貞烈、夫人に貞順と諡した。斯く殉死は太祖以來の惰性を以て、止めても止まらなかつたが、英宗が崩じた時、遺詔して嚴禁し、後世復た爲す勿れと言つたので、終に定制となつた。

長い諡號

明は皇后 又后 太后の崩後、長い〳〵諡を一回ならず二回三回と更めて贈つた。二三例を擧げると、

太祖馬皇后は、洪武十五年に崩ずると共に孝慈皇后と諡し、成祖の永樂元年、孝慈昭憲至仁文德承天順聖高皇后と諡し、更に世宗の嘉靖十七年、孝慈貞化哲順仁徽成天育聖至德高皇后の十七字號を諡した。

成祖徐皇后、永樂五年崩。仁孝皇后と諡し、仁宗の卽位後改葬して、仁孝慈懿誠明莊獻配天齊聖文皇后と諡した。

仁宗張皇后、正統七年崩。誠孝恭肅明德弘仁順天哲聖太皇太后と諡した。

宣宗胡皇后、天順六年崩、孝恭懿憲慈仁莊烈齊天配聖章皇后（以下略）

【八六】民間の良家に秀女を選ぶ

秀女を選ぶの謠

明は天子諸王の后妃宮嬪を悉く民間良家から選び、臣下又一族から薦めて出たものは納れぬ制度であつた。たゞ第三代成祖の仁孝皇后が中山王達の長女であつた外、太子又王の妃に一二除外例があるのみである。故に新君が登極すると、「秀女を選ぶ」の謠が天下に流行し、年頃の美貌の女は、小さい胸を躍らしたものである。

民間に求めた理由

太祖が民間から選妃する制度を設けた所以には深意があつた。――漢の宣帝の許皇后は微賤の時から掖庭に養はれ、宣帝がまだ太子である時に妃となり、元帝を生み、立后後も輿服その他至つて儉素であつたが、許皇后の崩後、尋いで立后した霍皇后は、大將軍霍光の女で、光が納れて直ちに冊立された關係上、實家を背景に權威を揮ひ、賞賜の如きも、動もすると千萬を以て計へ、驕奢を以て帝室を危うくした。此の兩者に就て得失を考へると、民間から採用すると閭里の生計に慣れて質素を以て身を持し、能く人君を輔佐するが、勳功の舊臣から採用すると、霍后や王后が漢に禍し、賈后が晉に禍したやうな結果

を來す。――といふ前朝の得失に鑑みたものであつた。

西京並に附近に物色

成祖の時、都を北京に遷した。その關係で中葉以前は多く兩京（北京と南京）並にその附近から選妃し、中葉以降は北京に近いところに物色した。歴代の后妃の出身地を見ると南人＝宣帝の胡后（濟寧人）、孫后（鄒平人）、吳妃（丹徒人）、郭嬪（鳳陽人）。英宗の錢后（海州人）、憲宋の王后と武宋の夏后（共に上元人）、世宗の方后（江寧人）。北人＝憲宗の吳后、光宗の郭后と王妃、景帝の汪后（共に順天）、世宗の杜妃と神宗の鄭貴妃（共に大興人）、英宗の周妃と穆宗の李后（共に昌平人）。穆宗の陳后（通州人）。神宗の王后（餘姚人北京に生る）。

九嬪を册す

斯く兩京を中心とし、遠隔の地からは選ばず。又後宮の制度も、初めは三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻を立てなかつたが、世宗の時、大學士張璁が周の制度を言上し「陛下春秋なほ壯、宜しく淑女を博く求め、嗣を廣むるの計を爲せ」と說いたので、帝は之に從ひ、第三后の孝烈皇后方氏を立てると共に、鄭氏・王氏・閻氏・韋氏・沈氏・盧氏・沉氏・杜氏を册して九嬪とし、九翟冠を冠らせた。

【八七】落選歸還の者も亦幸運

秀女の豫選と本選

秀女を選ぶ時は、朝廷の官吏が詔を以て派遣され、地方官と共に力を協せて物色し、女中の秀は、逸せぬやう銓衡にかけたものである。豫選に當ると京師に護送され、そこで今一度嚴選される。飾ひ落されて鄕に還るものは、表面不名譽のやうでも實は幸福なので一旦豫選に入つたものは秀女といふ折紙附きとなり、この女の相場は一躍昂騰し、結婚申込みが殺到するのである。本人も亦自負心を增大し、容易に售らぬ。售るとなれば富貴の家を選んで玉の輿に乘られるのである。

落選歸鄕の者

光宗がまだ東宮にゐた頃、詔して元妃を選んだ。劉大姑と郭后と后の女弟との三人が同じく豫選に入り、劉大姑と后の女弟とが落選して、金幣を賜ひ、家に還つた。その時、貴人の家から、重聘を以て婚姻を申込むもの多く、女弟は軈て成山伯夫人となつたが、大姑は申込を悉く拒絕し、民間に嫁ぐことを肯んじなかつた。その理由とするところは、一旦選ばれて元妃（郭后）と同じく起臥すること三ケ月にも及んだのであるから、義とし

て外間に嫁ぐ譯にゆかぬといふのである。そこで一生貞節を守つて歿した。妙なところに貞節論を擔ぎ出したものである。

之より先き、憲宗の成化年中、命婦（大夫の妻）の入朝した時、尙書施純の妻が非常な美人で、擧止が端麗であつたので、皇后は暫らく凝視してゐたが、左右の者を顧みて、曩に太子の妃を選んだ時、何故こんな立派な婦人を選び殘したのであらうと言ひ、大に恨事とした。これを以て見ても、秀中の秀を悉く選拔してゐたことが知れる。

明の末年、群賊が所々に蜂起し、清も漸く强大となつた頃、賊李自成が帝都を陷し入れた。毅宗（崇禎帝）は先づ皇后を諭して自裁させたが、皇后は涙を揮ひ「陛下に事ふること十有八年、卒に今日あるを想はなかつた」と、慟哭して自ら縊れた。帝は劍を拔いて長平公主を斫り、「如何が故に我が家に生れて今日の悲しみを見る」と、次で袁貴妃に自縊させたが、繩が斷れて蘇つた。帝は劍を以てその肩を斫り、尙愛妃數人を殺し、自らは帛を以て自盡した。群臣難に殉するもの范景文以下數十人。宮嬪も御河に投じて死するもの百數十人に及んだ。

秀女を逸す

明末宮嬪の悲劇

美人費氏は胥井（水のない井戸）に投じたが、賊軍に發見され、鉤によつて引出された。

費氏の壯烈

時に年十六、賊はその美貌を見て、爭ひ奪はんとしたが、我は長公主であると結いたので賊將李自成の許に送られた、自成は幕下の將羅某の妻に賜うた。費氏は又結いて、よろしく花燭の典を擧げ歡を交ゆべしと、酒を强ひて醉はせ、隱し持つた利刃を拔き、その咽喉を貫いて卽死さて、自分も刎ねて死んだ。

その後間もなく、清の世祖（順治帝）は李自成を滅し、都を北京に遷して江北の大半を奄有したが、明の敗將は舊都南京に集り、毅宗の從弟福王を擁立し、江南に據つて清に對抗した。この時、福王は使臣を四方に派して秀女を覓め、處女の居る家には悉く黃色の紙を貼り置き、車に載せて南京へ運び去つた。國家の滅亡を前にして、咄嗟に秀女物色を行つたので、江南一帶騷然として爲すところを知らなかつた。子龍といふものが上疏して、その非を力諫したが、福王は明室の恢復を夢みて居る時で、更に聽かなかつた。

福王の秀女拉致

【八八】　六局の女職宦官に移る

女官は、太祖の卽位と同時に、唐に準じて六局を置き、五年に六局の品秩を定め、二十

女官の任期

六局の女職宦官に移る

二年に、在任五六年に及んで功勞あるものは鄕に歸つて婚嫁することを許し、又留任を願ふものは其の意に任すことゝした。永樂以降は六局の職多くは宦官に移り、女官はたゞ二三司のみにとゞまつた。

六局四司

六局を通じて各局に四司あり、その下に司・典・掌・女史あり、共に人員は二人乃至十人であつた。

尙宮局。尙宮二人。正五品。文書、啓奏、導引を掌る。
　司記（司記二人、典記二人、掌記二人、女史六人）。
　司言（司言二人、典言二人、掌言二人、女史二人）。
　司簿（司簿二人、典簿二人、掌簿二人、女史六人）。
　司闈（司闈六人、典闈六人、掌典六人、女史四人）。
尙儀局。尙儀二人。禮義起居の事を掌る。
　司籍（司籍二人、典籍二人、掌籍二人、女史十人）。
　司樂（司樂二人、典樂二人、掌樂二人、女史二人）。
　司賓（司賓二人、典賓二人、掌賓二人、女史二人）。
　司贊（司贊二人、典贊二人、掌贊二人、女史二人）。
形史（形史二人、正六品。宴見進御の序を掌る。凡そ后妃群妾の君に御するもの、形史その日月を謹書す）。
尙服局。尙食局。尙寢局。尙工局。共に前に準ず。なほ六局の外に宮正司あり。

宮正司

宮正司。宮正一人、司正二人、典正四人。糾察及び宮闈の戒令、謫罰の事を掌る。大事は奏聞す。女史四人功過を記す。

太子妃の選拔

【八九】選妃は正副三人の中から

明代には、太子の妃を選ぶ時、豫選に一人を正とし、二人を副とし、同時に正副三人を一組として採擇したものである。太后又皇后は青紗の幕に蔽はれて坐し、三人の容貌・擧止・言語等について銓衡し、選に當つたものゝ臂には金玉の跳脫（釧のこと）を繫ぎ、選に落ちたものゝ袖の中には、年月日を記した帖子を入れ、それ〴〵銀幣を賜うて鄕里に還

選妃は正副三人の中から

十三歳で入選

した。

熹宗の時、信王（毅宗）の妃に選ばれた莊烈皇后周氏は、田舍の藪醫者の娘で、貧困の裡に育つたものであつたが、性質貞靜にして漫りに言笑せず。容貌は明玉を欺き、肉身の者でさへ、之と語る時は瞑眩さを感じた。それが豫選に入つた時は十三歳の小娘で、體軀が至つて纖弱であつたから、試驗官の一人であつた懿安皇后（熹宗の后）は之を落選と定め、副の二人に就て選擇しようとした。此時劉昭妃（神宗の妃）が太后の資格を以てゐたので、皇后に反對し「たとへ今は小さくとも、他日屹度立派な皇后になれる素質を有つて居る」と主張し、終にその細い腕に跳脫は嵌められたのである。

疊香馥郁

この時既に太子妃は數人も居つたので、第三位に置かれた。後ち毅宗の卽位と共に冊立されて皇后に上り、宮政を司り、冗費を節減し、宮中の風紀を振肅して舊弊を一掃した。

毅宗の宮嬪では田貴妃・袁貴妃が最も寵愛を受けた。田は東・承乾宮に居り、袁は西・翊坤宮に居り、田は纏足三寸に滿たず。袁は纏足せず幾倍か大きかつた。且つ田は莊烈皇后のやうに粉澤を假らずして美しく、その居る所は常に異香が郁々として散せず。盛暑の時禮服を着てゐても更に汗を出さず、熱い羹を食つても額にさへ汗しなかつた程の美人で、

白衣の觀音

明宮の最後

笛に巧みに畫を善くしたから、六宮の寵を傾け、帝は常に田と博奕して樂しんだ。

后は甚だ質素で手づから衣を洗濯した。夏の服は從來帝の素葛以外は白色を用ひなかつたが、后は白紗を以て衫を作つて着た。それが又氷肌玉骨の美を飾つたので、帝は笑つて是れ眞に白衣の觀音なりと褒めた。それから田・袁兩貴妃その他の宮嬪まで悉く之に倣ひ素衫を服した下に緋の襯衣を着込んだから、紅白掩映して美觀を增した。后は令節には、眞珠の寶衫を着た。之は一大寶石の周圍に五粒の眞珠を簇らせて梅花に擬し、それを點々と衫衣に縫ひつけたものである。后は亦茉莉を愛し、坤寧殿の後庭に六十餘株を植ゑ、每晨その花を摘んで毬とし、雲鬢に綴り、又その香を挹んで衣服に移して樂しんだ。

崇禎十七年三月十七日。賊李自成の爲めに宮城が陷落した時。后は帝を再拜して永訣し光宗の王皇后（熹宗の母）、同孝純皇后、喜宗の懿安皇后と共に、其場に自ら縊れて死んだ。

【九〇】優遇された南蠻の才媛

番禺の女

明の太祖の洪武年中、及び成宗の永樂年中には、才色ある番禺の女が四五人選ばれて宮中に入つて居る。番禺は古への南越、粵、嶺表に屬する蠻地で、今の廣東・廣西・貴州地方である。

南國出の美人

從來此の地方は王化に潤ふこと少く、從つて、有名な美人を出して居らぬ。晉の石崇の愛姫綠珠は古越の地から出た美人として最も有名。次に唐の武后の時南海から進めた七歳の女子は、后が命じて兄に別るゝの詩を作らした時、

「別路雲初めて起り、
　嗟く所は人雁と異り、
　離亭葉正に飛ぶ、
　一行となつて飛ばず。」

と即席にやつてのけたのを以て有名。同じく順宗の時、南海から貢した奇女膚眉娘は、刺繡に巧みに媚嫵人の魂を銷し、南唐劉晟の時蘇才人は博く經史に通じ、才貌兼ぬ美しく宮中之を大家と稱した。劉鋹の時黄瓊芝、盧瓊仙、李蟾姬等皆宮掖に入つて女侍中となり、毎日紅雲の宴に侍つて諸學士と詩を賦して樂しんだ。此等は共に南人である。

屈氏

洪武二十二年に番禺から選ばれ、擢んでられて美人となり、恩寵の甚だ厚かつた屈氏は南國代表の麗人であつた。その父兄は遙々宮闕に召されて宴を賜ひ、幣帛を贈られ、官人が守護して鄕に送り還した。

陳瑞貞

同年頃、中使を派して民間の淑女を選んだ時、才女として選に入つた陳瑞貞は、書數を善くし文義に通じ、六尙を兼務したが、宮女多く師事し、女君子又女大夫と尊稱された。勤勞久しきの故を以て歸休を許され、その家に祿米を給し、有司は歳時を以て伺候した。

黄惟德

尋いで太宗卽位と同時に、典故に熟するの故を以て復た召出され、前職に復し、年四十で宮中に卒し、帝后共に涕泣して柩を送り、鄕里に歸葬した。

當時黄惟德も南國から選ばれて宮に入り、太祖・惠帝・成祖の三代に歷任して尙服局局正を勤めたものである。暇を賜うて歸る時、皇太后は送別の詩を賜うてその別れを惜んだ。

「皇　明列聖寰宇を御し、
　德風仁化家邦を治め、
　咨爾惟德女中の士、
　一たび召に應じ重宮に入りしより、
　昔時鬢髮今は霜の如し、
　九重の聖主天地の仁、
　偉烈宏謨千古に冠たり、
　內庭百職賢良を需む、
　少より從容禮義を知る、
　夙夜孜々として乃の事を勤む。
　歳月悠々老將に至らんとす。
　萬物をして陽春を同じうせしめんと欲す、

優遇された南蠻の才媛

此德を體し竟に歸去を賜ふ、
嶺海迢々千萬重、
宮錦を衣るを賜うて光輝を生じ、
喜ぶ爾富貴にして故鄉に歸るを、
筆を把つて詩を題す意盡し難し、
皇太后の慈仁愛撫の情と、黄惟德の幽閒貞淑の質と、兩々相俟つて一場の佳話を爲すものである。

乃ち心に感激し情は忻々、
潞河歸り棹す春風の裡、
親戚相迎へて人總べて喜ぶ、
我心爾を念うて恒に忘れず、
目は天南を極めて去雁翔る。」

葉氏

洪武二十四年、孝敬を以て選に入つた葉氏は、番禺に長じた才女で、烈女傳や女論語に通じ、宮に入つて後女官に任じ、その父母と弟は、闕に詣つて宴を賜ひ、錦衣金幣を授かつて家に還つた。

王氏

永樂二年、民間字を識る少女を求め、六尙の內職に充てた時、番禺から召された王氏は妙齡にして文學あり、淑德高く禮遇を受けた。その作つた宮詞に、

「瓊花移して大明の宮に入る、
旖旎たる濃香晩風に韻く、
贏ち得たり君王步輦を留むるを、
玉簫寥亮たり月明の中。」

降亂仙

その後明の宮女は皆此の詞を謳つたものである。

毅宗の崇禎年間に、降亂仙といふ美人が居つた。その詩の中に

「身は輕く風中に立つを許さず、
腕は白く月下に看せしむるを愁ふ。」

と吟じた句は人口に膾炙した。

唐の武后嫉妬を以て王后と蕭妃との手足を斷つて酒瓮の中に置き、此二女の骨を醉はしむ。蕭妃死するに臨み忿つて曰く、願くば吾れ猫と爲り、武后を鼠と爲して生々世々その喉を扼めんと。(鶴林玉露)

齊王の后嫉妬により怨死す、尸變じて蟬となり、庭樹に登つて怨み哭く。齊王悔いて哀しめり。(古今註)

今に蟬を齊女といひ、猫を天子の妃と呼ぶは之が爲めである。

優遇された南蠻の才媛

清

清帝系

1 太祖（弩爾哈赤）—2 太宗—3 世祖（順治類）—4 聖祖（玄曄 康熙帝）—5 世宗（胤禎 雍正帝）—6 高宗（弘曆 乾隆帝）
7 仁宗（永瑛 嘉慶帝）—8 宣宗（綿寧 道光帝）—9 文宗（奕詝 咸豐帝）—10 穆宗（載淳 同治帝）
醇親王（奕譞）—11 德宗（載湉 光緒帝）
醇親王（載澧）—12 宣統帝（溥儀）

皇后の殉死

【九一】 旗族から三年に一選

清は愛親覺羅氏、太祖を弩爾哈赤といふ。長白山下に起つて滿洲諸部を擊ち從へ、國號を後金と稱へ、尋いで明軍を破つて都を瀋陽（奉天）に定めた。此時孝慈皇后既に殂し、

烏拉國王滿大の女を以て繼室としたが、崩ずるに當り、遺詔して殉死させた。之は明代初期の殉死に倣つたものである。

清室の最盛期

嗣いで立つた太宗は、太祖の第八子で、遠攻近伐、大に領域を擴め、國號を清と改め、世祖（順治帝）は北支那を平定し、都を北京に遷した。聖祖（康熙帝）に至つて基業漸く固く、在位六十年。世宗（雍正帝）は在位十三年。高宗（乾隆帝）亦六十年の長祚を亙り前後通じて百三四十年間。清室の最旺盛期に屬し、殊に康熙・乾隆二代は文運武略共に著しく發達し、內外蒙古を征服して版圖に入れ、なほ天山南路を平定して國威は中亞細亞に及び、暹羅・安南まで朝貢するに至つた。

國威衰頽期

仁宗（嘉慶帝）の頃から海外英佛との關係が困難となり、宣宗（道光帝）の時には阿片戰爭が起り、文宗（咸豐帝）は長髮賊に惱まされ、英佛聯合軍の侵略となつて國威振はず、穆宗（同治帝）に至つて長髮賊漸く亡び、德宗（光緒帝）の時は西太后が親ら政を執り、日清戰爭となり、尋いで義和團の蜂起、聯合軍の北京攻擊となつて愈よ窮地に陷ちた。西太后と德宗は相前後して崩じ、三歲の宣統帝が卽位したものゝ、數年を出でずして退位の已むなきに至り、清朝は終に滅んだのである。

旗族から三年に一選

一后兩妃後ち七級

× × ×

清の後宮は、創業兩三帝の間は、一后兩妃を本則とした。之は最少限度であつて、枕席を拂ふ宮嬪の數は、少くとも十人や二十人は居つたであらう。後ち位次を七級と定めた。

皇貴妃、貴妃、妃、嬪、貴人、常在、答應。

皇貴妃は帝の崩後に至つて、皇貴太妃と呼ばれ、位階は皇太后に亞いだものである。かく僅に七級のみに減殺したことは、清廷の儉素主義に基くもので、秦漢以降歷朝の制度に較べて見ると最も少いものである。

東西各六宮

宮嬪の選擇も、三年に一度づゝ秀女を募つたが、廣く天下に物色することなく、同種の滿洲人、主として八旗族から十三歳以上のものを選んだ。使臣を派して物色したこともあるが、觸を出して募集することが多かつた。應募のものは宮中で試驗し、落選したものは家へ送り返した。これを滿洲の俗語で「撂牌子」といつた。

皇后の宮殿は別に一宇を備へ、他の妃嬪の居館は周時代と同じく六宮を建てた。清朝は紫禁城中の東西に各六宮を列ね、六宮の左右を東長街・西長街と呼んだ。

六宮の用度及び會計は內務府を置いて之を掌らせ、內務府の長官は大臣と稱した。周の冢宰と同じもので、綱紀の嚴肅を期し、閹人宦寺の類は、單に宮中の供給洒掃を司るのみとした。『嘯亭雜錄』に

三年一選と歸休

「按ずるに開元の時、後宮の女官多きこと四萬に至る。久しく禁じて放たず。亦奢汰極れり。本朝の定例、天下の女子を揀擇せず。たゞ八旗の秀女、三年に一選。その幽嫻貞靜の者を擇び、後宮に入れ、及び近支宗室に配し、その餘るものは自ら相匹配するに任す。後宮の使令は、皆內務府の包衣下賤の女に係る。又二十五歳に至れば放出し久しく禁內に居るもの無し。誠に盛德の事なり。」

とある。后妃には十三・四・五・六位のものを選び、姓名を內府の冊に列して籍を移管し普通の宮女は、在宮十年を限度とし、二十五六歳に至ると、年長內監が奏上して暇が出され、籍を返して民とし、故鄉に歸へして配偶を自由に擇ばしめた。

西太后時代

西太后の攝政時代、宮女は約二千人位居つたが、殆んど皆西太后に隷屬し、皇帝は幼少でもあり、光緒帝の如く、長じても幽閉同樣になつてゐた關係上、妃嬪らしいものは無かつた。二十五歳に至ると、暇金を貰つて故鄉に歸るので、數年間起居を共にした他の宮女等が、別れを惜んで記念品など贈つたものである。

旗族から三年に一選

【九二】 滿漢の通婚、遺詔の太子

太祖の發祥

清の太祖奴爾哈赤の父は顯宗塔克世、祖父は景祖覺昌安、曾祖父は肇祖興宗である。明の萬曆十一年に、滿洲圖倫城の尼堪外蘭が、明の李成梁を誘うて沙濟城を襲ひ、城主阿亥章京を殺し、更に古勒城を攻めて城主阿太章京を殺した。阿太章京の妻は景祖の女孫であつたから、景祖と顯宗とが之を救ひに行き、却つて二人とも殺害された。この時太祖は歳二十五であつたが、奮然として起ち、僅の手勢を以て尼堪外蘭を攻めて父祖の仇を報いた。太祖の發祥は實に此の一戰にあつたのである。

妖妬矯正

奉天に都を奠めた時、自ら八角殿に臨み、諸公主に訓ふるに婦道を以てし、夫を侮つて驕恣な振舞がある時は、聖旨に違ふものとして處罰するとまで言ひ渡した。漢晉以來公主の妬忌の甚しかつたに鑑み、その弊を矯めんと欲したものである。一卓見である。

戀敵を擊つ

太宗はまだ太子であつた頃、尼堪外蘭の女を聘したが、葉赫納蘭が先んじて其の女を奪つた。その腹癒せに葉赫部(吉林省)を滅し、次で朝鮮を降し、又明の大軍を破つた。孝莊皇后は順治の初年頃、纏足の女子は宮中に入ることを許さぬと、その旨を神武門に掲示した。之は中國漢人の文弱纖巧を防がんと欲したのであつた。

滿漢通婚の許可

世祖は七歳で卽位し、睿親王多爾袞が攝政したが、二十四歳の時崩じた。當時滿漢官民の和親を欲し、兩族の通婚を許し、諸王及び官民の婚姻制度を定めた。又漢族にして妃嬪たらんとするものは、一應滿洲旗族に入籍した上のことゝした。聖祖の妃年氏、王佳氏、陳佳氏、仁宗の生母孝儀皇后、魏佳氏等は皆漢人であつた。氏名に佳の字を挾んだのは旗族の標である。

繼嗣は遺詔

聖祖康熙帝は或事情の下に皇太子理密を廢し、その子を禁錮したが、後ち儲貳を立てず自ら欲する繼體者の名を親書して正大光明殿の扁額に密緘し置き、崩御と同時に、大臣に開かせ、遺詔を頒つて其の親書の太子を皇位に卽ける例を作つた、爾來多くは此の方法に依り、長幼の順序にはよらなかつた。

太子自ら選妃

清朝は特に幼主が多かつた。聖祖も九歳で卽位した。十四歳になつた時、皇室典範の定むるところに從ひ、皇后冊立の議が起つた。先づ親王や部王や貝勒などの姫君を宮に召し入れ、直接帝の選定に任した。皆父兄が附いて來て、自分の娘が選に當ればよいがと胸を

躍らしてゐた。帝は無邪氣に見廻してゐたが、つと一少女の側に駈け寄つてその肩を叩いた。この少女は前宰相蘇克哈の娘であつた。當時蘇克哈は罪死してゐたが、帝の氣に入つた以上は已むを得ず、その少女を皇后に迎へ立つた。

貝勒

因に貝勒とは滿洲語で部長の義である。清の皇族中、親王の子を郡王といひ、郡王の子を貝勒といひ、貝勒の子を貝子といつたのである。

【九三】　裸佛像禮拜、二回の蒙塵

高宗の孝行

世宗は聖祖の第四子。孝聖憲皇后が高宗を生み、賢后の譽が高かつた。高宗は國内を巡遊する時も母皇太后を奉戴して廻り、毎歳師走に西苑で氷嬉を見。又秋は水獵を昆明池に見。常に側に侍つて孝養を盡くした。乾隆二十六年には、皇太后の七十の壽宴を盛大に張り、群臣は皆入つて賀し、帝は太后の膳に侍つた。

歡喜佛

世宗は在位十三年。初め雍和宮内の法輪殿に、男女裸體で相擁する塑像を造つて安置した。之は歡喜佛とて蒙古の風俗から來たものらしい。帝王大婚の時は必ず先づ此の殿に入つて歡喜佛を禮拜する例となつた。後ち民間でも賣買し、北京の諸勅願寺には多く安置した。

孝賢皇后と高宗

高宗乾隆帝は世宗の第四子。七歳で卽位。在位年數は康熙帝の六十一年よりも一年短かつたばかり、共に古今稀に見る長い在位であつた。その間、嗣子として次子永璉を遺詔に親書せんと思つたが、永璉が死んだので、七子永琮をと思ふうち之も死んだ。共に孝賢純皇后の生むところであつた。皇后は嗣子を亡くして痛惜措かず。遂に病を發して崩じた。淑德の譽高き賢后であつたから帝は哀惋し、皇后の平日用ひてゐた奩具衣類一切を生前そのまゝとして撤去させず。追懷の材料として存置した。

命名の四字

六子永璿が、或年歳朝の圖を畫いて孝聖皇后に上つた。高宗の題詩中に「永綿奕載奉慈娛」の句があつたから、その後皇室近親のものゝ名に、永綿奕載の四字中の一字を必ず用ゐることゝなつた。

辮髮强制

繼室孝儀純皇后が南巡に從つた時、途中で氣がふれ、自分の頭髮を剪つた。そこで京に送還された。滿洲族は髮を剪ることを最も忌む風習があつて、辮髮を天下に强制した。

仁宗嘉慶帝は高宗の第十五子。高宗の崩ぜぬうち内禪を受けて卽位した。生母は孝儀皇

后。仁宗の后は孝和皇后。仁宗四女莊靜公主は德勝門內に、三女莊敬公主は含暉園中に、共に大きな邸宅を賜うて居住した。

宣宗道光帝は仁宗の第二子。仁宗の弟である。孝全皇后は六宮の事を統べ、賢后の譽があつたが、數年にして暴に崩じた。帝は哀悼し、その子文宗を嗣子と定めた。

文宗咸豐帝は宣宗の四子。秀女を選んだ時、一女子が東南に長髮賊の亂が起つて居ることを語つた。朝廷は夫れを知らなかつたのである。間もなく英佛聯合軍に攻められ、孝貞皇后、孝欽皇后（西太后）と共に熱河に逃れ、文宗は此の地に崩じ、長子穆宗が位を嗣いだ。

穆宗同治帝は孝欽皇后の生むところで、七歲にして卽位した。孝欽・孝貞兩皇太后が簾を垂れて政を聽き、北京條約を結び、外國の力を借つて長髮賊の亂を平らげた。賊將洪秀全は「滅滿興漢」を唱へたもので、その檄文中に

「天下は中國の天下にして胡虜の天下に非ざるなり。寶位は中國の寶位にして胡虜の寶位に非ざるなり。」

などの文句を列ねて漢人を唆り、一時百萬人からの軍勢を擁した。清は之を滅すに十五

初回の蒙塵

長髮賊の檄文

年を要し、國力の疲弊を招いたのみでなく、威信漸く地に墮ち、掉尾亦振はざるに至つた。穆宗は同治十四年に痘瘡を病んで崩じた。時に年二十。

西太后執政

德宗光緒帝は文宗の弟醇親王奕環の子。母は西太后（孝欽皇后）の妹。四歲にして卽位し、長ずるに及び、國運の衰頽を慨き、康有爲等を用ひて革新の政を興したが、西太后は之を喜ばず、德宗を幽して親ら政を執つた。

二回の蒙塵

光緒二十五年、外人排斥を目的とする義和團が蜂起し、延いて各國聯合軍の北京攻擊となつた。西太后は晨に起きて警報に接し、鹽漱する遑もなく、西安府（陝西）に奔つた。德宗も朝食さへ喫せず。夕方に貫石といふ所に着いて僅に冷たい豆粥一杯を食ひ、箕を枕として土坑の上に臥した。翌日懷來に達し、吳永といふ地方官に迎へられて廳舍に入り、西太后は吳永の妻の寢室に憩ひ、始めて奩具を出して髮を梳つた。

獄舍に訪づる美人

【九四】　美色芳香は忠節を磨銷す

明末の志士洪承疇が遼東の經略に當り、脆くも一敗して淸軍の爲めに囚はれの身となつ

美色芳香は忠節を磨銷す

た時、清廷では其の才幹と忠節とを愛して遽に斧鉞を加へるに忍びず、頻りに降服を慫慂して已まなかつた。承疇は文天祥の壯烈な最後を想像して、芳名を千載に傳へんことを欲し、更に應ぜぬのみか、食を斷つて靜に命數の盡くるを待つた。絶食三日目の薄暮、何處からか、一個の壺を抱えた覆面の婦人が鐵柵の前に現はれ來り、聲を潛めて一杯の漿を勸めた。承疇も初めは瞑目したまゝ、敢て聽かんともしなかつたが、微に一縷の幽香が鼻を撲ち、疲れ切つた魂を不思議に喚び起したので、眼を開いて見ると、どことなく楚々たる氣品が、衣香鬢影を通して溢れ、普通の婦女でないことだけは讀めた。女は一層聲を潛めて、

一杯の漿水に蘇る

「妾は此の獄舍に隣つて住む獨り者ですが、卿の高節を聞き、一たび其の容姿に接し、且つは忠魂を慰めようと、獄吏に賄うて此所に來ました」と。辭氣清越。眞に地獄で觀音菩薩に逢ふことも斯くやと思はれた。

承疇は餘りに忝しく、默然として感慨に沈んだが、感謝の色は眉宇に現はれた。女は再び口を開き、

「卿は明室に忠なる人、今食物を勸めて高節を玷すを欲しませぬが、此の物は妾の手づから製せし一杯の漿水に過ぎませぬ、誠意を以て捧げます」と。承疇深くその厚意を悅び、やがて手に受けて啜り終つた。その日から此の美人は毎日三度づゝ鐵柵の前に現はれ、その都度携へ來る壺漿は飲み盡くされた。承疇は、漿水何ぞ命を繫がんと思つて居たが、不思議にも精力は蘇つて、以前の身體に復活して來た。

歡會

美人は何處より來る。漿水は是れ何もの。而も不思議はこれに止まらず、獄卒の警戒は日に寬み、終には扉を鎖さず、優遇漸く賓客に對すると異ならなくなつた。從つて美人は暮に至つて遂に去らず、枕衾を薦めて巫山洛浦の歡會を極め、曉に去つて又暮に來るやうになつた。

貳心の愧を忍ぶ

綢繆旬日、食も平常に歸り、鬼神を哭かしめる忠節も、今は消磨し盡くし、目は徒に美色に眩み、心は全く芳香に迷ひ、遂に臣を清廷に稱するに至つた。美人何もの。太宗の孝莊皇后。世祖の母、艶名一國に噪がしかつた絶代の麗人その人であつた。承疇は始めて其の誰れなるやを知つた時、哭せんと欲して哭する能はず、訴へんと欲して訴ふるにところなく、鐵腸碎けて貳心の愧を忍び、辮髮を蓄へ、服裝を易へ、清に臣事する身となつた。

美色芳香は忠節を磨銷す

嚮に勸められて飲んだ漿水は、人參を煎じたもので、死を回へし、神を養うたのも無理

はなかつた。

【九五】 襤褸に裏れた運命の寵兒

滿人の特權

清朝の后妃は、前にも述べたやうに、滿洲八旗族を主とし、然らざるものは一旦滿洲人の許に籍を移してからでなくば採用せられなかつた。故に滿人であれば採用される特權を有し貴賤貧富を問はなかつたらしい。

孝聖の奇緣

高宗乾隆帝の生母孝聖憲皇后（世宗の后）は賢后の聞えが高かつた。承德（熱河）の貧家に生れ、奴婢も居らぬ爲め、六七歳の頃には市に至つて酒や醬油や麵類を買つてゐた。家に在つても、麻を績んだり、臼を搗いたり、手仕事をして生計を援けてゐた。十三の時北京に出たが、たま〳〵旗人採女のことあり、中外姉妹の選に當つて宮中に入るものに逅ひ、見物かた〴〵隨つて行つた。宮門の番人は、同じ選中の娘だと思ひ、門內へ入れた。諸方から集つた娘は、十人宛の列を作らせ、いよ〳〵點檢となると、人員が一人多い。調べて見ると見物の娘が紛れ込んで居る。役人も今更手落ちが發覺してはと、態と知らぬ顏で末班に加へて置いた。それが當選組に入つて、後に孝聖憲皇后となつたのである。

病に侍す

世宗憲皇帝は、當時まだ年も少く、東宮に在つて勉學中であつたから、妃（清朝には東宮妃を福晉といつた）は起居を別にし、進見は時を以てした。たま〳〵盛夏の候、東宮は流行病に侵され、お附きの侍婢も介抱を忌避したが、孝聖のみは日夕枕邊に侍り、誠心誠意を以て看護した。その間五六旬の久しきに亙つたが、更に倦んだ色も見せなかつたので東宮は之を德とし、病が治つて後大に愛幸し、遂に高宗を生んだ。

西太后の好運

穆宗同治帝の生母西太后も奇しき運命を以て文宗の皇后となつたものである。太后は生れて間もなく母を喪ひ、父は貧乏で一人娘の太后を養育する力さへ無く、漸く四歳になつた頃、廣東の一富豪に奴隸として賣つた。その娘が十四歳になつた時、滿人の處女として自ら採女の募集に應じ、運よく賤婢から一躍して太子（文宗）の妃となり、遂に皇后となつて、二十歳の時穆宗を生み、天晴れ國母になりおほせたのである。

宮闈の祕事

宮闈の祕事、后妃の素性などは、容易に外間から窺ひ知り得られるものでない。民間に知られて惡いことは皆祕密として葬り去られるのであるが、西太后の素性などは、清末に起つた革命黨が帝室の惡口をいつた中に、指摘して誹謗したから案外早く知れ亙つたので

宮女の尊卑

妃嬪の進御にも警戒

ある。

但し孝聖皇后も西太后も、家柄は滿洲旗族であつたことは確である。旗族でなくては、出世は難しかつた。宮中においても非常に階級制度が行はれ、後宮の妃嬪も家柄又身分によつて尊卑を異にし、殊に各宮女間に自ら家柄を自負し、他を卑める風習が熾んに行はれたのである。

【九六】一糸を纏はぬ赤裸で囊に

易世革命の多い支那は、刺客が横行し、鴆毒が盛に用ひられ、簒弑與奪が朝飯前のことであるから、油斷も隙もあつたものでない。故に後宮の美人にも決して氣はゆるせなかつたのである。國を滅し天子を殺して、其の愛してゐた宮女を悉く掌中に入れるのであるから、中には貞婦兩夫に見えずの氣慨があるものが無いとも限らぬ。又民間や臣下から採用した者にせよ、何人の隱謀に荷擔し、又使嗾されて、害を加へぬとも限らぬ。そこで妃嬪を夜のお伽に上すに當つても、細心の警戒が加へられたものである。

宦者が囊に以て運ぶ

不寢番

清朝は、宮女に滿人以外を多く入れなかつたが、それでも萬一を慮つて內外の離隔を嚴重にし、宦者（宮監）以外は入れず。妃嬪の進退は凡べて宦者の管掌に屬し、今夜は何妃を上せよといふ命が下つた時は、宮監が先づ緣頭牌といふお召の札を、その局の戶口に掲げる。すると當番の妃は、晝のうちから沐浴して香を薰じ、髮を梳り、化粧を施して待つ。宦者は大きな袋を持つて迎へに來る。妃は衣服を脫いで素裸となり、簪、笄まで取り除いてその袋の中へ這ひ込む。それを宦者が天子の御牀へ運ぶ。到着すると袋から出て、充てがはれる寢衣を着け、酒肴に與り、話などして、さて寢に就くのである。朝辭して己が室に歸る時も同樣、素裸となつて袋で運ばれる、全く殺風景なものであつた。

晉の武帝は羊車に乘り、隋の煬帝は任意車に乘り、その他は輦に乘り、又徒步で六宮廻りをなし、隨意寢泊りしたものであるが、そんな時も、宦者が隨行して不寢番をしたものである。清朝は、滿洲の奧の方から出て、漢族の祖國を奪つたものであるから、特に警戒を怠らなかつた。

それかあらぬか、乾隆帝は回部から移した香妃の毒刃は免れ得たが、同族の某王から奉つた愛妃によつて薨去したといふ傳說さへもある。

一糸を纏はぬ赤裸で囊に

木の警枕

西太后は女の身で清朝を支へてゐた關係上、非常に用心深く、刺客などを恐れ、木の枕の中央に三寸角の穴を穿つたものを用ひた。これは如何に忍びやかな足音でも、すぐ枕に響くやうな仕掛けのしてある警枕であつた。

宮訓十二幅

【九七】 有德后妃十二幅の教訓圖

乾隆帝の時、古來有德の后妃十二人を選んで之を畫き、十二幅を作つて宮訓圖と稱し、歲末歲始に、東西六宮に掲げて訓誨とした。平日は景陽宮に藏してゐたが、爭亂を經て二幅を闕いた。十幅の畫題は、

燕姞夢蘭

「燕姞夢蘭、大姒誨子、姜后脫簪、許后奉案、樊姬諫獵、馬后練衣、曹后重農、婕妤當熊、徐妃直諫、西陵教蠶。」

燕姞は鄭の文公の賤妾であつた。一夜夢に天使が枕邊に現はれ、蘭を與へて言ふやう、「之を以て汝の子とせよ、蘭は國香があるから、これを服めば必ず人に愛せられる」と覺めて後天使の言の如く蘭を服んだ。鄭公はその夢を買はんと、蘭を燕姞に贈つて愛幸し、遂に穆公を生んだ。穆公の幼名を蘭と名附け、王者の母となることが出來た。蘭は當時婦人が佩びてその香を愛したものである。『離騷』に「秋蘭を繫で以て佩と爲す」とある。

大姒の婦德

大姒は周の文王の妃、武王の母である。文王その淑德を聞き、渭水まで親迎して娶り、武王、周公、管叔、蔡叔、など十子を生んだ。旦夕勤勞して婦道を理め、子弟を教誨し、武王をして遂に四海を有ち、尊きこと天子となり、周の創業を完成せしめた。詩經の開卷第一章に「關々たる雎鳩は河の洲に在り、窈窕たる淑女は君子の好逑」とあるのは文王と大姒と相配し、與に和樂し、恭敬禮あること、雎鳩の河の洲に在つて和鳴する如しと、君子淑女の好配偶を美とした詩である。

姜后簪を脫す

姜后は周の宣王の后、齊侯の女である。行は禮に適はねば動かず。事は禮に違へば言はず。賢にして德があつた。初め宣王早く臥し晏く起き、自分も房を出なかつたが、飜然として悟り、一日早く起き、簪や珥を脫して罪を永巷（宮女の罪あるものを幽閉する所）に待ち、傅母（かしづく婦人）を王のところへ遣つて謝罪し、

「妾の不才なる、淫心の現れを見た。君王禮を失して晏く朝し、色を樂しみ、德を忘るゝに至つた所以は皆妾の罪に他ならぬ」といはせた。宣王は驚いて「否なそれは寡人の不德

であつて夫人の罪でない」と。それからは、早く朝して政治を見、晏く退いて燕寢に入つた。宣王の周室中興は、姜后の力によるものであつた。

樊姬獵を諫む

【九八】賢妃の言行帝王を感化す

樊姬は楚の莊王の夫人である。莊王は狩獵好きで、政事を怠つた。樊姬は頻りにそれを諫めたが聽かれぬので、禽獸の肉は一切食はなかつた。王は悟るところあり、狩獵を止めて政治に勤むるに至つた。或日朝に出て歸ることが晏かつた。樊姬は出迎へて、飢ゑを感じ疲れはせぬかと問うた。王は、賢者と共に政を論じてゐたから、何等の飢倦もないと答へた。賢者とはと問へば虞丘子だとの答へに、姬は口を掩うて笑ひ、徐ろに言つた。

「妾の巾櫛を執つて王に侍すること十一年。その間鄭と衞から美人を求めて王に進め、妾より賢いもの二人、同列のもの七人を得た。妾は王の寵愛を擅にすることを欲せぬのでは無い、繼嗣を廣め、且つ各その能を盡さしめたいと思ふからである。私を以て公は蔽ふべきでない。虞丘子は楚に相たること十數年。薦めるところの臣は子弟か又は一族のものばかり、賢を進め不肖を退けたことを聽かぬ。是れ君の明を蔽うて賢路を塞ぐものである。賢を知つて進めぬのは不忠、知らぬのは不智である。」

と、莊王も大に感じ、明日姬の言を以て虞丘子に告げた。虞丘子は愧ぢ入つて對ふるところを知らず、間もなく孫叔敖を王に薦めて令尹とし、三年にして莊王を霸たらしめた。是れ皆樊姬の力に外ならぬ。

馬后の練衣

婕妤熊に當る

馬后の練衣

馬后は後漢明帝の后、明德馬皇后のことである。伏波將軍馬援の少女で、早く父母を喪ひ、家事に勤むること成人に異らず。十三歲の時東宮妃に選ばれ、陰皇后（光武の后）によく奉承し、同列に接するに禮あり。明帝卽位と共に貴人となり、後卅せられて皇后となつた。性孝順にして婦德備はり、姿容美しく頭髮長く、易を誦し、春秋楚辭を讀み尤も書に巧みであつた。常に儉素身を持し、大練（厚い絹）を着て裙を修飾せず。六宮の綺縠（薄い綾絹）を着るもの皆耻ぢて之に倣つた。明帝の時家々足り、人々給し、天下泰平を致し、明帝崩じて、馬后の子として養つた章帝が立ち、馬后は皇太后として內政を修め、國威を增す〳〵宣揚し得た。

婕妤は前漢元帝の美人馮婕妤のことである。一日元帝が虎圈に幸して猛獸を鬪はした時賢妃の言行帝王を感化す

一匹の大熊が柵外に逸走して檻を攀ぢ、將さに御座に上らんとした。左右の妃嬪は愕き惧れて皆逃げ惑うたが、婕妤のみは泰然として熊の前に立ち塞り、身を以て帝を庇うた。そのうち武臣が駈け聚つて、漸くその熊を格殺した。帝は婕妤に對ひ、何故危險を冒したかと問へば、婕妤は

曹后農を重んず

「妾が聞くに、猛獸は人を得れば甘心して他を顧みぬとか、御座を犯す恐れがあつたから、身を以て熊に委さんとしたまでゝある」と。帝は之を聞いて益々愛幸した。

曹后は宋の仁宗の皇后で、慈聖光獻宗皇后と謚された賢后である。自ら鋤犁を執つて禁苑内に稼穡し、又親しく蠶を飼ひ紡織を奬め、宮嬪皆その德に服し、掖庭の肅淸を致した。蘇軾が詩によつて罪を得、御史の獄に下された時、幸に免るゝを得たのは曹后の賜であつた。

【九九】傷心千古香魂迷ふ胭脂井

人彘や醉骨の慘虐、煮鶴や焚琴の奇妬は、何れの代にも見るところで、敢て珍とするに足らぬが、淸室の將に亡んとするや、胭脂井の悲劇が北京城内に演ぜられた。

城内の胭脂井

胭脂井は紫禁城の奥深い後庭にある窅井（水のない井戸）である。胭脂井と呼ばれた名の起りは、光緒帝の愛した珍貴妃が、孝欽皇后の酷妬に遇ひ、この井戸に抛り込まれたからである。

珍貴妃と光緒皇后

珍貴妃は滿洲の世家の出で、父兄は共に高位に在つたものである。天生の麗質は、秀女の選より脫れず、妙齡にして妃嬪の列に加はり、貌と才とは光緒帝の寵を專らにするに足るものがあつた。帝は西太后の前には從順そのものゝ如く、一言の道理も口に出すことが出來なかつた。その反對に、光緒皇后は西太后の姪であり、又巧に太后の意を迎へたから、その言ふことは皆聽かれた。故に皇后の威は光緒帝の上に在り、皇后の奇妬に遇ふものは、帝の逆鱗に觸れるよりも慘禍を蒙つたのである。

西太后西安府に

珍貴妃は幼より文太史廷式に學を受け、博聞强記、古今に通曉して居た上に、儀容備はり、妍麗群を絕ち、皇后の到底及ぶところでなかつたから、憎惡は日に募り、遂に別室に隔てられ、帝と相見るを許されぬ身となつた。燈を挑げて思ひは結ばれ、月に對して恨みは凝ること二春秋。たまゝ義和團匪起り、日・英・米・獨・佛・墺・伊の聯合軍が進ん

井中に慘殺

宮詞

で北京を攻めた時、西太后は光緒帝や皇后等と共に西安府(陝西)に奔ることゝなつた。

豪奢を極めた紫禁城を敵手に委し、倉皇として蒙塵するのであるから、さながら戰場に異らず、鳳輦に隨ひ行くことを許されぬ宮嬪は、泣き叫び逃げ惑ひ、流石の西太后も生色は無かつた。珍貴妃は嗚咽して帝の車に取縋り、西狩に從はんことを願つた。西太后は姪の寵を奪つた女だといふ憎惡から、大地に跪いて哀を請ふ珍妃を內監に引き渡した。內監は太后の旨を察して井戸に投げ込んだ。目のあたり愛する者の慘殺されるのを見た帝は、心腸寸斷の思に聲を呑んだが、砲聲既に門外に逼る匆忙の際とて、救ふ遑もあらばこそ、倉皇として蒙塵の旅路に就いた。宮掖の祕事、詳細のことは知るに由がない。錢塘の九鐘主人撰といふ『淸宮詞』に

「珍貴妃・瑾貴妃は侍郎長叙の女、巳丑に同じく選ばる。畫苑をして紅夢樓・大觀園圖を畫かしめ、內廷臣に詩を題せしむ。戊戌に珍貴妃黜けられ、庚子の變に宮內井中に死す」

と註し。左の宮詞を載せて居る。

「趙家の姉妹共に恩を承く、　嬌小偏に歸す永巷門、　宮井波たゝず風露冷かなり、　哀蟬落葉夜魂を招く」

宏壯猷麗な宮殿

祕密室開けずの間

【一〇〇】人妻掠奪と迷魂閣の怪事

歷代帝王の居城や諸宮殿は、國家を擧げて、財力と人力を傾け殫くしたもので、宏壯猷麗を極め、

「皇居の壯を見ずんば、天子の尊きを知らず。」

といふ語さへあるが、秦の咸陽宮が炎々三ケ月も燃えたといふことによつても、如何に豪宕雄偉なものであつたかゞ想像される。淸朝は比較的儉素であつたが、それでも今の北京紫禁城を見れば、天子の尊が窺はれる。

殿內の修飾が、鏤金彫玉の美を以て、人目を眩するものであつたことは別として、地下室祕密室、開けずの間などが幾つも構へられてゐたことも事實である。西太后の侍嬪として久しく仕へた德菱女史の祕記によつて見るも、彩色美しい壁襖が、或る仕掛によつて易々と回轉し、通路が現はれ、それを進むと地下室となり、周圍は石を以て疊み、下に黃

緞子を敷き、白玉の香爐が設けられ、此を第一室として以下十餘の密室が回轉壁によつて列なり、貴重な寶物類を儲へてあつたことが知れる。この祕密室は明代の構造を修補したもので、團匪事件の際、西苑諸殿の寶物は洋人の掠奪に遭つたが、此室内のものは一物も失はれなかつた。

最近、乾隆帝以來百數十年間、封鎖のまゝ、開けずの御殿として、傳はつた迷魂閣が開かれ、奇怪な事實を暴露した。

迷魂閣を開く

迷魂閣は乾隆帝の造營したもので、四壁は大理石を用ひ、幾つもの蘭房に分れ、一室は四方硝子張りの水晶宮となり、その中央に閨房が設けられ、廻廊その他の諸處に大理石の裸體像が立ち、雕欄美々しく華奢を極めたものであると。殊に前庭後庭は晝なほ暗きまで

百年前の死美人

に木立生ひ茂り、幽邃深山の如き別天地をなしてゐた。

門前に一箇の碣石を建て「此處は地獄の所在地なり、永遠に開放を許さず」と刻み、大門は堅く鎖されてゐたが、内部修覆の爲め、人夫によつて扉が開かれたところ、驚くべし、樓上には、百年以前の盛裝した死美人のミーラが幾つも横はつて居り、これを見た人夫は其の後發熱して囈語を吐くといふ奇怪事が續出した。

亡靈の祟り

老掌典官の傳へ語るところによると、乾隆帝が梨孃といふ一美人を此の室に納れ、朝夕愛幸してゐたが、これを嗅ぎ知つた皇后が、突然多數の宦者を連れて乘り込み來り、泣き叫ぶ梨孃を裸にして梁に吊るし、下から無慚にも炙り殺した。爾來亡靈の祟があるので永遠に此の室は閉鎖されたのであると、眞か僞か。

弄んだ上絞殺

軼聞祕史の傳へるところによると、豪邁なる英主乾隆帝も、若い時は頗る放埒を働き微行を好み、屢々美女の掠奪を行つたらしい。一度掠奪して弄んだ以上、祕密の遺漏を恐れて、その女は再び民間に出さるゝことなく、多くは暗に葬り去られた。

人妻を掠奪

康熙帝の時、沈昧蘭といふ一儒者が『攘妻記』を著はし、妻方氏を康熙帝に奪はれ且つ殺された顚末を記載したので、著書は悉く沒收された上、獄に投ぜられて悶死したことがある。康熙帝や乾隆帝にして此の事ありとせば、他は推して知るべしである。宮闈の密事は、殆んど大部分洩れることがない。洩れても革命が無くては筆にするものが無い。故にその百が一も今日に傳はらぬのである。

【一〇一】九重の大奥に亡靈寃罪

宮中の妖怪變化

乾隆帝の思ひもの香妃が、太后の爲めに絞殺された西苑は、明代二百七十年間の後宮の遺跡を多少修理したもので、李自成亂入當時、毅宗や莊烈皇后、懿安皇后、王皇太后などの自盡した所。及び數百人の宮女が身投げした御溝や古井戸など、清朝末まで多く其のまに遺り、妖怪變化に脅かさるゝことも一再でなかつた。九重の奥に此の事ありとは、架空の物語に過ぎないやうに思はれぬでもないが、西太后に宮仕へした德菱女史の手記には立派にそれが記されてある。

宮人追弔塔

西太后の御座所近く、西苑内の一隅に、高さ約十尺内外の一寶塔が建つて居る。全部沈香の良材を用ひ、中に一基の觀世音が安置され、その觀世音は黄金像で、眞珠を以て五臟六腑を綴り合せた五寸ばかりのものである。康熙年中の建立にかゝり、明代宮人の亡靈を弔ふ爲めに祭祀されたものであつた。

鬼哭啾々

亡國の迷魂、非業の寃鬼によつて、雨の夜、風の夕は、啾々の哭聲物凄く、年若い宮女や宮監の膽を冷したものである。故に身の毛の戰立つやうな妖怪談はかず〳〵傳はつた。

古井戸の怪

德菱女史の見聞した事實談中に……西太后の愛した宮監李蓮英が、夜更けて西苑を通つたところ、一人の少女が、古井戸の側に蹲踞つて獻欷して居る。何者かと一喝したところ、今まで一人と見えたものが忽ち十五六人の少女となつた。從僕に命じ、怖々ながら引捕へんとしたが、彼等は一齊に慟哭して古井戸内に飛込んだ。翌朝行つて見ると、その古井戸は大きな石材を以て塞がれ、蟻の這ひ出る隙間もなかつた。その後、李蓮英は夜間苑内へは出ず、人々に何時も此の實見談を物語つてゐたと。

髮振り亂した怪物

又或夜、德菱自身が、召仕ひの一宮監に命じて湯を汲みにやつた。出て行つて間もなく慌しく馳せ歸り、面色土の如くなつて悸へてゐた。その語るところによると、某妃の局へ湯を請はんと、提灯を點して御苑の小徑を通り拔けんとした時、何處よりか髮ふり亂した形相の物凄い怪物が現はれ、アッと叫ぶ間もなく、提灯の火を吹き消し、攫みかゝらんとした云々と。之を聞いた女史は、御座所に近く、何條變化の現はるべき、必定何人かの惡戲であらうと笑へば、西苑内の妖怪は二百年來の名物で、誰れも必ず一度や二度は嚇かされぬものはないと語り。いろ〳〵の見聞を附け加へて物語つた……。

怪物的色彩

由來支那皇室の大奥は――支那のみとはいはぬ土耳其なども――大奥そのものが怪物的色彩を帶ぶるところであるから、眞の妖怪變化の顯はれたことも、何等不思議ではないかも知れぬ。

謎の天國

要するに支那の後宮は、研究すればする程一種特別の怪氛圍氣に裹まれ、到底常識を以て判斷し得ない幾多の事象を發見する。謎の天國とでも謂ふべきであらう。

麗人

麗人とは美麗な人である。智德は兼ね備へずとも、容貌姿態の勝れて美しい女性をさす。

これを美人といひ、佳人といひ、佼人といひ、尤物といひ、國色といふも皆同じである。楚辭に「美人余と目成す」。洛神賦に「一麗人を巖畔に睹る」李延年の詩に、「北方に佳人あり」などいつて居る。麗人は女中の生粹ともいふべきである。

情豪

情豪とは情の豪傑である。戀の英雄である。武藝才幹は千萬人に勝れずとも、身一國一城の主として、天下の女性を自由にし、情界に豪奢を極め、乾坤一擲、愛する麗人の爲めには、何等惜しむところのない男性をいふ。「英雄色を好む」とか。蓋し、情豪は男の中の精華である。

一、何もの、老媼ぞ國色を生む

〔吳越　西施と吳玉〕

古今一の麗人

古來何人が麗人と精豪の圈内に入るかといふに、てつきり型に嵌るものは餘り多くない。圈内に出入する人を得て、先づ麗人とし情豪と目するより外はない。

× × × × ×

支那四千年を通じて、第一の麗人は誰れであらうか。先秦時代の諸子百家の書を始め、その後に於ても、美人として引用されるものは先づ西施を第一として居るから、支那麗人傳の冒頭を飾るものは勿論西施であらねばならぬ。

吳を滅す功

西施は越王勾踐が、吳王夫差に獻じた絶世の美人である。越王は吳を滅し、復讎するの目的を以て西施を送つたが、吳王は終に其の愛に溺れて國を亡し、越王の目的は達せられたのである。古詩人が、

「若し吳を破る功第一を論ずれば、　黃金只まさに西施を鑄るべし」

といつたのは面白い。由來支那は夏桀、殷紂、周幽が美人によつて國を亡ぼす範を示してゐるが、吳王もマンマと其の罠に嵌つたものである。

情の英雄

吳王夫差は、父闔廬が越王の爲めに敗死した時、忠臣子胥を用ひ、臥薪の苦楚を嘗めて遂に越を破り、會稽山に越王を降伏させたところを見ると、その人必ず庸君ではない。一美人西施の愛に沈湎したものは、そこに情豪の情豪たる所以が窺はれる。これを咎むるものあらば、木强漢共に談ずるに足らずとも謂ふべきである。

妙案

越王の降伏した時、子胥は、越王の一族を夷らげて後患を除くに如かぬと主張した。越王は涙を垂れ聲を呑み、身は吳に臣となり、妻は大王の妾とならんとまで哀願に及んだ。長頸烏喙、一癖ありさうな越王、それを赦して國に歸へした吳王こそは、情の英雄でなくて何であらう。

露薪院紗の女

越には上將軍范蠡、大夫文種などの賢臣がゐた。情の人を亡ぼすは、情の人を擒とするに如かぬと、美人を獻ずる一策を案出したのは遺に妙案であつた。

西施は越の苧蘿村に生れた田舍娘で、姓は施氏、村の西端にゐたから西施と呼んだ。薪を市中に鬻ぎ、紗を溪間に浣つてゐたが、明眸は垢面に耀き、玉質は襤褸によつて蔽はれず、光艶四射、人に逼るものがあつた。

「亂頭粗服天姿絶す、　何物の老媼ぞ國色を生む。」（淮蘋園）

「誰れか憐む越女顏玉の如し、　貧賤江頭自ら紗を浣ふ。」（王維）

何ものゝ老媼ぞ國色を生む

艶愈よ艶

西施を得たと前後して鄭旦といふ美人を發見し、共に越宮に迎へ入れて、荊釵を拔き布裙を脫し、飾るに羅穀を以てし、敎ふるに歌舞を以てし、日を經るに從ひ、艶いよ〳〵濃艶に、麗いよ〳〵妍麗に、覩るもの魂飛び心馳するに堪へぬまでの美人となつた。

二女を献ず

此に於て、二女を范蠡に附し、往いて吳王に献ぜしめた。夫差は前殿に御して延見するに、まことに無双の國色、一つは花の笑ふが如く、一つは玉の潤ふが如く、目眩めき心躍るを禁じ得なかつた。子胥は一大事と見て取り諫め止めんとした。曰く、

美女は國の咎

「臣聞く、五色は人の目を盲せしめ、五音は人の耳を聾せしむる。昔し桀王は湯王を易つて滅び、紂王は文王を輕んじて亡んだ。大王越を輕んずれば殃必ず至らん。且つ聞く賢士は國の寶、美女は國の咎と、夏は妹喜を愛して亡び、殷は妲己を寵して滅び、周は褒姒を嬖して身死す。大王今美人を近づくれば禍必ず起らん。」

耽溺蕩魂

と。夫差聽かず。却つて讒言を信じて子胥に死を賜ひ、二女を納れて愛幸し、終に驕奢淫逸に身を持ち崩した。

美人に耽溺する情豪は、お定りのやうに、宮殿を壯麗にし、遊宴を事とする。吳王も西施鄭旦を得て以來、人力を殫くし、財力を耗して姑蘇の臺を造營し、これに宮女數千人を容れ、別に青宵宮を建て、細珠の簾を垂れ、朝に蔽ひ夕に卷き、二女を左右に侍らして長夜の飲を張つた。又天池を作り、池中に千斛の酒を湛へて青龍の舟を泛べ、船中に妓樂を陳ね、日々西施と水嬉を爲し、なほ宮中に海靈館、館娃閣を建て珠玉を以て楹・檻を飾り、西施はその裡で髮を梳り、靚粧を凝らしたが、見るもの魂を蕩かし、以て神人と思はぬはなかつた。

姑蘇八景

この外に、大に靈巖山に增築し、大湖の水を引いて池とし、花晨日夕こゝに留連した。この地の周圍には、美人を遣つて香艸を採つた採香徑、西施や他の宮女が脂粉を洗つた香水溪一名脂粉塘、王と西施が避暑した消夏灣を始め、玩花池、碧泉井、百花洲、西施洞、姑蘇臺があり、姑蘇八景と呼んだ。

響屧廊

「風は荷葉を動かして水殿香ばしく、
西施醉ひ舞ふ嬌として力無く、
「安んぞ香水泉を得て、
青宵宮には響屧廊といふ回廊があつた。西施や宮人が屧を穿いて歩むと、鼓を打つやうな響を發した。「屧廊移し得たり芎藭の春」。「芙蓉水殿屧廊の東」など、謳はれて居るもの

姑蘇臺上吳王に見ゆ、
笑つて倚る東窓白玉の牀」（李白）
郎が衣上の塵を濯はん」（古詩）

が是れである。

痴蝶身を亡ぼす

吳王夫差は、元來が暴君でないから、その享樂も單に狂蜂痴蝶の花に迷ふが如く、朝歌夜絃、酣醉濃夢に耽るのみで、夏桀殷紂のやうな暴逆殘忍な行爲はなかつた。しかし飽くなき享樂は、終りを完うするものでない。歡樂極つて哀情多し、金鼓一聲、越軍殺到するに及んで吳は三たび戰ひ三たび敗れ、夫差は姑蘇の臺に上つて成を請ふたが范蠡聽かず。二十年の香夢こゝに破れて、終に帛を以て面を掩ふて死んだ。——地下で子胥に合はす顏がないと。

西施范蠡と通ず

西施は吳王と共に殺されたといふ說と、范蠡に從ひ、五湖に泛んで去つたといふ說とある。初め范蠡が越王の使として西施を吳に獻上した時、二人は途中で相通じ、子まで設けて三年間各所を彷徨き、漸く吳の都に着いて使命を果したといふ俗傳がある。今の江蘇省吳縣の蘇州驛に女兒亭といふ遺跡まで殘つて居る。西施が子供を產んだ所だといふ。

二人の駈落

范蠡が西施を伴ふて駈落ちしたとすれば決して色を好んだものでなく、放つて置くと、越王がその色に呢んで再び吳の二の舞をする恐れがあるから、後患を絕つ爲めに携へ去つたのであらうと善意に解するものも多い。『鶴林玉露』はこの說である。杜牧の詩に、

「西子姑蘇を下る、
一舸鴟夷を逐ふ」

とあり。此等の詩からこんな附會した傳說を生じたものだと『筆乘』にはいつて居る。

「一戰功成り早く身を擊く、
釣竿輕く動く五湖の雲、
宮中拾ひ得たり蛾眉の斧、
吾が君に獻ぜざるは是れ君を愛す」（呂仲見）

こんな詩も生れた。

一、香魂夜劍光を逐ふて飛ぶ

〔楚　虞美人と項羽〕

拔山蓋世の英雄楚の項羽に配するに絕代の美人虞氏を以てしたことは、その事自體が既に立派な詩であり畫である。況んや、四面楚歌の重圍に陷ち、生死の境に立つて悠々惜別の宴を張り、吟じ且つ舞ふの一齣に至つては、情豪と麗人の末路を詩化し、美化し、餘韻あり、餘情あり、幾千載の後まで青史の花として活きて居るのである。我邦では源廷尉義經と白拍子靜とが之に似て居る。生別死別を衆ぬる壯烈と、靜が鶴ヶ岡の舞殿で、賴朝一

座の鼻柱を挫いた勇氣とは、共に千古不磨の佳話である。

項羽の人爲

項羽名は籍、身の丈高く、容貌魁偉、鬚髯神の如く、力能く鼎を扛げ、才氣も亦人に超えた。年二十有四の時、初めて季父項梁に從つて起つた。祖父は楚の將項燕、秦が王剪を將として楚を滅した時敗死した。故に秦を擊つことは祖國並に父祖の爲めの復讎であつた。

羽少き時書を學んで成らず、去つて劍を學ぶも亦成らず、項梁が叱ると、書は以て姓名を記すに足るのみ、劍は一人の敵學ぶに足らず、萬人の敵を學ばんと傲語した。そこで兵法を授けたが、これだけは直ちに會得し、大意に通曉するに至つた。

一世を呑吐

後ち秦の始皇が、南の方會稽に遊んで浙江を渡つた時、項梁と共に行つて其の行列の美美しく壯嚴なのを見、慨然として、彼れ取つて以て代るべしと獨語いた。項梁は慌しく羽の口を掩ひ、妄言する勿れ、族滅せられんと警めた。これによつて見ると、當時既に卓犖不羈、一世を呑吐するの氣慨を具へてゐたことが解る。

虞の人爲

虞美人は出自が判然して居らぬ。或はいふ、途山驛の老儒の女と。四歳にして詩を讀み、六歳にして文を屬す。長ずるに從ひ才色ともに秀で、綽約として仙姝の如く、天妃の如く而も凛たる淑氣は眉宇に溢れ、決して凡庸輩の耦ではなかつた。老儒は羽の剛勇を愛し、

配して箕箒の婦としたもの。意氣投合して膠漆の如く、常に陣中に隨ひ、羽の勇氣は虞美人によつて培はるゝことが鮮くなかつた。

かくて大戰七十、小戰八十。未だ曾て敗を取つたことなく、天下を蹂躙して漢王の心膽を寒からしめたが、最後の一戰利あらず。垓下に於て十重二十重に取圍まれ、劍戟半ば折れて旌旗に影なく、名馬騅、美人虞、將軍桓楚以下殘兵僅かに八百餘人を剩すのみとなつた。漢軍を望めば、其の勢百二十萬、野に山に滿ち〳〵て金鼓の聲天地に震ふ。羽更に驚かず。我が武なほ試むべしと言ふ。その夜三更、漢軍の四面に楚歌するを聞き、始めて驚いて曰く、漢已に楚を得たるか、何ぞ楚人の多きやと。因つて天を仰いで嘆息し、左右皆色を失つた。

時に虞美人帳中より走り出で、「妾の大王に侍する既に數年、未だ涕淚の下るを見しことなし。今日何を以て悲嘆したまふや」と問ふ。羽慨然として戰の利なきを告げ、永訣の時到れるを語る。虞美人潸々として紅涙に咽び、生死を俱にせんことを誓ふ。羽・帳中に入り、强ひて杯を把り、悲歌慷慨、虞に命じて舞はしめ、自ら歌つて曰く、

「力山を拔き氣は世を蓋ふ、
時に利あらず騅逝かず、
香魂夜劍光を拖ふて飛ぶ

虞や虞や若を奈何せん。」

と。殘燭暗澹として涙顏を照らし、凄愴の氣夜帳に漲る。虞情に堪へず、歌を作つて之に和す。

「漢兵已に地を略し、
大王意氣盡く、
四面楚歌の聲、
賤妾何ぞ生を聊まん。」

歌ふこと數回、聲咽び曲亂れ、羽も亦涙數行下り、左右皆泣き、敢て仰ぎ視るものなし。

燭光いよ〳〵黯く、楚歌漸く多し。

羽涙を拂ひ、虞の肩を撫し、「事既に玆に至る以上、最早活くるの道なし。汝は齡少く貌麗し、劉邦必ず刃を加へざらん。善く漢王に事へ、生を完うせよ」といふ。虞長嘆嗚咽し

「妾聞く、忠臣は二君に仕へず、貞婦は二夫に見えずとか。請ふ先づ大王の爲めに死なん、生を貪るを欲せず」と。羽今は此迄なり、さらばと劍を解き、顏を背向けて授く、虞これを受け、肩に流るゝ黑髮を梳きあげ、白臘を欺く美しき頸に刃を擬すると見えたが、忽ち自ら刎ね、芳魂終に喚べども還らず、永しへに此世を去つた。

羽は屍を抱いて慟哭し、

「我れ今日まで、堅を被り銳を執り、萬死の間に出入し、百戰百勝、人を殺し城を屠れる所以のものは、一つに汝と共に天下統一の業を樂しまんと欲したからである。事志と違ひ、今や幽明境を異にす。嗚呼われも亦死なん」と。軺て騅に跨り、麾下の壯士を從へ、一氣に重圍を衝いて南に馳せた。天低く路黑く、馬蹄の響曠野に轟く。

疾く馳せて江淮を渡る時、從騎僅に百餘騎、漢の追兵五千騎逼る。陰陵に道を失ひ、一田父に紿かれて大澤に陷り、東城に及ぶ頃殘卒二十八騎のみ。自ら終に脫し得ざるを測り從騎に謂つて曰く、

「吾れ兵を起して今に至る八歲。七十餘戰。當るものは破り擊つものは服し、未だ一敗を取らず、遂に天下を覇有したが、今卒にこゝに困む。此れ天の我を亡ぼすもの、戰の罪では無い。今日固より死を決す。願くは諸君の爲めに決戰三勝し、將を斬り旗を倒し、以て戰の罪にあらざるを知らしめん」と。大に呼んで馳突奮戰し、手づから一將軍を斬り、一都尉を斬り、雜兵數十百人を斬り、猛虎の群羊を驅るに異らず。漢軍辟易して屍は大壑を埋めた。

東の方烏江に至つた時、亭長は船を艤して待ち、江東千里、衆なほ十萬、再起すべしと

慫慂したが、始め江東の子弟八千を率ゐて西し、今一人の生きて還るものなし、何の面目あつて又その父老に見えんやと。乃ち自ら刎ねて死んだ。

「勝敗は兵家も期すべからず、　羞を包み恥を忍ぶ是れ男兒、
江東の子弟豪俊多し、　土を捲いて重ねて來る未だ知るべからず。」（杜牧）

× × × ×

虞美人草

虞美人の芳魂が化し、其の墓原に生え出た草は、花瓣麗はしく風のまに〳〵旋轉して舞ふた。時人虞美人草と名づけ、

「貞魂化して原頭の草と作り、　東風を逐ふて漢郊に入らず。」（朱靜庵）

など謳はれた。宋の曹子固の「虞美人草」の詩は、千古の絶調、吟誦に適するものである。

「鴻門の玉斗紛として雪の如し、　十萬の降兵夜血を流す、
咸陽の宮殿三月紅なり、　覇業已に煙燼に隨つて滅し、
剛強なるは必ず死し仁義なるは王たり、　陰陵に道を失ふは天の亡ぼすに非ず、
英雄本學ぶ萬人の敵、　何ぞ用ひん屑々紅粧を悲しむを、
三軍散じ盡きて旌旗倒れ、　玉帳の佳人座中に老いたり、
香魂夜劍光を逐うて飛び、　青血化して原上の艸と爲る、
芳心寂寞として寒枝に寄せ、　舊曲聞き來りて眉を斂むるに似たり、
哀怨徘徊して愁ひて語らず、　恰も初めて楚歌を聽し時の如し、
滔々たる逝く水今古に流る、　漢楚の興亡兩つながら丘土、
當年の遺事久しく空と成る、　慷慨樽前誰が爲めにか舞はん。」

漢庭第一の美人

三、桃花を瞼とし玉を肌となす

〔前漢　張后と惠帝〕

「脂粉を假らずして顏色朝霞の雪に映ずるが如く、又梨花の雨を帶ぶるが如く、而も娟秀無瑕、肌理膩潔、肥瘠度に合す。蛾眉にして鳳眼、蝤領にして蟬鬢、額は廣圓にして光鑑むべく、厥胸や平滿、厥背や微厚、厥肩や圓正、厥腰や纖弱、痔なく瘍なく黑子無く、口皐腋足の私病無く、玲瓏玉を欺き、温淑の氣外に溢る。洵に是れ絶代無二の佳人なり。」

桃花を瞼とし玉を肌となす

とは漢の惠帝が張皇后を冊立するに當り、命じて皇后の身體を檢査させた時、女官の復命した言である。漢庭の美姫前後通じて數萬を以て數ふるも、容德兼ね備はること張皇后の右に出るものは無かつた。

皇后の生立ち

皇后は惠帝の女甥に當り、名は嫣。字に淑君。父は宣平侯張敖。敖が帝の姉魯元公主の降嫁を得て生んだ子である。幼より温淑寡默。嘗て齒を見はさず、閤より下らず。五六歳の時、常に母に從つて宮中に出入したが、梅檀は二葉より芳ばしく、祖父高祖が可愛がり嘗て戚夫人に對ひ、此の子十年の後は、逈に汝の及ばぬ美人となるであらうと語つた。

采納

十歳の時、祖母呂太后の氣に入り、惠帝が人倫の序を乖ると氣遣ふのを強ひて納得させて迎へた。太后は皇后が餘りに幼少であるから、人の己れを議するを恐れ、詐つて十二歳だと稱し、束帛雁璧、馬十二匹、黄金二萬斤を采納とし、丞相曹參に詔して聘使とした。

禮裝の美

入内に當つて天子は軒に臨み、百官は左右に堵列し、女官は皇后を扶けて輿より降し、未央宮の前殿に入つた。禮服上は紺下は縹、領深く袖廣く、鞶の帶霞の帔、首に龍鳳の冠を戴き、簪珥步ゆめば搖ぐ、冠前に珠旒十二、燦々として王貌に映じ、觀る者咸な嘖々として私語驚嘆し、神仙も亦及ばずと稱した。

華燭の典

皇后北面し、禮官冊文を讀み、畢つて皇后六肅三跪三拜し、女官に引かれて帝前に進み恩命の忝きを謝す。紅潮して頰を暈し、羞を含んで首を垂れ、言なくして伏すること多時。女官耳に口を寄せて囁き敎ふ、卽ち纔に口を開いて「臣妾張嫣」と稱し、帝の萬歳を賀した。其幽韵恰も微風の簫に振ひ、嬌鶯の初めて囀ずるが如く、帝爲めに容を動かし、大尉周勃をして璽綬を授けしめ以て禮を終つた。

合巹の禮

斯くて皇后は軟輿に乘じて中宮に入つたが、中宮の四壁は皆塗るに黄金を以てし、明珠を綴つて簾と爲し、青玉を琢つて几と爲し、旃檀の牀に珊瑚を鏤め、紅羅の帳に翡翠を飾り、錦衾繡枕皆龍鳳を織り、其他の什器五光璀璨、椒芬鼻を撲ち目も眩むばかりであつた。此所にて帝と后と合巹の禮を行ひ、后觴を帝に奉つて自ら女甥阿嬌と稱し、帝金樽を以て后に酌み勉めて一盞を傾けしめた。

謹嚴にして殊艶

夕に及ぶも后は襟を正して端坐し、更に傍目も振らず。謹嚴にして緊肅。寸毫の弛みもなかつた。帝は燭を乘つて注視するに、明眸皓齒、嬌は海棠の晨露を含むが如く、艶は桃杏の朝霞に映ずるが如く、四肢五體百官の末まで其位置各々妙を極め、姝麗絶倫、古への莊姜、西施と雖も、恐らく僅に皇后の美の一部分を備へ得たに過ぎぬであらうと想はしめ

桃花を瞼とし玉を肌となす

惠帝の得意

た。

帝は得意滿面で、出でゝ諸宮嬪に語つて曰く、

「皇后は齡なほ穉くして天眞無垢、未だ人事を解せねが、靜淑の氣は渾金璞玉の裡に薰つて居る。其色は白玉盤と勝を爭ひ、其態は可憐、人をして終日之に對して厭かしめぬ。今より五年の後、汝輩は到底脚下にも寄りつけず、皆罷め黜けらるゝに至るやも圖らぬ。併し朕の重んずる所は色にあらずして其德に在る云々」と。乃ち敢て皇后の寢所に宿せず、其長ずるを待つた。

挾書解禁

一日帝は后宮に至り、讀書の聲の淸婉にして戶外に達するを聞き、笑つて后に謂つて曰く、汝秦の始皇の書を焚き儒を坑にする事を聞かざるか、胡爲れぞ腐儒の爲す所に效ふやと。后起つて一揖し、徐ろに對へて曰く、

「曩に妾の父張敖に聞く、秦の速に亡んだ所以は半ば焚書坑儒の事に原因すと。陛下は聖明天の縱す所、而も猶ほ亡秦の律を用ひ給ふ。窃に陛下の爲めに之を惜しむ云々」と。帝は其の言に感じ、乃ち天下に令して挾書の律を除き、隱れてゐた古書が、稍々世に現はるに至つた。

淮南王來謁

嘗て帝の弟淮南王が來朝し、一たび皇后の宮に詣り、拜謁したいと願つた。帝は笑つて汝の嫂はまだ笄（年十五）に及ばぬ樸訥の一童女に過ぎぬ。敢て朝するに及ばぬと斥けたが、王は固く請ふて許され、簾を隔てゝ對面した。王は跪き拜して恭敬を盡くし、后は肅んで答禮し、環珮鏘然として王の耳朶に響いた。

后は徐ろに口を開き「九叔羔なきか」と言ひ、外に一言を發せず、端坐して瞳を動さなかつた。王は退いて人に語つて曰く「吾が嫂は、氣高きこと神仙の如く、古今第一の麗人であり、第一の善人である。」と口を極めて賞讃した。

上苑の遊ひ

帝は內寵も多く、嬖童も居つたが、唯だ皇后が年少く、簡靜無慾、まだ人事を解せぬことを憾とした。殊に帝は蒲柳の質であつたから、呂太后は、蚤く皇后に子のあることを望んでゐた。或日帝の疾が癒えた祝ひに、諸美人中殊色あるものを召して上苑に遊んだ。何れも妍を誇り艶を鬪はし、服飾燦然花木と光を爭ふたが、その中に交つた皇后は、淡妝素飾、珊然として步を運び、輕雲の岫を出づるが如く、其の裙の動くを見なかつた。宮人どもは目眩き心馳せ、爽然として自失せぬは無く、皆その氣品に感じた。帝は嗟いて「神仙の中にも、この位の美人は居らぬであらう」と嘆じた。

死別の哀韻

卽位の七年八月、帝の疾漸く重く、諸美人は榻を繞つて坐し、皇后も亦自ら湯藥に侍して看護を怠らなかつた。帝は最早起つことは出來ぬと覺り、后を招いて牀に登らせ、その肩に手を掛けて、

「阿嬢よ、今は已に成長し、愛々舍くに忍びざらしめる。併し、汝の豐頰も恐らく後日に至つて、我が爲めに消瘦するの時があらう。あゝ汝の如き者と夫婦となり、一日もまだ男女の樂しみを遂げなかつたことの果敢なさ。太后が汝を愛した爲めに、幼い時から宮中に入り、遂に處女に終らしむるに至つた。されど、婦人は夫を以て天と爲さねばならぬ。必ず永久に我を忘るゝこと勿れ。唯だ汝の早く嫠婦となり、侮りを人に受くること無きやを憂ひとする。冀はくば自重せよ」と。嗚咽言ふ能はず、幾許もなく溘焉として長逝した。年僅に二十三。

此時張后は甫めて十四歳であつた。哀傷惻々、哭聲悽婉、雲鬢は蓬の如く、麻衣は雪の如く、轉た妍麗の容を增した。見るものは皆同情して、

「惠帝が全盛の天下を棄て去るは尙ほ惜しむに足らぬが、獨り此の幼豔の皇后を殘し去るは惜しみても餘りがある」と私語した。

潔癖と體香

張后は幼い時から潔癖で、几榻の上には纖塵をも止めず。盛夏の日、內寢に在つて必ず襟を整へて端坐し、如何に暑くても汗を見せず、氣に入らぬことが有つても叱言一ついはず。寢ぬるにその鼾聲を聞いたものが無かつた。偶ま入浴に當り、侍女がその背を濯ふに后の全身は白く艶やかで、肌膚は凝脂と異ならず。香泉に浴せぬのに、芬郁として芝蘭の香氣を發した。侍女が背後から嘆聲を洩らし、

「何といふ美しいお體でせう、妾でさへ愛慕を禁じないのに、先帝は何故早く逝き給うたのであらう。惜しことである」と言つた。后は叱して、決して多言してはならぬと警めた。

扇御

光陰は流るゝ如く、空閨に二十を過ぎ、三十を經、終に四十に達したが、丰神綽約として處女の如く、美は年と共に加はつた。病を以て崩じたのは四十一歳。當時既に骨肉懿親の側に居るもの無く、宮女どもは后の身體を裸にして沐浴を施した。その美は玉を欺き、眞に處女であつたが、皆その肌膚を撫で、棺に斂め去るに忍びず、四肢五體の寸法を量つて誌し、一日を閱して始めて之を斂めた。斯くて惠帝の生時營んだ安陵へ葬り、廟を建てず、墳をも築かなかつた。

桃花を瞼とし玉を肌とす

陵墓發掘を免かる

后崩じて百五十餘年の後、赤眉の賊が長安に入つて漢の諸陵墓を發掘したが、葬るに玉匣を用ひたものは皆尸が壞れず、その面は生けるが如く、その肌は白蠟の如く、呂后を始め年少の后妃は多く汚辱され、群盜どもは相爭うて殺戮するに至つた。併し張皇后のみは墳が無かつた爲めに發掘を免れた。

傾城傾國の佳人

魏晉の間、關中の民は張后を祀つて蠶神とし、又花神とし、多く廟を立つて崇敬を拂つた。

四、返魂香裡佳人來ること遲し

〔前漢　李夫人と武帝〕

「北方に佳人あり、
　一たび顧みれば人の城を傾け、
　寧ろ傾城と傾國とを知らざらんや、
　佳人再び得難し。」

絶世にして獨立す。
再び顧みれば人の國を傾く。

音樂歌舞を以て漢の武帝に仕へて嬖せられた李延年が、武帝の前で自分の妹を褒め、節

李延年の昇進

後宮美人一萬八千人

面白く謠つた歌が是れである。一顧城を傾け、再顧國を傾くるに足る美人であるから、傾城傾國を度外視せねば再び這麼美人は手に入らぬといふ意味である。好色大王の心は動かずには居られなかつた。世の中に豈夫そんな美人も居まいと、武帝が憧れ氣分で獨語くと側に居た平陽公主が、延年の妹に絶世の美人が居ることを話した。武帝は歌によつて大分挑發されて居るところであつたから、早速勅使を派して其妹を召し上せた。見ると成程、妙齡の佳人、又と獲られぬ尤物である。その上妙歌善舞、擧止閑雅、氣品も備つてゐたので大にお氣に召し、後宮數千人の佳麗中、比なき寵愛を一身に集め、間もなく一子を設けて時めいた。是れなん方士李少翁の招魂術によつて有名な李夫人である。

李夫人は中山の人。父・兄・弟共に歌舞容色を以て貴人に媚びる藝人であつた。兄延年は曾て法に坐し、腐刑に處せられたものであるが、當時盛に天地の諸祠を興し、司馬相如等に命じて詩頌を作らせ、延年に作曲絃歌せしめたから、幸に武帝に近侍し、遂に妹を勸むるに至つたのである。妹が後宮に入りて後、頻りに昇進して協律都尉となり、二千石の印綬を佩び、帝と殿中に起臥を共にして其寵愛を恣にした。

元朔年中、武帝は明光宮を起し、燕趙の美女二千人を集めて之を納れた。率ね皆十五歲

返魂香裡佳人來ること遲し

以上二十歳以下で、年三十に滿ちたものは宮を出して人に嫁せしめた。後宮美人の總籍一萬有八千人と註せられ、建章、未央、長安の三宮は皆輦道を以て聯ねて往來を自由にし、常に近幸せらるゝ者は其籍に註記して俸秩を增加した。當時六百石以上を賜ふの宮人でさへ相當多數を占めたが、此等の中最も愛幸せらるゝものでも數年間に一回か二回位召さるゝに過ぎなかつた。爲めに宮人は競うて人主に媚びる術を研究し、魅惑の技能を善くするもの頗る多く、就中二百人は常に選ばれて帝の郡縣巡視の時後車に載せられてお伴した帝と輦を同じうするものは十六人、粉黛を假らずして自然に美しい麗人ばかり。其中でも李夫人は特に光彩を放つた。

武帝の好色振り

武帝は嘗て語つて曰ふに「三日間飯を喫せず水を飲まずに過ごすことは出來ても、たゞ一日一夜でも側に婦人が無くては寂しくて寸刻も辛棒出來ぬ」と。以て其好色ぶりを想ふべしである。斯く女色に耽つたが、一方養氣補腎の術を行つたから常に壯强で子も多く、若し子を娠むものがある時は、爵位を贈り金千斤を賜ひ、優遇の途を講じた。

李夫人が病に臥し、久しく癒えなかつた時、帝は自らその病床に臨んで慰撫した。夫人は蒲團を頭から被つて顔を隱し。

臨終の悲哀

「妾の病久しく、形貌憔悴せる爲め、君王にお目にかゝることを恥ぢる。妾は再び起ち難いことを知る、冀はくば妾の歿後、王子と兄弟とを庇護したまへ。これのみが願ひである」と涙ながらに賴んだ。帝は憮然たること稍久しく、「汝病篤きため、今世に於て亦ともに語るの機はなからう、王子と兄弟とは意に介するなかれ」と慰ぐさめ、それにても今一度顏を見せよと言へば、夫人は暫く無言のまゝ涙を流してゐたが、軈て細い聲で

「凡そ婦人の身は、貌を修飾せねば君父に見ゆべきでない、今妾の枯槁、何の無禮か、病褥に於て君王に見ゆることを得んや」と。帝は再三强ひ、唯だ一度と迫つたが、夫人は遂に身體を背向け、歔欷して復た物を言はなかつた。

賢明な思慮

帝は座を立つて、不機嫌に其場を去つた。夫人の姉妹等は夫人を責め、何故一たび拜謁して我々の後事を依託して呉れなかつたかと怨むと、夫人は暗涙に咽びつゝ、

「色を以て人に事ふる者は、色衰へて愛情の弛むは必然、愛情弛めば恩惠も從つて絕える、帝が妾に戀々たる所以は平生の美貌を以てゞある。今この瘦せ損じた顏の以前と異るを見給はんか、必ず厭忌して妾を棄て又兄弟共をも顧み給はぬやうになるであらう。帝に拜謁しなかつたのは卽ち深く兄弟を依託せんと欲したからである云々」と語つた。側に看護し

返魂香裡佳人來ること遲し

て居る者等は、皆その深い思慮に感嘆せぬは無かつた。

その後數日、夫人は終に此の世を去つた。帝は哀惜して措かず、皇后の禮を具へて葬儀を行ひ、繪姿を作らせて甘泉宮に掲げ、朝夕之を見ては思慕戀々の情を遣つた。

李夫人が一たび進出して以後は「金屋阿嬌」の寵を恣にしてゐた陳皇后が、弊履の如く捨てゝ顧られず、遂に長門宮に幽せられて失意の裡に悶死した。それだけ李夫人は武帝の愛を專有したものである。その死に臨んで憔悴してゐる顏を見せなかつたことから考へると、夫人も帝の愛を保つ爲めには苦心してゐたことが解る。

「長門深く鎖して春寒に怯ゆ、　獨り惜む佳人の再び得難きを、
若し病中に一顧せしむれば、　何に由つて腸は斷ち歩むこと姍々たらん。」

（晴嵐）

繪姿

金屋阿嬌

此時武帝は、始めて昆靈の池を穿ち、翔禽の舟を泛べ、自ら夫人思慕の歌曲を作つて女樂師に謠はせた。日西に傾き、涼風水に激し、その聲甚だ悲壯。因つて「落葉哀蟬の曲」を賦した。

「羅袂聲無く玉墀塵生じ、　虛房冷にして寂寞、落葉重扃に依る。

落葉哀蟬の曲

彼の美なる女を望む、　安んぞ余の心の未だ寧からざるを感ぜしめ得んや。

と。帝悶々自ら支へず。龍膏の燭を命じて船內を照らし、洪梁の酒を酌むに文螺の巵を以てし、三爵始めて色柔らぎ心歡び、延涼の室に憩うたが、夢に李夫人來つて蘅蕪の香を贈ると見て驚き覺めた。香氣馥郁として猶ほ衣枕に薰ること數ケ月。帝いよ〳〵思慕の情禁ぜず。涕泣席に沿ねく、延涼の室を改めて芳夢室と名づけた。

蘅蕪の香

時に東方朔が鍾山の香草を獻づた。之を懷いて寢ると必ず夢に李夫人を見た。依て此草を懷夢草と名づけ、遂に靈夢臺を作つて歲時に夫人の祭を行つた。

懷夢草

たま〳〵齊の方士李少翁が來て、夫人の亡靈を招くの術ありと申出た。そこで夜帷帳を設け、燈燭を張り、酒肉を陳ね、以て其術を行はしめた。帝は別の帷幄の裡に坐して見て居ると、果して李夫人の貌が髣髴として現はれ、帝の帷幄を環つて歩んだ。帝は聲をかけ近寄らんとしたが、李少翁は之を拒んだ。此の招魂から後、益〻悲愴の情に堪へず、詩を作つて之を絃歌せしめた。其詩に曰く、

招魂の方術

「是か非か、立つて之を望めば、　翩として、何ぞ姍々として其來ること遲きや。」

白樂天の詠じた李夫人の詩は、末尾に「人木石に非ず皆情有り」の句があり、凄艶、人

返魂香裡佳人來ること遲し

李夫人の詩

を愁殺するに足る。曰く

「漢の武帝初めて李夫人を喪ふ、
死後留め得たり生前の恩、
甘泉殿裏眞を寫さしむ、
不言不笑人を愁殺す、
玉釜に煎錬して金爐に焚く、
反魂香夫人の魂を降す、
香煙引いて到る焚香の處、
縹渺悠揚として還た滅し去る、
是か非か兩つながら知らず、
似ず昭陽に疾に寢ねし時に、
燈に背き帳を隔てゝ語るを得ず、
心を傷むる獨り漢の武帝のみならず、
君見ずや穆王の三日哭せるを、
夫人病める時別るゝを肯ぜず、
君恩盡きず念ふて未だ已まず、
丹青寫し出すも何の益ぞ、
又方士をして靈藥を合さしむ、
九華帳深うして夜悄々たり、
夫人の魂何れの許にか在る、
既に來つて何ぞ苦だ須臾もせざる、
去るの何ぞ速にして來るの何ぞ遲き、
翠蛾は平生の貌に髣髴たり、
魂來るも君は亦悲しむ、
安んぞ暫く來つて還た見るを用つてせん、
古へより今に及んで皆斯くの若し。
重璧臺前に盛姬を傷んで、
又見ずや太陵一掬の淚、
縱令妍姿艶質は化して土と爲るも、
生きては亦惑ひ死して亦惑ふ、
人は木石に非ず皆情有り、
馬嵬坡下に楊妃を念ふて、
此の恨は長へに在つて銷ゆるの期無し、
尤物の人を惑はす忘れんとするも得ず、
如かず傾城の色に遇はざらんには。」（白樂天）

佳人薄命の代表者

五、蛾眉徒らに老ゆ胡北の塵

〔前漢　王昭君と元帝〕

佳人薄命といふ語は、王昭君の爲めに作られたかと思はれる程、王昭君の不遇は、漢以來二千年間、幾多の詞人墨客をして咨嗟詠嘆せしめて居る。此れ程後世の同情を牽き、此れ程當時を追懷せしめるものは又とない。全く絶世の麗人であり、而も紅顏薄命であつたから、詩になり曲になり畫になるのであらう。光緒三年の編纂にかゝる『青冢志』には、十二卷全部に、王昭君を謳うた古今體の詩數百篇を採錄して居る。古來如何に詩曲の好對象として取扱はれたかゞ窺はれる。

昭君村と香溪

『大明一統志』に、昭君村は歸州の東北四十里に在りとある。白樂天及び杜甫の詩にも、昭君村を過ぐるの作がある。卽ち昭君はその村の良家王穰の女で、名は嬙、號は昭君であつた。家は水に臨み、昭君が朝夕その溪で顏や手を洗つてゐたから、今日まで香溪と稱せられて居る。

王明妃と改む

晉時代に至つて、晉の文帝（司馬昭）の諱が昭であつたから、晉人は昭君を改めて明妃といつた。爾來王明妃又王明君とも稱するに至り、詩題にも明妃詞、明妃曲、明妃怨、明妃詠など〻附けられて居るものが多い。

生ひ立ち

昭君の美容は、鶴の鷄群に立つが如く、翹然として獨り秀で、光豔人を照らすものがあつた。幼にして其の志常人と異り、嘗て一歩も門外に出ず。父愛すること深く、降るが如き緣談を悉く斥け、望みを宮掖に繫いでゐた。

掖庭に入る

芳紀十七の春、果して時の帝王元帝のお召しに與り、六宮の佳麗に列することを得たが由來好色の元帝は、博く良家の美女を選んでその數、千を以て數へ、嬖幸多く、昭君は未だ嘗て進御の機を得ず、空しく歲月を涉つた。

元帝は餘りに數多い佳麗の顏を、一々見覺えて居る譯にゆかぬから、天晴妙案として考へ出したのが、宮女の肖像畫帳であつた。畫工に命じて宮女全部の容姿を模寫させ、その畫帳を繰つて夜毎の愛幸を定めることゝした。多くの宮女たちは、我れこそ寵愛を受けんものと、畫工に賄賂を遣つて、自分の姿をよりよく立派に描かせ、以て君王のお目に止まらんことを希うた。

畫工の偏頗

此の時昭君は、自分の美貌を恃み、正直に描寫されるものと思つて、畫工の機嫌を取ることをしなかつた。畫工は決して正直でなかつた。賄賂の多寡によつて筆を左右し、昭君の肖像は殊更醜く寫して上つた。之が爲め召さるゝことも無く、靑春の過ぎ易く、佳期の再び廻り來ぬことを嗟いた。

單于に降嫁

たま〳〵竟寧元年、匈奴の單于呼韓邪が來朝し、後宮の美人一人を賜はつて閼氏（匈奴の皇后）とし、以て自ら漢の婿たらんことを希うた。元帝は例の畫帳を繰つて、これなら匈奴に遣つても惜しくないと、昭君を選り出して單于に與へることゝした。

帝王の銷魂

愈よ單于に從つて漢庭を辭するに當り、暇乞の爲め召されて御前に出ると、眞物の昭君と畫帳の昭君とは、全く雪と墨ほど違つた。是れこそ眞に後宮佳麗三千人中第一の美人であつた。丰韻娉婷として光彩宮殿に耀き、帝王を銷魂せしめると共に、左右の群臣をも惱

殺した。その辯口の爽に、應對流るゝ如く、擧止の閑かに、幽情掬すべき、恐らく先代の李夫人も之には及ばじと思はれた。

元帝は驚き且つ悔い、約を破つて留めたくは思つたが、信を外國に失ふを懼れ、遂に單于に賜うて朔北に行かしめることゝした。

昭君は身に戎服を纏ひ、馬に跨つて琵琶を抱き、顧望低回、悲しみの曲を彈じつゝ、單于に衛られて、一路關山萬里の旅に上つた。帝王を始め、見送る人々の眼には、暗涙の滂沱たるを禁じ得なかつた。

玉關を出で陰山の下を涉り、朔北黄沙の曠原を辿ること數旬。漸くにして胡笳悲鳴する異域、匈奴の都にと着いた。

漢庭を辭す

單于は昭君を得て、漢宮の優遇を喜び、酒を縱にし、樂みに耽り、返禮の使者を立て白璧一雙、駿馬十匹を贈り、昭君を賜うた恩義に酬いた。

「干闐（胡地の地名）花を採る人、
自ら言ふ花に相似たりと、
明妃一たび西胡に入れば、
胡中の美女多く羞死す、
乃ち知る漢地名姝多きを、
胡中花の方に比すべき無し、

玉顏老ゆ

丹青は能く醜を妍ならしむ、
無鹽（女醜）翻つて深宮裏に在り、
古より蛾眉を嫉む、
胡沙皓齒を埋む。」（李白）

花咲き鳥謳ふ漢庭から、蓬絶え氷鎖す塞北に移された麗人昭君は、朝な夕な、見るもの聞くもの皆悲しみの種ならぬはなく、月日を經るまゝに、故山の空戀しく、遣瀨なき懊惱を懷いて、玉顏空しく胡塵に老い、生きて再び歸るの機會は永久に杜絶してしまつたのである。

和蠻の功績

しかし、昭君の薄命、昭君の犧牲は、漢宮にとつて大なる功勳であつた。頻年禍した匈奴が、和親の意を以て干戈を收め、邊兵を徵して毎年朝貢を怠らぬやうになつたのは、昭君の爲めである。詩人をして、

「猛將謀臣徒らに自ら貴ぶ、
琵琶一曲干戈を靖んず。

と謳はしめたのは無理でない。古へ西施は吳宮に入つて吳を亡し、今昭君は戎に嫁して戎漢共に完きを得た。乃ち「戎を和す漢の明妃、吳を亡ぼす越の西施」の語を生じた。

毒を仰ぐ

胡雲茫々として天長く、白草離々として地曠く、頭を廻らせど長安を見ず。宛轉たる蛾眉徒らに老ゆ胡北の塵

蛾眉一笑して塞塵清し。
邊功に論じ到れば是れ美人。」

眉徒らに老い、單于も終には死し、一子の母として生き殘つたのである。

由來胡地の風俗に、王子位に卽けば、その母をも妻とする亂倫の習慣があつた。孔孟の敎を受け、五常の道を辨へた昭君にとつて、どうして其の惡風に隨ふことが出來やう。終に毒を仰ぎ、薄命の幕を閉ぢた。

昭君の自殺は、胡國を擧げて震悼した。軈て盛な葬儀が營まれ、大きな塚が築かれた。

青塚

が不思議にも、その塚に生える草のみは、胡地の草の白きに似ず、嚴冬を通じて靑かつた。

「怨風結ぶところ草も靑く、幽情化する時石も亦立つ」とは此の事である。後世まで靑塚と呼び、死して故國を忘れぬ悼しさに、袖を絞るものは詩人のみでない。

靑塚は蒙古名で特木爾烏爾虎といひ、歸化城（塞外の大都）の南方二十支里の地にある。

明妃廟

歸化城は蒙古語で靑城の意味であると。

昭君の生れ故鄕の昭君村では、昭君の訃を聞くと、村人が集つて廟を建て、後世まで明妃廟と稱して祀つた。昭君の薄命は、村人をして後宮に入るを嫌はしめる風習を生じ、女の子が生れると、美醜の別なく、皆その顏に灸して容貌を毀ち、美人として選ばれることを避けたとか。

不正畫工の棄市

畫によつて昭君を誤つた元帝は、畫工の不正を怒り、毛延壽の徒を棄市し、この財を悉く沒收した。しかし畫工の不正は惡むべきも、昭君の事歷を、今日まで不朽ならしめたものは此不正畫工の賜である。靑冢志の自序の中に曰く、

昭君論

「語に云はずや、士美惡と無く朝に入つては嫉まれ、女妍媸と無く宮に入つては嫉まる」と。夫れ白日天に在るも浮雲之を蔽ふ。漢宮卽ち延壽無くして能く昭君をして絕域に致さんや。昭君をして單于に嫁せず、正位椒房に朝夕恩を承けしむるも、一日寵移り愛奪はれて老死せば、萬代千齡、誰か復た琵琶の遺響を尋ねて弔古の幽情を攄ぶるものあらんや。」

之れも一つの見方で、佳人の佳人たる所以は其薄命にありと謂つてよい。此意を謳つた詩も少くないが、又昭君自ら進んで匈奴懷柔の犧牲となつたことを美とする詩歌が甚だ多い。北野緒言に曰く、

北愛を除く

「明妃の請ふて單于に適くは漢帝の爲めに北顧の憂を除かんと欲するなり。其意に以爲らく和親の擧なりと。一女子を以て數萬の甲兵に代ふるに足り、數十年烽火の警なきものは誰れの力ぞや。其殁するに及び、黃茅白葦の中、一抔の土長く芳菲として歇ま

ず、天地も其氣を易ふる能はず。霜露も其色を變ずる能はざるなり云々。」と。詩では「塞北羌胡未だ兵を罷めず、蛾眉一笑して塞塵清し」とか「死戰生留俱に國の爲め、敢て薄命を以て紅顏を怨みず」などある。左に明の李學道の昭君怨一首を引く

「明妃傾城の色を恃む有り、
蛾眉翠黛日に情を含み、
單于に嫁せしめて漢宮を出づ、
爲めに琵琶を抱いて哀怨を訴ふ、
吁嗟乎漢宮美人亦數無し、
縱然恩寵六宮を傾くるも、
獨り明妃あり傳へて今に至る、
當時毛延壽に遇はざれば、
昭君を詠じた詩は晉の石崇の王明君辭を以て濫觴とする。之に次で梁の簡文帝、武陵王、約沈、陳の陳後主、陳昭、北周の王褒、庾信、隋の薛道衡等に謳はれ、唐では李白、杜甫、白樂天を始め、宋では司馬光、蘇軾、蘇轍を始め、詩人といふ詩人には大抵謳はれぬこと

畫工に賂せず空しく自ら惜む、
昭陽此より浮雲隔つ、
馬前颯々寒風鳴る、
怨聲盡くる有るも心窮り無し、
笑を買ひ憐みを爭ひ歌舞を學ぶ、
珠鈿繡幕倶に塵土、
騷人感詠して詩譜成る、
安んぞ芳名を千古に播するを得ん。」

なく、元・明・清を通じて亦旺に謳はれて居る。其詞には哀怨絶韻のものが多い。李白の「明妃一朝西胡に入り、胡中の美女多く羞死す」といへる。孟浩然の「胡地迢々たり三萬里、那ぞ堪へん馬上に明君を送るを」といへる。白樂天の「巫女廟の花は紅こと粉の似く、昭君村の柳は翠きこと眉の如し」といへるなどを始め、歐陽修の「絶色天下に無し、一たび失つて再び得難し」といへる、共に昭君の爲めに萬斛の同情を灑いだものである。

石崇の作つた詩は、愛妾の綠珠に歌ひ且つ舞はせたもので、愛誦するに足る。

「我れは本漢家の子、
辭訣未だ終るに及ばず、
僕御の涕流離、
哀絃五內を傷り、
行く〳〵日已に遠く、
我を穹廬に延き、
殊類安ずる所に非ず、
父子凌辱せられ、
將に單于の庭に適かんとす、
前驅已に旌を抗ぐ、
轅馬悲み且つ鳴く、
泣涙朱纓を沾ほす、
遂に匈奴の城に造る、
我に閼氏の名を加ふ、
貴しと雖も榮とする所に非ず、
之に對して慚ぢ且つ驚く、

身を殺す良に易からず、
默々として以て苟も生く、
苟も生きて亦何の聊あらん、
積思常に憤り盈つ、
願くは飛鴻の翼を假り、
之に乘つて以て遐に征かん、
飛鴻我を顧みず、
佇立以て屏營す、
昔は匣中の玉たり、
今は糞土の英となる、
朝華歡ぶに足らず、
甘じて秋草と并ぶ、
傳語す後世の人、
遠く嫁するは情を爲し難し。」（詩雋類函）

六、團々たる紈扇涙痕を掩ふ

〔前漢　班婕妤と成帝〕

秋扇に喩ふ

青春老い易く、恩寵の中道に絶え易きことを嗟き、身を秋の扇に喩へて一詩を作つた班婕妤は、古來宮庭に於ける才媛として、人口に膾炙するところである。

「玉階露冷なり月明の中、
別院の笙歌曲未だ終らず、
自ら團扇を拈つて秋風を感ず。」（邵騶）

才貌德を備ふ

一種の憂思說く所なし、

班婕妤は漢の成帝の時選ばれて宮中に入り、俄に幸せられて婕妤に上つたものである。容恣絕倫なる上に淑德備はり、文才に富み、宮掖の美人中この右に出るものは無かつた。故に成帝の敬愛厚く「古へ樊姬あり、今班婕妤あり」と悅ばれ、特に增成舍に置かれ、一男子を生んだが、それは數ケ月の後死し、又子が無かつた。

同輩を拒む

嘗て帝は、婕妤と輦を同じうして後庭に遊ばんとしたが、婕妤は之を辭し、「古への聖君は賢臣側に在り、三代の昏主に至つて側に嬖妾多し、今陛下妾と輦を同じうし給はゞ、是れ聖賢の君に似ること無きを奈何せん」と諫めた。成帝もその一言を善しとし、妃嬪と同輦することを止した。

讒言を釋明

その後趙飛燕姉妹が宮に入つて成帝に愛せられ、許皇后も班婕妤も寵を奪はれてしまつた。姉妹のものは、班婕妤が媚術を挾んで後宮を咒詛して居ると讒言したので、帝は婕妤を召して査問した。婕妤は、豫て飛燕姉妹が寵を恃んで禮を蹣え、皇后を惡しざまに言つて廢さんとするの陰謀を憎んでゐたが、帝の迷ひの到底啓き難いことを想ひ、從容として對へていふやう、

團々たる紈扇涙痕を掩ふ

「死生命あり、富貴も亦天の左右するところである。自ら言行を修めて正道を踏んでゐてさへ容易に福を蒙ることは難しい。然るに何を苦しんで邪欲を爲すに暇あらん、鬼神にして若し知るあらば、不正の愬は受けぬであらう」と。成帝もその道理ある應答には辟易しそのまゝ不問に附した。

しかし婕妤は先見の明があつた。高木風に惡まれ易く、何時禍が降りかゝるかも知れぬと考へ、太后を長信宮に供養したいと請うて許され、退いて飛燕姉妹の嫉妬から避けた。

女は美醜となく、宮に入つては必ず嫉まれるが當然である。蛾眉を宮中に鬪はし、明月の長しへに圓からんことを望むは無理である。朱顏未だ改まらざるも、秋風既に吹き荒み、好夢なほ闌ならざるに、夜雨已に窓を敲くを奈何せん、班婕妤は美色を以て早くも長信宮に隱れ、年華水の如く、回春の期なきを嘆き、紈扇の詩を作つて自ら悼んだ。

「新製の齊の紈素、
裁つて合歡の扇と成す、
君が懷袖に出入して、
常に恐る秋節の至りて、
皎潔霜雪の如く、
團々として明月に似たり。
動搖して微風發す、
涼飈の炎熱を奪はんことを、

禍を避く

紈扇の詩

篋笥の中に棄捐せられ、
恩愛中道に絶ゆ。」

この詩は頗る後世に持囃されたもので、後世詩人も亦班婕妤を謳はぬものはなかつた。婕妤の詩は當時にあつて實に堂々たるものであつた。鬚眉の男子も皆辟易した。左の一首は、漢書の外戚傳に見ゆるもので、婕妤の文才を窺ふた足る。

「祖孝の遺德を承け、
軀を宮闕に登簿し、
日月の盛明に當り、
隆寵を增成に奉ず、
竊に嘉時を庶幾す、
佩禍を申べて自ら思ひ（女子の人に適くや母親しく其禍を結び之を戒む、離は香袋）
女史を顧みて詩を問ふ、
褒閤の郵を爲すを哀しむ、
任姒の周に母たるを榮とす、
敢て心を舍て玆に忘れんや、
女圖を陳べて以て鏡監とし、
晨婦の戒を作すを悲しみ（牝鷄の晨のこと）
皇英の虞に妻たるを美とし、
愚陋にして其れ及ぶ靡しと雖、
年歳を經て悼懼し、

哀怨の長篇

團々たる紈扇淚痕を掩ふ

魔人と情豪

蕃華の滋からざるを閔ふ、
仍りて襁褓にして災に離へり、
將に天命の求むべからざるか、
遂に掩莫にして昧幽なり、
罪郵に廢捐せられず、
長信の末流に託し、
永く死を終つて以て期となす、
松柏の餘休に依らん。」

この詩は太后を長信宮に養ひ、帝の寵から遠ざかつたことを哀怨した述懷である、一首あるが後のものには「華殿に塵あり玉階に苔あり、廣室冷にして帷幄暗く、仰いで雲屋を視雙涕横に流る」と冒頭して居る。

× × × ×

成帝は武帝にも讓らぬ程の情豪で、常に夜の微行を好み、太液池の傍に宵游宮を起し、漆を以て柱を塗り、黑綈の幕を張り、服裝器具乘物一切を皆黑色とし、暗中摹索で行幸す

三一〇

陽祿と柘館とを痛む（二館の名、こゝに子を生む）
豈に妾人の殃咎ならんや、
白日忽として已に光を移し、
猶ほ覆載の厚德を被り、
供食を東宮に奉ず、
洒掃を帷幄に共にし、
願はくは骨を山足に歸して、

るを悅んだ。宮女共は皆黑の單衣を纏ひ、班婕妤より以下は盡く玄綬を帶び、簪や佩玉の美しきも之を木蘭の紗絹で蔽ひ、宵游宮に至ると乃ち燭を秉つて讌遊した。

又方一丈の飛行殿を造つた。丁度輦の如く、羽林の力强い士を選んで之を負はせ、以て趨つた、帝は輦上に於て其行くこと快速なるを覺え、其中に風雷の聲の如きを聞き、名づけて雲雷宮といつた。幸する所の宮は皆毛氈を舖き、車轍や馬蹄の音の立つことを惡んだ。乘輿宮に還る時は、愛する美姫に寶衣珍寶の類を道傍に投げ捨てさせたが、之を拾うて喜ぶもの多く、國の故老共は皆萬歲を唱へた。

宮中に月影臺、雲光殿、九華殿、鳴鸞殿、開襟閣、臨池觀等の立派な御殿が甍を並べ、甘泉殿には雲帳、雲幄、雲幕を設け、世に之を三雲殿と稱した。其他窈窕たる美姫の棲住する宮殿は數限らず。情豪振を發揮したものである。

七、楚腰纖細掌上に妙舞す

〔前漢 趙飛燕と成帝〕

姉妹の生ひ立ち

姉飛燕は體輕く腰細く、恰も手に滿開の花枝を執る如く、顫々として人を危ぶましめた。當に是れ古今第一の國色、妹合德は玉骨氷肌、瑩然として光潔、浴を出でゝ水滴體に滯らず、芳氣氤氳として鼻を撲つた。是れ亦千載一遇の天香。漢の成帝は此の國色天香の姉妹を兩手の花として、「武帝のやうに白雲の鄕は望むところでない。我れは此の溫柔鄕に老いん」といひ。癡の如く醉へるが如く、享樂飽滿の月日を送つた。

掌上に舞ふ

飛燕姉妹の祖父馮大力は樂器工で、江都王に事へたが、父馮萬金は家業を傳へず、音樂を專習し悲哀の旋律を以て人を感動させた。江都中尉趙曼の妻は、江都王の孫で才貌兼備の才媛であつたが、曼は早くから病の爲めに婦人を近づけなかつたから、その妻は曼と仲の善かつた萬金と通じて雙生兒を生落した。双方とも女の子であつたが、萬金は之を引取つて長を宜主、次を合德と命名し、苗字は矢張趙と稱して愛育した。

宜主は幼より聰明穎悟、長じて纖細輕捷、歩むに足地に著かず。燕の翩々として飛び去り飛び來るが如く、而も歌舞を善くしたので、誰れいふとなく飛燕と呼ぶに至つた。後世「飛燕掌上に舞ふ」といふ語が傳はつて居るが、是れは體が輕捷であるから、掌上に舞ふに堪ふといふ意味から出來た語であらう。

流浪の旅へ

父馮萬金が歿して後は家產が破れ、姉妹は流轉して長安の都に上り、鄕里を同じうする趙臨の家に厄介となつた。趙臨も貧乏暮しであつたから、姉妹二人は食ふや食はずに、夜は一枚の煎餅蒲團に絡まつて顫へてゐた。當時その隣りに住んでゐた鳥を射る若者と飛燕と戀仲となり、雪中で屢ば密會したが、飛燕の體は常に溫く、肌に粟さへ生じなかつたので、若者は神仙ではないかと怪しんだ。

成帝見初む

後ち陽阿公主の家に謳ひ女として雇はれてゐたが、偶ま成帝が公主の家に行幸して飛燕を見初めた。これが飛燕出世の動機である。此の時酒宴に侍つて一曲を舞ふた。燕の微風を掠め、鴻雁の半天を遮るが如く、姍々として骨鳴り、悉々として腰折れ、成帝をして心魂の蕩搖を禁じ得ざらしめた。

初夜の睦事

間もなく詔が降つて飛燕は宮中に召出され、愛幸を受くるの身となつた。初めて帝の御寢に侍つた夕、瞑目して堅く帝の手を握つたまゝ淚頤に交はり、戰々兢々、羞んで顫へるばかり。帝は三夕も飛燕を抱いたまゝ、慰撫に夜は明けた。

帝と最も親しい宮女が、帝に向つて、飛燕との初夜の睦事を問うた。帝は微笑んで「豐滿な肉體は餘りがあり、柔軟な玉肌は骨なきが如く、遷延し、謙遜し、遠ざかるがや

うに、又近づくるがやうに、羞しさのうちに禮儀を愼しむ眞の處女であつた。」と得意滿面であつた。

大液池の船遊

嘗て昆崙山の沙棠を以て船を造り、雲母を以て鷁首を飾り、大液池に泛んで飛燕と歡を盡くした。此時帝自ら文犀の簪を以て玉甌を擊ち、飛燕の愛した馮無方に笙を吹かしたが中流に於て俄に大風が起り、船が波に動搖すると、飛燕は袖を揚げて立つて舞ひ「仙なる哉。仙なる哉。故を去つて新に就く、好し仙となり去るも何ぞ懷に忘れんや」と謳ひ、將に飄々乎として風に順ひ去らんとした。帝は無方に命じて飛燕の袖を握かましたが、雨霽れ風歇んで後、飛燕は悵然として、「帝の我を愛する渥き、我をして去つて上仙せしめなかつた」と。涙數行下つた。帝の愛情は一段と燒くが如く昂進し、終に許皇后を廢して飛燕を皇后とし、趙皇后と尊んだ。

合德の肉體美

合德も召されて趙昭儀と稱せられ、姉飛燕以上に愛幸された。合德は非常な肉體美で纖細な姉とは正反對であつた。飛燕は平素五蘊七香の香湯に浴し、降神五蘊香を濺ぎ、合德は荳蔻湯に浴し、露華百英粉を傳けた。帝は「后の體に異香あるも、昭儀の體の自づから香ばしいに如かぬ」と言ひ、毎夕蘭湯に浴する合德の裸體美を賞觀した。

蘭湯の覗き見

玉を偷み香を竊むが如く、幃の中から合德の湯上り姿に眸を凝らして居ると、洛神宓妃が霞に掩はるゝやうに、湯氣につゝまれて立つ美しい肉塊、纖腰一捻、雙肩削るが如く、皓腕小趾、玉を展べたる如く、遺に成帝も魂魄の飛跳を覺えて嘆聲を洩らした。斯くと知つた合德の侍女は、直ちに合德へ報告に及んだ。その後合德は入浴に際して燭を撤したが帝は多くの金を侍女に賂うて火を點させ、毎夕飽かず肉の美に儻れ、「三尺の明玉寒泉に浸る」と褒めた。

若者と亂行

飛燕は早く皇子を設けて身の安定を得んと欲し、近侍や宮奴の若者を己が室に引入れ、盛に姦通した。燕赤鳳、慶安世、馮無方、陳崇の子などが、女裝して小犢車で日に幾回となく交迭出入し、邪淫を肆にしたが遂に娠まず。合德も亦赤鳳と通じ、姉妹喧嘩さへ演じ、醜聲は漸く高まつたが、知らぬは亭主たゞ獨りであつた。

詐つた妊娠

此時帝の愛は殆んど合德に移つてゐたが、飛燕は一策を案じ、己が誕生祝ひに帝を招じ、その席で昔しの惚け話を持出し、定情の夜の帝の齒痕を示しなどして一夜鴛鴦の衾を温めた。後ち三月目に、僞つて帝の胤を宿したと稱し、「天日懷に入り、聖躬體に宿る」と奏上した。月滿つるに及び、上下こも〴〵慶賀して出產準備が整へられた。飛燕は宮奴の王

盛と謀り、民間の嬰兒を百金で買ひ、囊に包んで歸へらしたが、宮門に來ると大聲で啼き出すので、連れて入れず、彼是するうち十二ヶ月となつた。堯は十四ヶ月母の胎内に居つたといふ故事によつて、却つて賢兒を擧げるものと期待され、飛燕も進退谷まつた。

皇子を啄む

その後飛燕は、他の宮嬪の孕むものがあれば墮胎させ、生むものあれば蟄死させ、多くの皇子を啄んだ。のみならず氣隨氣儘に振舞ひ、病氣の時などは、帝に茶碗や箸を執らせ嬰兒のやうに哺ませて貰はねば食はなかつた。合德も專房の寵を恃み、放縱を事とし、帝はその間に在つて漁色に溺れた。

房中藥の中毒

歡樂極つて哀情多し、帝は或日早朝に獵に出で、雪に遭うて疾を得、徒に合德の足に攀ぢて纔に慾望を醫するのみとなつた。時に方士が强腎の奇藥を献り、日に一粒を服し一夕の幸を得るに至つたが、合德が醉うて七粒を一度に進め、奇藥の中毒を起して九成帳内に昏々として遂に起たず。須臾にして崩じた。

合德の自殺

飛燕が急を聞いて馳せ來り、合德を責めたが、合德は憶する色も見せず

「妾人主を見ること嬰兒と異らぬ。今日まで寵は天下を傾け、帝王を股間に弄した。固より覺悟はある。此際何の畏るゝところかあらん」と言ひ放ち、自ら胸を柝ち血を嘔いて死んだ。

八、贏ち得たり輕盈二八の麗人

〔後漢　陰麗華と光武〕

運命の寵兒

「妻を娶らば當に陰麗華（美人の名）を得べし、仕官すれば當に執金吾（天子の先導警衛を司る近侍の臣）となるべし」といふ理想を以て居た一青年が、遂に群雄を征服して四海を定め、身は帝王の尊に上つて初戀の人陰麗華を皇后に册し、皇后の兄を執金吾として頤使するに至つたことは、運命の寵兒とはいへ、餘りに豫想を超越した榮達である。

青年の理想境

運命の寵兒とは誰れか、東漢の高祖光武帝（劉秀字は文叔）である。帝がなほ汝南の片田舎に雌伏してゐた頃、長安の都に遊び、街衢を疾驅する執金吾の車騎の威勢よきを見、

「男兒もし仕官するならば、斯くの如く勇ましい官職を贏ち得ねばならぬ」と羨望した。

又南陽の新野に遊んだ時、新野の人陰君孟に一少女あり、輕盈方に二八、夭桃露を含むの貌、細柳風に臨むの姿、絶世にして獨立、又と無い美人であると聞き、銷魂の思ひに堪へ

ず、「男子もし妻を迎ふるならば、宜しく斯くの如き明珠を掌中に入るべし」と嗟嘆した。こんな希望心に燃えるのは青年時代の常情で、何等異とするに足らぬが、これを目的として奮闘し、よく理想の彼岸に到達し得た人こそ床しさも一入増すのである。

王莽が西漢の國祚を奪ひ、群盜が各所に蜂起するに及び、劉秀は兄劉縯と共に義兵を擧げ、莽の大軍を破つて功業の曙光を認めた。此時郡縣が響應し、向ふところ敵なきを以て軍を南陽に進め、麾下の士を派して陰麗華に婚を申込んだ。麗華も天來の福音に驚き且つ喜び、早速快諾を與へたので、陣中に華燭の典は擧げられた。麗華は時に年十九であつた。劉秀は東伐西討の軍中へ新妻を携へることも如何やと、兄陰識に託して暫しの別れを惜しんだ。

陣中で結婚

兩手に花

翌年春、王郎を擊つて眞定に至つた時、眞定の藁城に、郭聖通といふ美人が居り、家には數百萬の財産を積み、家柄も立派であるので、家臣の勸めるまゝに、納れて妻とし、功成つた曉は、麗華と共に兩手に花と眺める慾望を懷いた。郭聖通は、大家の生れだけに、丰神娟秀、擧止端妍、禮節に嫻ひ、母儀の德を具へてゐた。麗華を桃とすれば、聖通は梨の花であつた。この兩人を英雄光武に配することは最も適はしいものであつたに相違はない。前者は初戀の理想美人、後者は體面上の主婦格で、英雄の好色とのみ斷ずる譯にゆかぬ。故に四海を戡定して卽位した時は、兩人を洛陽に迎へ取り、聖通を立つて皇后とし、麗華は貴人として寵愛した。

兩美人の子

郭皇后には東海恭王彊、沛獻王輔、濟南安王康、阜陵質王延、中山簡王焉の五子があり、麗華は光武卽位後四年、彭を征する軍に從つて行き、旅の空で顯宗（明帝）を生み後ち東平憲王蒼、郭陵思王荊、臨淮懷公衡、瑯邪孝王京の五子を生んだ。

兩美並び立たず

「英雄並び立たず」といふ語があるやうに、美人の英雄に於ける、亦並び立つことは難かしい、郭皇后と陰貴人、資格こそ異るが光武の愛は無差別同等といふ譯にゆかなかつた。矢張初戀の理想美人が、床の置物のやうな皇后よりも可愛かつた。本妻よりも妾の愛に溺れるのが凡人の常であるやうに、光武も陰貴人の方が可愛かつた。愛の厚薄に對する兩美人の一方に嫉妬の燃えるのも當然である。如何に郭皇后に母儀の德はあるとも、女は女である。光武が陰貴人のみを愛するに堪へ得る筈がない。併しこんな場合に燒かれると燒くが爲めに一層愛が薄くなるのが常である。光武は遂に意を決して郭皇后を廢して麗華を皇后に立てんとした。その詔が振つて居る。曰く、

皇后廢立の詔

「皇后怨懟を懷き、數ば敎令に違ひ、他子を撫循する能はず。宮闈の內鷹鸇を見るが若く、既に關雎の德無くして呂霍（呂武・霍后）の風あり。豈に託するに孤幼を以てし恭〻しく明祀を承くべけんや。今大司徒涉・宗正吉を遣はし、節を持し、皇后の璽綬を陰貴人に上る。宜しく宗廟を奉じ、天下の母主たるべし云々。」

陰后の人爲

郭皇后は中山王輔（のち沛獻王）の國に徙つて中山王太后と稱し、麗華が代つて陰皇后となり、その子顯宗が皇太子となつた。

陰皇后は、寵を爭うて郭皇后を譖したのではなく、性至つて仁孝、笑謔を好まず、嗜慾少く、七歲の時父を失ひ、已に數十年になるが、談が偶ま父のことに及ぶと、流涕して悲んだ。子顯宗が位に卽くに及び、尊んで皇太后とされ、のち年六十で崩じた。

明帝（顯宗）も母親に似た孝行もので、十七年の後一夜夢に先帝と太后とを見、寤めて眠る能はず。明旦百官を率ゐて陵墓に展し、太后の鏡匳を視て感動悲泣し、左右百官も皆泣いて仰ぎ視るものが無かつた。後ち光烈陰皇后と謚した。

郭后の寵が衰へて、陰后が之に代つたことにつき、後漢書の論贊は、

「物の興衰、情の起伏、理固より然るものあり。崇替去來の甚しきもの、必ず唯だ寵惑か。その牀第に接し、恩色を承くるに當つては、險情贅行と雖も、德ならざるは莫し、意愛を移し、嫌私を析くに至つては、悃心妍狀と雖も、愈醜を獻ずるなり。愛升れば則ち天下もその高觀を容るゝに足らず、志士の沉溺し君人の抑揚する所、未だ之に違ふものあらざるなり。郭后衰離を以て貶せられ、恚怨尤を成して〻恩を別館に加へ、寵を黨戚に增し、後世をして、隆薄進退の隙を見せざらしむ。亦古に光あらざらんや。」

廢后の厚遇

穿ち得た言である。文中、恩を別館に加へとは、郭后を中山王太后とし、後ち沛王太后として尊ばれしこと。寵を黨戚に增すとは、郭后の弟況を大鴻臚卿に封じ、從兄竟を新郪侯に封じ、母郭主に謚して思侯とし、況の子璜に淸陽公主を尙し、その一族を取立てたことを指す。廢后を禮遇し、一族を封爵した例は頗る稀れである。これ光武が大量よく赤心を推して人の腹中に置いた所以である。眞の英雄、眞の麗人に外ならぬ。

九、是れ人か是れ玉か分明ならず

〔三國　蜀　甘后と先主〕

玲瓏玉を欺く

『詩經』に「白茅純束、女あり玉の如し。」古詩に「燕趙佳人多し、美なるもの顔・玉の如し」といつて居る。蓋し女性の艶美を比するに、古來多くは花と玉とを以てする。花はその姿貌の美を形容し、玉はその肌膚の温潤に比喩する。事實花に比して花は反つて色なく、玉に比して玉は反つて光なき程の美人が居る。

后の生立ち

『神女賦』に所謂花の如く瑩の如き美人を歴史上に求めると、その數必ずしも少くない、就中、その色の白きこと雪の如く、透明瑠璃の如き美人は、蜀漢の先主劉備に寵せられた甘后その人を以て第一とする。

甘后は沛の片田舍に生れた微賤の生立ちであるが、幼時その里の占ふ者が、「此の女は成育して宮掖に入り、后位に上つて尊貴を極める相を備へてゐる、貌容が普通人とは異つて居る」といつた。果して芳紀十八歳に至つて、愈よ妍美を增し、輕花薄霧もその温柔を喩ふるに足らず、微月澹雲もその神韻を方ぶるに足らなかつた。軈て嘖々たる美名は先主の耳に入り、晏車を以て召され、後宮の一員に備はつた。

人か雪か

甘后は常に白紗の帷幄の裡に置かれたが、白粉を施すを須ゐずして肌は雪を欺き、戸外から之を望むと、恰も「月下の聚雪」かと思はるゝまで白く、人か雪か、雪か人かと怪しまれた。

美人と玉人

此時河南地方から、寶石を彫刻した高さ三尺の玉人を奉献したものがある。彫琢の精巧なる、眉目動くが如く、人間の佳麗も之に對しては殆んど顔色を失つた。先主は喜んで座側に置き「想はざりき、玉人を同時に二人も得んとは」と悦に入つた。晝は軍學を講じ、戰謀を廻らし、諸葛孔明を以て魏と吳に抗し。夜は后を擁して玉人を玩弄し、玉人と后と瑩然一色、妍媸を見出し得なかつた。

玉人を嫉視

玉人愛すべく、美人尤も愛すべし、塵世絶無のもの二つ。先主は愛を玉人と美人とに混同した。事實玉人と后との潔白精潤は、更に見分けがつかなかつたのである。是に於て、多くの宮人は甘后の寵を妬むと共に、非情の玉人が有情の人に似るを惡み、玉人を嫉視した。

甘后の獻言

甘后の潔清はその姿容のみに止まらず、その精神も亦温玉の如く優に美しかつた。或日先主に說いて曰く、

「昔し、宋人が玉を子罕に獻じた時、子罕は之を斥けて、爾は玉を以て寶と爲すも、我は貪らぬを以て寶となす。玉は我に於て不用であると言ひ、それを受けなかつた。之が爲め、孔子は春秋を作つて特筆し、これを美とした。凡そ物を弄して志を喪ふは庸主の爲すところ。今や魏・吳ともに未だ夷らがず。何ぞ妖玩のものを以て聖慮を惑はし給ふや。冀はくは今後玉人を退け、賢人を近け給へ。」

宮人德に服す

と、先主は俊邁の質、その言に接して飜然として悔い、惜し氣もなく其の玉人を毀たし同時に嬖臣を退けてしまつた。

宮人は甘后の賢明に服し、嫉妬の焰を收めて敬事し、神智の后と稱して其の德に服した。

「月下に輕く元幅の裙を拖き、
偏に惹起せしむ宮娥の妬み、
珠簾掩映して湘君に似たり、
玉質柔肌兩つながら分たず。」（袁簡齋）

宮掖に入る不安

血涙凝る

一〇、潸々たる血涙玉壺に凝る

〔三國魏　薛夜來と文帝〕

年少くして父母の膝下を離れ、嫁して他人の家に行くことは、娘にとつて大なる不安であり恐怖であつた。それは今日の時勢とは違ひ、三從七去の桎梏さへ附隨する往時に於ては、一層その感が深かつたであらう。況んや、お上を笠に着たお役人の强制に遭ひ、一度選に入つては、又と再び還へれぬ宮中に入り、多くの妬婦の群中に投ずることは、全く死地に曳かるゝ悲しみを覺えたに相違はない。晉宮に選ばれた胡貴嬪が、宮中で泣き叫んだ如きは、詐りのない率直な感情の發露そのものであつたらう。

魏の文帝の咸熙元年に、良家の子女として選に當り、迎へられて宮中に入つた常山の薛靈芸が、父母に別れるに際し、歔欷連日、車に援け乘せられ、上京の途に就いた時、玉唾壺を以てその涙を盛つたが、壺中に溜つた涙は紅色を呈した。そして宮城に到着した頃にはその涙は凝つて血色と化した。所謂血の涙とは是れであらう。

潸々たる血涙玉壺に凝る

文車の親迎

文帝は、立派に飾つた文車十乘を以て郊外數百里のところまで出迎へた。車輪は金を鏤め、轂は丹で畫き、軛の前には雜寶を裝ひ、龍鳳を作つて百子の鈴を銜ませ、鏘々和鳴して林野に響いた。駕した牛は青色で、日に行く三百里、足は馬蹄のやうであつた。

麗宵

靈芸がまだ京師に到着せぬ前夜、道傍數十里の間、石葉の香を焚き、膏燭の光を列ね、車塵空を蔽うて星月暗く、時人之を塵宵といひ、燭臺三十丈、遠望すれば列星の地に墜つるかと思はせた。又一里に一銅表高さ五尺のものを建て〻里程を誌した。行く者謠つて曰く、

妖辭

「青槐道を夾んで塵埃多し、
清風細雨香を雜へて來り、
龍樓鳳闕は崔嵬を望む、
土上金を出し火は臺を照らす。」

と。結句七字を妖辭と評するものがあつた。漢は火德、魏は土德を以て王たるもので、土上に金（銅表のこと）を出し、火伏して土興る（燭臺）は魏滅して晉（金德）興るの徵であると。

改名

文帝は、靈芸の車騎の壯なるを望み、「昔は、朝に行雲となり暮に行雨となると、今は雲に非ず雨に非ず、眞實人間界の神女である。」と嘆美し、靈芸の名を改めて夜來といつた。

生ひ立ち

靈芸の父は一鄕の亭長であつたが、家固より富めるでもなく、夜になると、近隣の婦人が聚つて共に麻を績いだものである。年十五に至つて、容貌絕世、脂粉を假らずして春華と妍を爭ひ、里中の青年が、夜になると牆外に集つて、垣間見んとして騷いだ。谷習といふものが偶々常山郡の宰となり、靈芸の盛名を聞き、朝に奏上したので、千金を以て聘せられることゝなつたのである。

專房

宮中に入つて後は、專房の寵を受け、外國から火珠襲鸞の釵を獻じたものがあつた時、文帝は、夜來の美はそんな裝飾を假るの必要を認めぬといつて退けた。

鍼神

夜來は裁縫に巧みで、深帷の內に居つても燈燭の光を用ひずに、裁ち縫ひを上手にした。宮中では鍼神と號し、文帝は夜來の縫うたものでなくば服用しなかつた。

文帝の詞藻

文車遙に駕して澤新に承く、
猶ほ親に別るゝ無限の恨あり、
高燭香塵夜を徹して騰る、
盈々たる血淚玉壺に凝る。」（宮詞）

× × ×

文帝は父武帝の如く、當時一流の詩人であつた。殊に樂府に巧みで、その作は喨々吟ずるに堪へたものが多い。良人の遠戍を思ふ婦人の情を謳へる『燕歌行』に曰く、

潸々たる血淚玉壺に凝る

「秋風蕭瑟として天氣凉しく、
群燕辭し歸り雁南に翔る、
慊々として歸るを思ひ故郷を戀はん、
賤妾煢々空房を守り、
覺えず淚下りて衣裳を沾ほす、
短歌微吟長くする能はず、
星漢西に流れて夜未だ央ならず、
爾獨り何の辜ぞ河梁を限る。」
燈下に詠じて居る時、夜來が入つて來た。卓子の周圍には水晶七尺の屏風を繞らしてゐたが、透明で目に觸れず、夜來がその屏風に衝突して面を傷け、紅血頰を染めて艶更に媚びて見えた。これから宮人は臙脂を以て面に施し、曉霞粧といふ一種の化粧法を創意した。

草木搖落して露は霜と爲り、
念ふ君客遊して思ひ腸を斷ち、
君何ぞ淹留して他方に寄る、
憂ひ來り君を思ひ敢て忘れず、
琴を援り絃を鳴して清商を發し、
明月皎々として我が床を照らす、
棄牛織女遥に相望む、

一一、竹を挿み鹽を灑ぎ羊車迷ふ

〔西晉　胡貴嬪と武帝〕

美女冒瀆　嫁娶を嚴禁

身を鋒鏑の間に置き、兵革に衽して天下を定めた創業の主は、子孫百年の大計の爲めに奢侈と放縱とを警しめるものであるが、西晉の世祖武帝の如きは、魏に逼つて國を禪らせ、なほ一敵國吳と對峙しながら、早くも既に聲色に耽り、頻りに美女冒瀆をやつたものである。

支那の女性は餘り外出せぬ。外出しても面を蔽うて居るから容貌など知りやうがない。隣家に住んでゐてさへ、年頃の娘が居るかどうかさへ知らぬ程である。そんな狀態にあるものを、朝廷の使臣が片端から物色して廻るのであるから、隱蔽すれば出來ぬことはない。そこで武帝は先づ令を天下に下し、

「娘の居るものは素直に申出よ、隱蔽した場合は不敬罪を以て論ずるぞ。物色中は他に嫁することも相ならぬ、許可が出るまでは嫁娶は嚴禁。違を犯すものは互に摘發せよ。狀を

竹を挿み鹽を灑ぎ羊車迷ふ